

---

# 魔法少女リリカルなのはvivid 銀の左手

楚良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは v.i.v.i.d 銀の左手

### 【Zコード】

Z0590V

### 【作者名】

楚良

### 【あらすじ】

第2騎士王の末裔であるアレン。  
聖王のクローンであるヴィヴィオ。  
霸王の血統であるアインハルト。  
3人の王は一体どんな物語を作り出すのか。

## プロローグ（前書き）

今作品にきていただいてありがとうございます！  
作者の楚良シラフです。

今回はプロローグです。

## プロローグ

「ハツ、ハツ、ハツ」

髪の毛は白、左目が灰色、右目が紅のオッドアイで、左手が真っ赤な少年は病院へ向けて走っていた。

12月25日。世にいうクリスマスの夜。

病院から唯一の肉親である母親の容体が悪化したと連絡を受け、自分が名を呼んでいると言われ飛び出してきた。

「母さん！」

ガラララッ！――！――！

横開きのドアを勢い良く開けて少年は母親がいる病室へ入った。息切れをすぐさま治して、苦しそうに胸を押さえている母親の元へ駆け寄る。

「母さん、しつかりして！」

「ハア、ハア……」

母親は苦しそうにもしながら少年の真っ赤な左手をそつと握り、心配しないで、と小さく呟やいた。

その後に少しだけ握る力を強め、右手で少年の左手に黒い手袋を付けてあげた。

「母さん？」

「誕生日、おめでとう……アレン……」

「」

手袋を付け、しつかりとボタンを閉めると少年 アレンの左手は普通の人と同じように、真っ赤ではなく肌色になっていた。だけど、そんな驚きの気持ちは一瞬で悲しみに変わった。

左手に添えられていた手がだらんと崩れ落ちるよじて倒れた。それは、母親が力尽きたのをアレンにわからせるには十分だった。

かあさん？

だらんと落ちた腕をアレンは掴んだ。  
しかし、腕からはさつきみたいなぬくもりは失われており、酷く冷  
たくなっていた。

アレンはその場で泣きました。

12月25日。クリスマスの夜にその鳴き声は夜空へ響き渡った。

## プロローグ（後書き）

最後まで見ていただきありがとうございました。  
今作品は勢いとノリと気合いと根性で完結へ向けて書いていきたい  
と思っていますので応援よろしくお願いします！

次回はキャラ紹介をしたいと思います。

誤字脱字、感想もあればお願ひします。

## キャラ紹介

名前：アレン・クラージ アレン・カミタ

年齢：12歳

性別：少年

容姿：白髪で紅と灰色のオッドアイ。

髪型は『D·Gray man』のアレン・ウォーカー同様

性格：基本優しい。ゲームなどの時などは腹黒くなる

レアスキル：騎士ノ剣ナイト・アームズ

備考：左手の手の甲に赤い十字架が埋め込まれている。

発動状態は『D·Gray man』に出てくる十字架。  
非発動時は左手が真っ赤に染まっていて最初のころはみんなに気持ち悪いと言われていて友達が出来ていなかつた原因の一つ。  
騎士王のレアスキルである。

術式：古代ベルカ式

趣味、特技：読書、体を動かすこと、イカサマ、お金を増やすこと

好き：食べ物全部、動物

備考：本作主人公。第2騎士王の末裔。

左手が騎士王のレアスキルのせいで真っ赤に染まつており、St.  
ヒルデ魔法学院中等科に編入する前はこの左手のせいで友達が出来

なかつたとう黒歴史がある。

誕生日は12月25日で、9歳の誕生日母親を亡くすと同時に黒い手袋を貰う。貰った黒い手袋を付けると左手が普通の人と同じになる。

レアスキルで巨大化した銀の爪は殺傷設定のオン、オフが効く。  
AINHARDTと同じように武装形態と大人モードが使える。

デバイスは補助型の『ティムキヤンピー（愛称ティム）』

小さい頃から父親が残した借金を返済するためと、母親の入院費を稼ぐために博打をし始める。勝つためには何でもするのでイカサマを覚えた。普通のゲームでもよく勝ちを偽ったりもする。

最近ようやく借金返済が終わり、お金をどうしようかと考えているらしい。

外見に似合わずものすごい大食漢。

量で言うならスバルやエリオが比じられないほど。

好きな食べ物はみたらし団子。

最近のマイブームはチエスらしい。

ICV：小林沙苗（アレン・ウォーカー、初代リインフォースなど

IC：アレン・ウォーカー（D·Gray-man

武装形態時イラスト

> i 2 7 7 9 1 — 2 0 5 4 <

名前：ユウ・カミタ

年齢：24歳

性別：女性

容姿：青と緑のオッドアイ

青みがかかった緑で長髪

性格：優しく、心配性でちょっとだけ過保護

アレンにはちょっと厳しいが母親のように優しい

術式：古代ベルカ式

趣味、特技：料理、教導、読書

好き：アレン、休日に思いつきり寝ること

備考：アレンの保護者代わりで教導隊所属の管理局員で第1騎士王  
末裔。

なのはと同じ教導隊で階級も同じく一等空尉。スバルとティアナとも知り合い。

アレンが9歳のころに出逢い、天涯孤独と言う事を知り引き取り、  
それから3年間共に生活を送ってきた。後にアレンを正式に養子として  
引き取り母親となる。

少しばかり古代ベルカの事についての知識もあり、アレンに昔の事を  
話すこともあつたりする。

デバイスはインテリジェントデバイスで脚部装着型。

空中戦、陸戦、水上戦共に難なくこなせ、本気でリミッター無しの

なのはと戦つて勝つたことがあるほどその実力の持ち主。アレンの師匠でもあり、アレンの良き理解者でもある。好きな食べ物はイチゴのショートケーキとチーズケーキ。最近のマイブームはアレンを愛することらしい。

ICV：伊藤 静（リナリー・リー、桂ヒナギク、オットー&ティー  
ド他

IC：リナリー・リー（D·Gray-man

## キャラ紹介（後書き）

アレン君左手は『神ノ道化』ではありませんよ？  
初期のころのあのおつきな手ですからね。

それと騎士王とかの設定をちょこっと。

- ・騎士王は数人いた。
- ・第2騎士王のレアスキルは人体の武器化がメイン。
- ・第2騎士王は聖王と霸王の2人ともつとも縁がある。

こんなもんですかね。

追加とかが有ればその都度言いたいと思っています。

というわけで次回から本編開始！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第01話 3人の王（前書き）

第01話です！

今日はいきなりインハルトとヴィヴィオと出逢います！

## 第01話 3人の王

「ハツ！セイツ！ハア！」

ある日の夜。

ミッドチルダ、公共魔法練習場。  
そこで白髪で左手が巨大な銀の爪を振っている黒と白の服を身にまとった少年は鍛錬に明け暮れていた。

「？ なんだ、この感じ・・・」

魔力反応ではない何か。

少年は何かを感じ取ったのだ。

何かはわからなかつた。

だけど自分はこれを知つてゐる。

「 神ノ十字架 クラウン・クロス 解除」

バリアジャケットらしき黒い服を脱ぎ、巨大な銀の爪を戻してから真っ赤になつてゐる左手に黒い手袋を付けた。

赤かつた左手は手袋を付けたと同時に普通の人と同じようになる。少し握つたりひらいたりを繰り返し、異常がない事を確かめてから少年は感じ取つたものの方へ向けて走り出した。

「大丈夫ですか！？」

「うう・・・」

「今、警察とか呼びますから つ！？」

現場へ着いた時には、1人の格闘家らしき男性が倒れていた。目立った外傷はみられないが、一応念のために警察を呼ばせよう。だがそんな彼の眼に1人の少女が映った。

「君は・・・」

「・・・」

バイザーを付けた碧銀の髪を持つ少女は、その髪を揺らしながら背を向けて何処かへ行ってしまった。

少年はただその背中を見つめ続けるしか出来なかつた。

side out

「ナカジマ陸曹」

「はい？」

「昨晩、最近の連續襲撃事件の容疑者と思われる少年を確保したので、事情聴取をお願いしたいと思いまして」

「わかりました」

陸士108部隊。

そこに所属するギンガは事情聴取の依頼をされていた。

事件、と言つてはいるがまだ被害届が出ていないので事件ではないらしい。それでも物騒でもあるので調べてはいたようだ。

「失礼します」

「ああ、ナカジマ陸曹」

「えつと、この子が容疑者の疑いがある子ですか？」

「はい。名前はアレン・クラージ、12歳。St・ヒルデ魔法学院中等科に編入を明日に控えていて、昨晩駆け付けた時には変身魔法で大人の姿になっていた彼がいました。それと……」

資料を読み上げていた隊員とギンガがアレンへ目を向ける。特に問題はなさそうだが、何があるのでだろうか。

「ちよ、やめて下さ……これだけは本当にやめてください……」

左手につけていた黒い手袋を外すとするもののすぐ否定する。絶対にとらないぞといわんばかりに右手で押さえている。

「あのう、左手の手袋を取らないんですよ。少し怪しこんですがどうしましょう」

「わかりました。後は任せてください」

「お願いします」

ギンガにその場を任せて他の隊員達はその場を後にする。

そこに残つたのはギンガとアレンだけだった。

「えっと、アレン・クラージ君でいいんだよね？」

「はい」

「その左手の手袋だけど、どうして取りたくないのかな？」

「言わなきゃダメですか……？」

「うーん、無理に聞いりとは思わないけど、出来るなら聞かせてほしいな」

「……わかりました、取ります」

ちょっと考えてからアレンは決意したようだ。  
左手の手袋のボタンを外し、手から外す。

すると、さっきまで肌色だった腕が少し間をおいてから一気に真っ赤に染まった。しかも手の甲には赤い十字架が埋め込まれてもいる。言葉で言い表すなら、気持ち悪いやグロテスクがぴったりかもしれない。

「気持ち悪いでしょ。だから外したくなかったんですね」

「うーんね。も、もひ、付けて良いよ」

「はい」

ギンガの許しを得てようやく手袋をつけなおしたアレン。それに対してもギンガは少し悪寒に襲われていた。

あんな子供の腕が真っ赤に染まっているなんて思わなかつたからだ  
うつ。背中にゾクリと寒気が走つていた。

「本題に入るけど、本当に君が連續襲撃犯なの？」

「だから違いますって！そりや、確かにあの場所にはいましたよ。  
でも僕はやつてませんし、連絡したのも僕です！普通犯人つて自首  
しないもんじやないんですか！？」

「あれ？ そうなの？ なら、犯人の顔は見た？」

「見てません。というか、バイザーを付けていたので見れませんでした  
した」

「そう・・・・・。わかつたわ。君はもう釈放よ」

「本当にですか！？」

「ええ、明日から学校なんでしょう？」

「はい、本当にありがとうございます！」

問題ないと見たギンガは資料の下のあたりに「問題なし」と書いた。  
いつもアレンは無事釈放されることとなつたのだった。

その日の夜。

side out

昨日と同じく公共魔法練習場で、アレンはまた鍛錬をしていた。

「 神ノ十字架 クロス・クロス 発動、武装形態」

左手の手袋を外して巨大な銀の爪へと変え、バリアジャケットを身にまと。そしていつも通り、素振りやジャブ、いろいろ一通りやつていく。

やつてる際には左手がブンッ！ブンッ！と風を切る音がしていた。

（あの感じ、僕に縁のある王の末裔たちが近くに居る時に感じるものだった。だからきっと彼女も王なんだ）

昨晩出逢ったあの少女。

碧銀の髪を揺らして、何処かへ行ってしまったがまたいつか会える気がしてならないアレンだった。

「… また、この感じは

再び、昨日と同じように感じ取った。

武装形態のまま辺りをきょろきょろと見回し、見つけた。

緑と紅のオーディアイの少女。

アレンの記憶が正しければ、それはまさしく聖王の証だ。

「あ、こんばんは」

「い、こんばんは」

最近、王の末裔達によく会うな。

そう心の中ではいたアレンだった。

## 第01話 3人の王（後書き）

アレン君の左手、『神ノ十字架』はレアスキルで作られた武器です。  
『騎士ノ剣』で作られた武器には個々で違う名前がつくるのです。

ちなみに最初に出てきた時は大人モードです。

次回はヴィヴィオとちよつとお話し。  
その後にアインハルトと出逢います。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第〇二話 霊王と魔王と騎士王と（前書き）

アレン君の武装形態時イラストをキャラ紹介に追加しました！

## 第02話 聖王と魔王と騎士王と

「え、えっと……」

目の前にいるのは、緑と紅のオッドアイの少女。

僕の記憶が正しければ、彼女は聖王の末裔なのかもしない。

ちなみに、彼女は僕の左手を凝視している。

そりや、確かに珍しいし興味がわくかもしないけど、どうしたらいいのかなあ……。

「左手、すつごいですね」

「え、あ、ああ。レアスキルだから」

銀の爪となっている左手を凝視していた彼女はようやく口を開いた。  
これ、解除してもいいのかな。なんかすつごく微妙なんだけど。

「 神ノ十字架 クラウン・クロス 解除」

とりあえず、解除して真っ赤な手を即座に隠す。  
たぶん見られたと思うけど、出来るだけ見せないように下からいいだろう。最速で手袋を付けて色を戻す。

「 武装形態解除」

武装形態を解除してバリアジャケットも消す。  
子供の姿になつたから僕の方が目線が低くなつてしまつた。

「じゃあ、僕はこれで

「あ、待つて！」

「？」

彼女に呼び止められ、足を止めた。  
何かと思い振り返ると、彼女は僕と同じ田線でたつていた。ってあれ？小さくなつた？

「私、高町ヴィヴィオ。えっと・・・」

「・・・アレン。アレン・クラージ

「アレン君、また今度ね」

「うん。じゃ、お休み」

ヴィヴィオに別れを告げてその場を後にした僕だった。

side out

翌日。

朝に田が覚めたら時間はもう8時を回っていた。  
今僕は全力疾走で編入先の学校へ向けて走っていた。

「ハア、ハア、ハア・・・・ん、はあ

なんとかギリギリセーフ。

教室の前で待機と言わされたので息を整えながら待つ。

『クラージ君、どうぞー』

「はい」

横開きのドアをガララと音を立てながら開け、前の方まで歩いて行く。いつも時は最初が肝心なんだ。笑顔だ笑顔。

「アレン・クラージです。みなさんと一緒に一日でも早く仲良くなれたらいいと思っていますので、ようじくお願ひします」

「クラージ君は、一番後ろの席。ストラトスさんの横に座つて下さい」

「わかりました」

自分に指定された席へ向かい、机の横に荷物をかけてから座る。隣には、つい先日みた碧銀の髪と同じ色の髪を揺らした僕と同じオッドアイの少女がいた。名前は確か、ストラトスって言つてたけどたぶん名字だろ？。

「アレン・クラージです。よろしく」

「AINHARDT・STRATOSです。よろしくおねがいします」

本名はAINHARDTらしい。

それにもかかで会つた事があるように見えるのは氣のせいかな？氣のせいだよね。

「つかぬ事をお聞きしますが、騎士王の末裔の方ですか？」

「え？ ああ、よくわかったね。僕は第2騎士王の末裔だよ。どうしてわかつたの？」

「いえ、ただ記憶の中に白髪で灰色と紅のオッドアイは騎士王だと呟つのを覚えていました」

「へへ、そりなんだ。もしかしてベルカの歴史とか詳しいの？」

「そこまで詳しく述べりませんが、知っている分には知っています」

「そつか。じゃ、改めてようしぐ、アインハルト」

「よろしくおねがいします」

また新しい友達が増えた。

今日はそれだけで十分に嬉しかった。

side out

無限書庫。

次元世界のあらゆる情報がそこにある。

中には古代ベルカの事もあつたりする。

今日、僕はこの前会つた碧銀の少女の事について調べるために来た。

「えっと、古代ベルカ戦争の文献とかは・・・あ、あった

それらしき本を見つけ手に取る。  
ペラペラとめくり、これが探していたものだとわかるとゆっくり見始めた。

「碧銀の髪を持つこの人は・・・霸王？隣に居るのは、女性だけど、僕と同じ髪と田の色をしている。もしかして、霸王と第2騎士王は親しかったのかな？」

ぶつぶつと独り言を喋りながらいろいろと考える。

今のところわかっている事は、霸王と第2騎士王、そして聖王は歴代の王の中でも最も親しかったらしいこと。

そして、霸王と第2騎士王は主従の関係。戦場では彼らのコンビネーションに敵う者はいなかつたそうだ。

「・・・霸王と、戦つてみたい。この左手が、僕の力がどこまで通じるか試してみたい」

ふと思つた事を口にしてしまつた。

それに、彼女を見たときに心のどこかで思つてしまつたのかもしない。彼女と話をしてみたい、お互いにわかり合つてみたいと。

「アレン君？」

「？ あ、ヴィヴィオ」

呼ばれて振り向けばそこには昨晩出逢つた聖王、ヴィヴィオがいた。

## 第〇二話 霊王と魔王と騎士王と（後編）

次回はついにアレン vs アインハルト！  
一体勝つのはどちらだ！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第03話 2人の騎士王（前書き）

今回は初挿入絵を入れました！

え？どうせへたくそじゃないかって？

そうですよーへたくそですよーでも、描きたかったからいいんです

！

## 第03話 2人の騎士王

「ヴィヴィオ達も同じ学校だつたんだ」

僕は今、無限書庫に居る。

そこで昨晩出逢つたヴィヴィオと、その友達のリオとコロナの3人と話をしていた。

まさか同じ学校とは気がつかなかつた。

初等科4年生だつけ？

「アレン君は何の本見てたの？」

「僕は古代ベルカ関連のものだよ。気になることがいくつかあってね」

「そつか。アレン君つてそつと語りの好きなの？」

「好きって言うか興味はある、かな」

頭をポリポリ搔きながらちよつと誤魔化す。  
興味があるじゃなくて、戦つてみたいだからね。

「あ、もう時間だ。じゃ、また今度ね」

「うん、じゃあね」

「お、来た来た」

住宅地の中の一軒家。

そこに住む女性は、玄関のドアにつけたベルがが鳴ったことで同居人が帰ってきた事に気づく。すぐさま立ちあがり、ちょっとと小走りで玄関まで行き同居人へ飛びついた。

「おっ帰り～、アレンぐーん」

「うわっ！？」

「ドシャッ！」

ものすごい音を立てながら、女性とアレンは玄関で倒れた。正確には女性がアレンを押し倒した、だが。

「ちよ、コウさん、重いです・・・」

「む？女性にそんなこと言いつてもいいのかな？アレン君」

押し倒された状態でアレンは女性　コウ・カミタに向かつて呟いた。それを聞き逃さず、コウはさらに力を入れて体重を掛けた。

「うあああーー『めんなさい』『めんなさい』嘘です！冗談です！」

「ホントかな～？」

「本当ですー！」

「嘘だね」

「氣のせこですか。」

必死で退いてもいるかと近所迷惑にならない程度に叫ぶ。  
しばらく同じことを繰り返していくと、ようやく諦めてくれたか、  
コウはアレンの上から離れすべつと立ち上がった。

「で、なんだつけ？」

「ぶちっ！！」

アレンの頭の中で何かがキレる音がした。  
だがアレンもそこまでバカじやない。どうせ向かつたつて敵わない  
んだからと思ふことである。

「霸王の事についていろいろ聞きたいです」

「といひ事は霸王とあつたんだね。第1騎士王の末裔である私の予  
想は大当たりだ」

「わかりましたから、早く教えてください」

「はーはー。中でお茶でも飲みながらゆくつお話をしよう

そつ言いながらリビングへ向かうコウ。

正直、アレンはお茶とかどうでもいいから早く知りたいと言つ本心  
があつたが、やはり逆らつても敵わないのではしなかつた。

リビングへ入るとそこは普通に、いやすゞくきれいな部屋だった。  
特別何かが施されてるわけでもなく、彼女の綺麗好きのせいどころ

なにきれいな屋へになつてこゐるのだ。

自分も住んでいるが、やはりきれいすぎて落ちつかないと嘆つのがアレンの心の声だ。

「どうせ無限書庫行つたけど、おともな情報得られなかつたから来たんでしょ」

「正解です。まあ、霸王と第2騎士王の関係ぐらいはわかつましたね」

「はー、ハハア」

「あつがとうござります」

「なら、どうから話そつかなー。とりわけ、そこまで重要つてわけじゃないでしょ?」

「いや、でも、その・・・。思つかけたんですね」

「何を?」

「霸王と僕の力、どちらが強いか。霸王と戦つて、話して、わかり合つたって」

「つまりは戦つてみたくて友達になりたいって事だね」

「ずすずと音を立てながらヒーローを飲むコウに対し、アレンは静かに自分の思いを打ち明けた。

コウはアレンの事をよく知つていた、といつより保護者代わりだから別に何かを言つわけではなかつた。だからこそ、静かに見守つて

あげようと思つていた。

「明日の夜、仕掛けてきてもいいですか？」

「う～ん、それはアレン君の勝手だけど、絶対に他の人へ迷惑かけちゃダメだよ？」

「ありがとうございます」

「ところで、話は変わるけど今晚何食べたい？」

「・・・」

「遠慮しないでって、毎日言つてるでしょ」

「な、な、な、オムライスとハンバーグとチキンとサラダとスペゲッティと etc etc が食べたいです」

「なら、買い物行こうか」

「はい」

2人で買い物に出かけ、その日は特に何もなく終わりを告げた。

s i d e o u t

休日であるため今日はアレンが朝の食事当番だった。

翌日。

ユウは朝にめづらしく弱い。

頭痛がするーとか、お腹が痛いーとかではなく、何でか朝に弱い。

きっと頭の中が整理できていなんだろう。

頭の中にいろいろと情報がダウンロードされてきて、だいたい10時ぐらいでまた元になるぐらいだ。

「ユウさん、起き下ろす。朝ですよ」

「うう・・・まだ、寝る・・・」

「朝食出来ますから。覚めちゃいますよ」

「や・・・」

「ええ、でも うわっ」

寝返りを打とうとしたユウの手を掴んでいたアレンはそのまま遠心力でユウの横へ転がりこんでしまった。

目の前にはユウの寝顔。別に毎日一緒に寝ているから見慣れてはいるけど、朝と夜では何かが違った。

だが、そんな彼女をいち早く起こしたアレンはすぐベッドから降りて再びユウの体をゆする。

「スー、スー」

「あ、また寝ちゃった」

はあ、とため息をつきながら一人朝食を済ませようとしてリビングへ戻

るアレン。

1人庭で鍛錬をしていて、ユウが元壁に田覓めたのは遅めの12時  
「」のことだった。

s i d e o u t

その日の夜。

アレンは武装形態ではないが、大人モードで夜道を歩いていた。  
目的は霸王を見つけて出すことと、霸王と戦うこと。  
見つかるかどうかはわからないけど、会える気がする。  
ただそれだけの理由で探し回っていた。

「つ、こつちか」

先日感じたものと同じものを感じ取れた。  
そちらの方へ少し早足で向かうと、目的の人物　霸王がいた。

不意打ちを仕掛けるつもりはない。  
堂々と正面から仕掛けるつもりで、武装形態となり神ノ十字架を発動させながら歩み寄る。

「ストライクアーツ有段者、ノーザン・ナカジマさんと、お見受け  
「こんばんは、霸王」　つ

「誰だ、お前」

「初めまして、じゃありませんよな」

> i  
2  
7  
8  
7  
7  
—  
2  
0  
5  
4  
<

## 第03話 2人の騎士王（後書き）

次回こそアレン・アインハルト。  
挿入絵もあります。

ちなみにユウの名字『カミタ』は神田かんだをちょっとだけもじってみた  
だけです。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第04話 天に立つ霸王 地に伏せる騎士王

「「」んばんは、霸王。始めてじや、あつませんよね」

「あなたは・・・」

「僕のはグレイヴ・A・C・アーサー。第2騎士王末裔、アレン・クラージです。霸王、イングヴァルト」

「おー、ちよっと待てよ」

すっかりやる気満々になっていたが、隣に居る女性によつて止められた。一瞬いたのかわからなかつたが、思い返してみればいたのでそれによじとする。

「なんか2人してやる気満々みたいだけじ、アタシをおいて話を進めてもひつひつや困るぜ?」

「あー、で?なんですか?」

「だから、お前ら何なんだよー。」

「だから、お前らあいつたじやないですか。僕は第2騎士王末裔のアレン・クラージだつて」

「田のは?」

「あ、そうだった。霸王、单刀直入に言わせてもらつります。僕と手合わせをお願いしてもよろしくですか?」

「・・・わかりました。その勝負、お受けしましょ」

「おーおー、だから勝手に話を進める 「すいません」 がっ  
！」

ちよつといつもさかつたから殴つて氣絶させた。

本人いわぐ、軽くやつたから大丈夫なはず、だそうだ。

「これで、心おきなくやれますよね？」

「はい」

「では 行きます！」

風を切る音とともに、霸王へと走り出すアレン。

それに対し霸王は構え、迎え撃つ。

まずは横薙ぎの一撃。

それを空中へ飛び、軽くかわす霸王だがアレンは焦らすむけうなる追撃を仕掛ける。

大振りな左腕の攻撃をかわしきった霸王は、すぐさま着地してアレンの腹部へ渾身の一撃を叩きこんだ。

「ぐつ、がはつ・・・・！」

腹部への痛みを我慢しつつ、追撃に備えるために左腕を巨大化させガードできる状態にし後ろへと退きながら距離を取る。

「ぐ、う・・・」

「あなたでは、私には勝てません」

「・・・ふう、こんななんじや負けませんよ。いくら勝てそうにない相手でも、絶対に諦めるなが師匠の教えですから」

息を整え、再び構えなおすアレン。

一瞬強制解除された神ノ十字架を再び発動させ、爪を霸王へ向けた。  
「今度は本氣で行きますよ。この怪力と音速を誇る 神ノ十字架  
の力を見せてあげます」

「いっでも、どうや」

「・・・クロス

「つー?」

左手を掲げ、次の瞬間アレンが姿を消した。

霸王はすぐさまアレンを見つけるが時はすでに遅かった。

「グレイヴ!!!」

横薙ぎと振り下ろしの一いつの攻撃を同時に浴びせるクロス・グレイ  
ヴ。今のアレンにとって最強の一撃はクリーンヒットした。

クリーンヒットしたはずだつた。

「えー？」

体が動かなかつた。

左腕に絡みついた魔力のチョーンを見てすぐ「バインドだとわかる。

「（う、嘘だ……ま、まさかカウンターバインド……？）こんな捨て身でみんなの、一歩間違えてたら死んでたのに……！？」

「今度は、こちらの番です。霸王」

右手を上げ、全身の力を込めて最大の一撃を繰り出す。

「断空拳」

「ぐあ……！……あ……さ、さすが……良い拳、です……」

「

霸王の一撃をくらい、全身から力が抜ける。

そしてその言葉を最後にアレンは意識を手放した。

side out

翌日。

AINHARDTは一人目を覚ました。

だがいつもとは違う部屋だったので少し驚いている。

さらに、横には見覚えがある少年が寝ているが少し様子がおかしい。

左手の方から下が真っ赤になつてゐた。  
しかもつなぎ目みたいな部分がみられ、一瞬気持ち悪くなつてしまつた。

「起きたみたいだな」

「あ、あの・・・その、」

アインハルトが起きたのを確認した女性　ノーヴィは呼んでいた  
本にしおつをされみ、ねじおじとしていのアインハルトに近づく。

「う・・・あ・・・」

「お、こっちもかつてなんかおかしくないか?」

アインハルトの横で寝ている少年  
ながらうめきだした。顔色が悪いのはみてわかるが、それが異常だった。しかも左目からは血が流れ出していた。

アレンは汗に大量の汗を流し

合いを呼ぶためにその部屋を後にする。  
だが、次の瞬間

「何!? どうしたの! ?」

「ああ、スバル！なんかアレンがうめきだして！」

「と、とつあえず抑えなきゃ！」

暴れ出す前に止めようと、ノーヴェの姉であるスバルがアレンの両腕を掴みベッドに押さえつけるようにして抑える。

ベッドの上で暴れ、叫んでいるアレンは手を強く握りすぎ、その手からは血がにじみ出ていた。目を開いてはいるが、スバルは目に入つてはいないだろう。

「ううーううーうあああああーーー！」

「大丈夫、大丈夫だから！ 私達は、敵じゃないから！」

「て・・・き？」

「スバル、危ない！」

無意識の中に発動させた神ノ十字架でスバルを背中から引き裂こうとしていたアレン。

ギリギリのタイミングで、スバルの親友ティアナが銃型デバイスクロスマリージュでアレンの左手を撃つた。ダメージを受けたことにより神ノ十字架は強制解除されてしまう。

「あ、あ、ああ・・・あ・・・・・・・」

意識の紐が切れ、アレンは血の涙を流したまま再び眠りに落ちた。

## 第04話 天に立つ霸王 地に伏せる騎士王（後書き）

次回はまだ未定。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第05話 第1騎士Hの思い

目が覚めたアレンが一番最初にとつた行動は全力での土下座だった。

- 1にノーザンを殴つて気絶させたこと。
- 2に路上でのAINHARDとのバトル。
- 3に暴れ出したこと。

その3つをふまえて全力の土下座で謝った。

「本当にすみません」

「アレンが暴れ出しちゃったのはしょりがないよ」

「でも、路上での喧嘩は頂けないわね」

数年前に事故にまぎれて死のうとしていたアレンを助けた防災士長スバルと、その親友の本局執務官ティアナ。そしてスバルの妹であるノーザンと、クラスメイトで自称魔王を名乗っていたAINHARD。

計5人で朝食を取りながらもアレンは未だに謝っていた。

「思つたんだがなんで暴れ出したんだ?」

「えつと、神ノ十字架 が僕の体に馴染もつとするからこうなるんですよ。まだ完璧に使いこなせるわけじゃないんで、当然痛みが来ちゃうわけで。その痛みが尋常じゃない程痛いんで不安になつてああなっちゃうんです」

「なるほど」

ノーヴィの質問に出来る限り丁寧に答えるアレン。  
まとめると、神ノ十字架が馴染もうとするとき体が痛くなつて、その  
痛みが不安を呼んで暴れてしまつてしまつことだ。

「あー。」

「どうしたの?」

「ユウさんは連絡してない……？」

「え?」

「やばいな、今日帰つたら殺されるんじゃないかな……？」

「大丈夫。ユウさんは私から連絡しといたから」

「ティアさん……」

アレンの眼にはティアナが女神のように見えた。  
アレンのあの怯え様から見てユウは怒ると怖い。

本当の母親のように怒つてくれる辺りは心配してくれているのだが、  
怒つた時の静かさが怖いのだ。

通常であれば怒鳴るなどと言つたより騒がしくなるのだがユウは  
違う。騒がしくなる所が静かになり、アレンの修行のメニューを5  
倍だつたり10倍にだつたりする。

さらにはそれに説教を数時間程を正座させられたまま聞かされるか  
らアレンはユウを怒らせるようなことはしないのだ。

だから」JAN、アレンの窮地を救つたティアナはまさしく女神だったのだ。

「とりあえず、食べ終わつたら近くの署に行きましょ。まだ被害届が出てないみたいだし。もう路上で喧嘩しないって約束したらすぐ帰してくれると思つから」

「食こ終わるのこすこ時間かかると思ひなびな」

「大丈夫。アレンはその数倍の量を10分で食べきるから」

「はー」

「マジかー！」

side out

「た、ただいま帰りました・・・」

その日の夜。

家に帰つたアレンは恐る恐るコウの元へ向かつた。

「お帰り、アレン」

そこにはめぢやくぢや笑顔なコウがいた。

怒つている様子がないからはあと肩の荷を下ろすアレン。

(あれ？ もアレンって……こつもは君付けなのに……)

ふと思つた疑問。

だがそんなことさせまいともよくなぬぐいこの殺氣をアレンは感じ取つた。

その殺氣を放つていたのはもちろんコウだ。

笑顔なのは良いのだが、後ろの方に黒いオーラが見える。

だけどそんな黒いオーラと殺氣から一転。

突然アレンはぎゅっと抱きしめられた。

「？？？」「、コウさん？」

「もお、心配したんだからね！ ティアナから連絡貰つたけど、昨日帰つてこなかつた時にはもしかしたら何か大変なことに巻き込まれてるんじゃないかって思つたんだから……」

「……じめんなさい」

涙を流しながら、さらに抱く力を強めるコウ。

今のコウは今までに見たことがないくらいアレンを心配していく、まさしく本当の母親のように見えた。

アレンも自分が悪かつたと思つているところもあり、正直に謝つたがどうしたらいいかわからなかつた。

「コウさん、ちょっと苦しいです……」

「ダメ。もう少しだけ」つむれせて」

「・・・はい」

きつと、寂しかったんだ。

そう思いながらアレンはコウに抱きしめられていた。

「数分後」

ようやく離れてくれたコウの眼はちゅうと赤くなっていた。涙を流していったからだろう。

でもそんなことは気にならず、アレンは少し反省しながら俯いていた。

「やつやつ、ちょっと大切な話がしたいんだけどいい?」

「は、はい」

「わたくしは、私的にはアレンが無事で何よりだから

「本当に、怒つてませんか?」

「それ以上気にするなら、本当に怒るわよ?」

「いえ、それならいいんです。それなら」

コウの言つことには逆らわず。

アレンは素直に気にせず、だけど心の中では反省していた。

「私とアレンが一緒に暮らし始めたもう3年になるわよね」

「えつと、やうですね」

「だから、そろそろアレンを養子として引き取らうかなって。保護者としてじゃなく、親として」

「え・・・」

正直、驚きしかなかつた。

今まで一緒に住んでいて、母親のようだなあとは思った事はあった。保護者代わりになつてくれた時も、本当にうれしかつた。

それでも、ユウを母親としては見れなかつた。

母親がいると、また失いそうで怖かつた。

前の母と同じように、ユウを失いたくはなかつた。

その思いからアレンはユウとは一線をおいて、敬語を使い、敬いながら一緒に生活を送つてきた。

「アレンがイヤなら、今のままでいいよ。でも出来るならOKしてほしいかな」

「・・・ユウさんの事は大好きですよ。僕に優しくしてくれて、心配してくれて。本当に母親みたいで」

「じゃあ 「でも」 ?」

「でも、失うのが怖いです。前に母さんを失つたみたいに、ユウさんを失うのが」

「大好きだから」そ、戸惑つてる理由をアレンは打ち明けた。  
ユウが自分を大切に思つてくれてるのはわかるけど、大切に思つ

てくれるから、惑つてしまつのだ。

「・・・大丈夫。私は何処かに行つたりしないから。ずっと家でアレンの事を待つてあげるから」

「・・・」

「それじゃあ、ダメかな?」

「・・・いいえ、もう最高です。”母さん”」

その時、コウは思いつきの愛情をこめてアレンを抱きしめたのだった。

## 第05話 第1騎士Hの思い（後書き）

コウさんとアレン君の出会いはスバルさんがアレン君を助けた時です。

その時にコウさんが引き取る形で共同生活が始まりました。

次回はまだ未定。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

それと今更ながらですがヒロインはアインハルトです。

## 第06話 騎士王と騎士（前書き）

今回はオリキヤラが登場！  
男ですよ？

ちなみに今更ながらサブタイトルに絶対に「王」という字を入れています。

アレン 騎士王 or 第2騎士王  
ユウ 騎士王 or 第1騎士王  
ヴィヴィオ 聖王  
アインハルト 霊王

みたいな感じです。

あと「王」だけなら上記の誰かと言ひ事になります。

## 第06話 騎士王と騎士

「ふあー、んうー。今日は仕事かあ・・・」

早朝、体を起こして伸ばして体を起こすコウ。  
通常日のコウの朝は休日と違い結構速い方だ。

金曜と土日を除いた日はほぼ毎日早起きして朝食を作り、アレンを起こすのがコウの毎朝だ。

「んう・・・母さん・・・」

「ふつ、相変わらず服の裾を握りながらじやないと寝れないところとかは可愛いわね」

未だに寝ているアレンはコウの服の裾を掴んでいた。  
出逢ったころ、不安そうにしていたアレンを安心させるためにコウは毎日一緒に寝てあげていた。

それが何でか今まで続いていて、コウの中で『アレンは寂しがり屋』という印象がついてしまった。

だが意外とそれが可愛いと思える感じ。

「んうう・・・・・・」

「ふふふ」

アレンの手を放し、ベッドから出るコウ。

掴んでいたものが無くなり、ちょっと不安になつたアレンは軽く手を動かしてコウを探すがいない。

その日の朝はいつもと変わりず、いつもとがらじく始まった。

side out

「おはようアレン、コウセイ……」

「おはようアレン」

寝巻きのまま皿をいすり、リビングに入ってくるアレン。朝で寝ぼけたためか、話し方が敬語になりコウの事を『母さん』ではなく名前で呼んでいる。

「お腹すきました……」

「『飯出来てるよ。でもその前に顔洗つてきたら?』

「はー・・・」

洗面所に行き、冷水で顔を洗う。さつきまで寝ぼけていた頭は田覚め、髪の毛についた寝癖を軽く治して行く。

自室に戻り制服に着替えてから、改めてリビングへ入る。

「いただきまーす！」

「召し上がる」

超特盛りに盛られた朝食にがっつくアレン。

スバルが食べる量の数倍の量のそれは、見る見るうちに量を減らして行く。

食欲旺盛、それだけでは済まないかもしれない。

それを食べているアレンをコウは笑顔で見守っていた。

「そう言え、ば昨日は何回やつたの？」

「んぐ、500回。おかげで右手が悲鳴を上げてるよ」

「そんなに。無理はダメって言つたでしょ」

「母さん、限界にチャレンジはさせましたの・・・」

「訓練とかよりもアレンの方が大切な」

「ありがとうございます！行つてきます！」

「行つてらつしゃい」

バッグを持ち外へ出る。

学校へ向けて走り出すアレンはいつももまして笑顔だった。

「放課後、と言つかこの後ノーヴェさんとこ行くんでしょ？」

s.i.d e out

「はい。ノーヴェさんが格闘技をやっている友人を紹介してくれるそうです。たぶんその人が聖王なのでしょう」

「僕も一緒に行つていい？その聖王の子と友達だからわ

「そりなのですか？」

「うん」

この前の路上バトルの一件からアレンとアインハルトはそこそこ、いや結構仲が良くなつていた。

休み時間に話す、授業中に何か聞く、一緒に昼食をとるなどと言つた行動をよくするためクラスの一部から『あの2人つて付き合つてんの？』的な噂が流れでしたりもしていた。

一緒に居ることが多く、さながら大昔の古代ベルカ時代の霸王と第2騎士王のようにも見えた。

「じゃ、行こうか

「はい」

2人並んだまま廊下を歩く。

ちょっとの会話しかないが、それだけでも十分仲がいいように見えた。

「あの、アレンさん」

「んむ？ はみ？（何？）」

紙袋一杯に詰まつたパンを持ち、口に一つ入れていたアレンにアインハルトは問いかけた。

まあ、当然の疑問と言えばそういうんだが。

「それは、少し食べ過ぎなのでは・・・？」

「んぐ。 そうかな？ 僕的には少ないと愚うんだけど」

「ええ！ ？ すいご量を食べぐるんですね」

「うん。 腹が減つてはなんとやらひてヤツかな？ あーむ。 うん、 いい

笑顔でまた一つパンを口に入れるアレン。

そんな笑顔のアレンを見ていてアインハルトは少し考えていた。

（何ででしょう。 何で私は彼がそんなに気になるのでしょうか。 それにもうと話していくけど、会話が・・・）

アレンの趣味とかがわからないから会話が続かな。

それに仲が良くなつたと言つてもなんだかまだじきまきしてしまつ。

気になる=好きなのかもしれない。

アインハルトは頭の中でそう考えるが、どうこうのが好きと言つて事なかよく判らない。

そんな」と考へてこむとアレンが声を出した。

「あ、いたいた。おーい、スバルやーん！」

「アレン！それにアインハルトもー。」

「アインハルトがノーヴェさん達のところ行へって言つてたから、僕も同行しました。あ、食べます？」

「食べる食べるー！」のパン屋美味しいよね

「おいお前ら、食べてないでこいつ混ざれよ」

「あ、そだつた。」めんめん

ノーヴェの声でスバルとアレンは自分たちの世界（軽い食事）から抜け出してくる。  
ヴィヴィオとアインハルトはもうすでにお互いの挨拶を済ませていたみたいだ。

「アレン君、久しぶり」

「久しぶりだね、ヴィヴィオ。いつぶりだっけ？」

「1週間ぶり～」

「あれ？そんな？僕の中では数日前だったんだけどな

「ヴィヴィオ、そいつ誰だよ」

アレンとヴィヴィオの会話に入つてくる少年。ヴィヴィオの友達らしいが、アレンはまだ一度も会つたことがなく、誰かはわからなかつた。

そこでちょっと困り気味なアレンを見て、ヴィヴィオがその少年をアレンに紹介した。

「アレン君はまだ会つてなかつたよね。私の友達のジャン君だよ」

「ジャン・イナトだ」

「僕は第2騎士王末裔のアレン・クラー ジゃなくて、アレン・カミタ。よろしく」

「ん」

右手を差し出し、握手を求めるアレン。

一瞬睨まれたような気がしたが、ジャンはすぐに握手してきた。

アレンより少し背の低いジャンは見上げるよつこしてアレンを見ている。その目は若干だが敵意が混ざつていた。

## 第〇六話 騎士王と騎士（後書き）

今回出てきたジャン君は敵じゃないです。  
だた最初の方はアレンの事を敵対視しています。

理由はまあ、その内。

ちなみにタイトルの「騎士」はジャン君の事を指しています。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第07話 悪む騎士Hと奇妙な従者（前書き）

キャラ紹介にユウさんの欄を追加しました！  
それと今回は挿入絵あります。

## 第07話 悪む騎士王と奇妙な従者

アレンとジャンが挨拶を交わした後、全員は区民センターへ向かった。その中のスポーツコートでスパーリングをするのだろう。

ちなみに何故かジャンは先ほどからアレンに敵意を向けている。アレン自身は何でこんなに敵意を向けられるかわからないが、最初は警戒されてもおかしくないと1人納得していた。

「んじゃ、スパーリング4分、1ラウンド。射砲撃とバインドはなしの格闘オンリーな。レディー・ゴー！」

お互に構え、そして合図と同時に動き出した。

ヴィヴィオは攻撃の連打を繰り出し、AINHALTへ反撃をさせようとしている。

対するAINHALTは受け止め、流す。

ヴィヴィオの出方を見て反撃をする気なのだろう。

長く続くと予想が出来た試合だが、決着はすぐ付いた。

ヴィヴィオの猛攻の中、一瞬だけできた隙をつきAINHALTは渾身の一撃を繰り出す。

その攻撃をもろに受けたヴィヴィオは後ろ側へ飛ばされてしまう。

「大丈夫? ヴィヴィオ」

「ア、アレン君、ありがと」

オットーとティードが受け止めに入る前にアレンはすぐに動き出し

てヴィヴィオを受け止めた。

ヴィヴィオが無事なのを確認すると、アインハルトは首を向けてしまった。

「お手合せ、ありがとうございました」

『一・?』

それは終わりの言葉。

その場に居る全員、いやアレン以外が驚く。

すぐさまヴィヴィオは謝った。

何か失礼なことをした、気を悪くさせてしまったと思ったのだ。

だがアインハルトはそんなことじやなかつた。

この子は自分が戦うべき『王』じやない。

自分とは違つから、もういいと思つた。

「（主の間違いは従者が正せ……か。僕にはまだ無理かもしけないな。でも）アインハルト」

「はい」

「もう一回だけ、今度で良いからスペーじゃなくて練習試合としてやつたら…お互い変な状態で終わるのイヤでしょう？」

「……はい」

「なら、決まり。場所は……（チラツ）

「時間と場所はいつで指定すっから。決まつたら連絡するよ」

「あつがとつぱれこます」

「つて、ヴィヴィオとアインハルトの再選は決まつた。アレンは上手く行つて良かつたと胸をなでおろしていた。しかし、それをあまりよくないようみてる人物がいた。ジヤンだ。アレンがああいう行動を取つたのが気にくわないみたいだ。

「じゃ、僕もこれで。？ どうかした？ ジヤン」

「・・・お前、むかつく

キレそうになつたアレンだが、コウを心配させるわけにもいかず、ショウがなく諦め全く氣にしてなをそつとして帰ることにした。だが、今の振舞い方がさらにジヤンの気にさわつたか、さらにジヤンに嫌われことになつたのはアレンは知らないだろひ。

side out

「ただいまー」

「お帰り。もう少しで飯出来るから、着替えてきたひ？」

「うん、やうする」

無事帰宅したアレンを、夕食を作っている最中のコウが出迎えた。テーブルにはいくつか料理が出来あがっているが、アレンはつまみ食いせずに自室へ向かう。

鞄を机の上に置き、手袋を外してから制服を脱ぎだす。着替えが終わると再び手袋をつけなおした。

「よーし、完成! さあ、食べよう!」

「いただきます」

朝と同じように特盛りに盛られた夕食にがっつくアレン。今日の事を少し振り返りながら食べていた。

(アインハルトは僕にとってなんだろう? … 主?いやいや、なんかおかしいでしょ。確かに昔のベルカ戦争時代は主従の関係だったよ?でも、今も同じなんて……)

昔の場合は逆。

霸王が男で、第2騎士王が女だった。

男が女に守られる、と軽い事はおかしかつたがその逆は普通だ。なら僕がアインハルトを守るの? 全然強くもなんともないのに?

アレンはちょっと手を止めた。

アインハルトが気になるって事はどうじことだ?  
まさか、好きなのか? …?

疑問が頭をよぎる。

気になる=好きかもしない。

そうなのかどうかわからないからどうひも言えない。

「ウに相談する?

なんか言い出しひらいから言えない。

悩みは深まるばかりだった。

「アレン、どうかしたの?」

「ん? ああ、いや、なんでもないよ。ちょっと考え事」

「へ。なら、いいけど」

「うわわわわわわ。じゃあ、行ってくるね」

「ああ、ちょっと待つて」

「?」

「アレン、まだデバイス持つてないでしょ?」

「ま、まあ」

「だから、はい、これ」

ユウがアレンに手渡したのは黄色の羽を生やした丸いもの。第一印象では「何これ?」としか言えないがなんのだろう。もしかするとデバイスかとアレンは考えた。

「母さん、これ何?」

「アレンのために作ってもらったデバイス『ティムキャンパー』だよ。そろそろアレンに渡してもいいかなって思つたから」

♪ 228642 — 2054 ♪

「ティムキャンパー……じゃあ、愛称は『ティム』だ」

そう聞いたティムは羽をパタパタせせて喜びの表現をする。たぶん気に入ってくれたのだろう。だけどアレンはちょっとと思った。

これ、何を元にしたの?  
鳥じゃあ……ないよね?

ティムは鳥のような羽をもつているが鳥じゃない。  
なら何なのだろうか。  
謎は深まるばかりだった。

## 第07話 悪む騎士王と奇妙な従者（後書き）

次回はAINHILDEとヴィヴィオが対決！  
そしてその後アレン君対ジヤン君！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第08話 王との戦い 騎士王と騎士の戦い

「せっかくだし、バリアジャケットも新しくしなやおつか

ティムをアレンに渡したコウは一つ提案した。

新しいデバイスを貰つたから、どうせならバリアジャケットも新しく作つてしまおうと叫つことだ。

今までアレンが武装形態時使つていたものは、アレン自身が適当に作ったものだつた。

だが今度はコウがアレンのためにバリアジャケットをデザインしてくれるらしい。

「どうせ新しくするなら、いろいろ便利だといいよね……って、アレン?」

「……母さん

「何?」

「ティムって、何を元にしたの?」

「え……」

「羽が生えてるけど、鳥じゃないよね。何なの?」

当然と言えば当然の疑問だつた。

金色の球体に翼と尻尾が生えた生物なんてアレンは見たことも聞いたこともなかつた。

そうなれば当然ティムをくれたユウが元となつた生物を知つてはいるはずだ。

「ティムキャンピーは、大昔の古代ベルカ時代に居た『ゴーレム』つて種の生物を元にしててね。ティムキャンピータイプは騎士王達が連絡役に良く使ってたらしいの」

「そりなんだ・・・」

「で、アレン。さつきの話なんだけど」

「え、えっと・・・なんだっけ？」

「新しいバリアジャケットを作ろうつかって話」

「あ、うん。ありがと」

「・・・何か悩んでる」とがあつたら、ちやんと相談してよ。私はアレンの味方だから」

「うん、わかつてる。大丈夫だから、心配しないで」

そんなことを言つてゐるがアレンの表情は上の空。

考え事はたぶんアインハルトの事だろう。

ユウに言い出しづらい。誰かに相談するにも勇気がいる。

そんな状態が結構続いていたのだ。

「（）の事は一旦頭から外そう。今は新しいバリアジャケットの製作とかを優先しよう（初陣が楽しみだね、ティム」

1週間後。

ヴィヴィオとアインハルトの再戦の日がやってきた。

ティムを連れて学校に行き、アインハルトと会うがいつもと変わらず、いやいつもより少ない会話で終わってしまった。

お互いがお互いの事を考えていてあまり話しかける事が出来なかつたからだ。

それに反比例するかのようにアレンは訓練の量を増やしていた。

ティムは補助型だが微調整がまだだ。だからそこを速くなくすため、学校から帰るとコウが帰ってくるまでやり、帰ってきても続けた。

現在、2人は対戦中。

どひらが優勢と言つわけではなく、一進一退の攻防が続いていた。

「ノーヴンさん」

「ん？」

「ノーヴン、こへら壊してもいいんですね？」

「まあ、廃棄倉庫だからな」

「地面に六とか空いても平氣ですか？」

「たぶんな。ま、空いててもあんま氣にしないだろ」

「そうですか」

攻防一体の試合が続いていた時だつた。

ヴィヴィオの渾身の一撃を防いだアインハルトの反撃。

断空拳を叩きこみ、ヴィヴィオを力いっぱい吹き飛ばす。だがそれでも防護を抜かぬよう調整をして。

ドガアアアアンツッ！……！

ヴィヴィオがものにぶつかる音が響く。

煙がたちこみ、それと同時にノーヴェが試合終了の合図をした。

「ヴィヴィオ！」

「陸下！」

ディードや他のみんながヴィヴィオを心配する。

駆け寄るつと煙の方へ近づく。

煙が晴れると、大人モードが解除され制服姿に戻つたヴィヴィオが、巨大な銀の爪の上で背中を預けていた。

「ふう、危なかつた」

駆けよらなかつたアレンは左手の『神ノ十字架』を発動させ巨大化、そして地面の下コンクリートを突き破つてヴィヴィオを受け止めていた。

無事なのを確認し、発動を解除する。

だが、こんな時にもジャンはアレンを睨んでいた。そしてアレンの元へ行き、ある事を言った。

「アレンさん、俺とやらせんか?」  
「アレンさん、俺とやらせんか?」

「え?」

「あんた、この前からすげえむかつく。だからぶつ壊してやる」

「……ひ、いこよ、やろうか。ノーヴンさん」

「ん? なんだよ」

「僕らも、ちよっとだけやつてもいいですか? 時間ありますし」

「ああ、いいんじゃねえか。さっきのみでてやりたくなったんだろ?  
?」

「まあ、そんな感じです」

頭の上からパタパタと羽をばたかせアレンの周りを飛び回るティムキヤンピー。まるで初陣が嬉しそうだ。

それに対しジャンも自分のデバイスを出していた。  
黒く小さな棒のような待機状態なため、機動状態がどうこうのかまだ分からぬ。

「行くぞ、六幻」

お互に向き合ってセットアップ。

ジャンは白と赤がメインの騎士甲冑を身にまとひ、黒い刀型デバイ

ス『六幻』を手に持ち構える。

それに対しアレンは大人モードで、前のバリアジャケットよりも動きやすそうな身軽な黒い服に、仮面のついた白いマントを羽織る。左手を発動させ、巨大な銀の爪へと形を変えた。

「さあ、行くよティム。初陣だ」

## 第08話 王との戦い 騎士王と騎士の戦い（後書き）

ちょっと短めですいません。

今回出てきたアレン君の新バリアジャケットは『神ノ道化』を想像していただければわかりやすいと思います。  
でも左手は巨大なまんます。

黒くてシャープな形になるにはまだまだ先ですかね。

ジャン君の『バイス』『六幻』はそのまんまです。  
騎士甲冑はシグナムさんっぽい感じかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第09話 騎士王の求むもの

「やるぞ、六幻」

『yes』

黒い刀型デバイス『六幻』  
ジャンの相棒であるそれはカートリッジシステムを内蔵したタイプ  
のデバイスだ。

カートリッジをロードし、大きく跳躍。

空中で構え、そして刀身に魔力をまとわせていく。

「六幻 災厄招来 雷衝 『一幻』！」

空で待機したまま風を切り裂く。

残った魔力の斬撃から、無数の雷がアレンへ迫る。

だがアレンはそれに臆することなく、ただ平然としていた。  
目の前まで迫り、あと少しで当たる。その瞬間だった。

「な！？」

ヒュウツ・・・

一瞬だけ風を大きく斬る音が聞こえる。  
アレンが左手を大きく一振りし、迫りくる無数の雷をかき消したのだ。

「僕のこの左手は怪力と音速を誇る。そんな攻撃じゃ、僕は倒せな

「いよ

「あつそ！だけどな！」

地上に降りたジャンは六幻を抜刀の構えにし、走り出す。そしてアレンの攻撃をかわし、一気に懐まで入り込んだ。

「そんな大振りの攻撃が当たるわ！」

「バキッ！！」

ジャンの言葉は最後までは続かなかった。

アレンの右手で思いつきり殴り飛ばされたのだ。

右手が痛かったか、ぶんぶんと手首をならすアレン。その表情は二二二二とした笑顔だった。

「僕の右手って飾りじゃないんだよね。それと、思いつきり殴ったけど大丈夫？」

「ぞけんなー真面目にやれー！」

「・・・いいよ。でもその前に聞いてもいいかな？」

「なんだよ」

「君、ヴィヴィオの事好きなの？」

「ぶつ！？」

「あ、当つづぽいね」

アレンの頭の中での予想はこうだった。  
ジャンはヴィヴィオの事が好き。

何もなんの根拠もなく、ただ勘と言つわけでない。

今までアレンがやつた行動に対する言動からしてそうだなとわかった。つまり、ジャンはヴィヴィオが気になっていて、アレンに嫉妬していたと言うわけだ。

「な、何言つてんだお前！」

「聞きたい事はそれだけ。さあ、続きをだ」

顔が赤くなってるジャンはその状態のまま六幻を構えた。  
なんであいつがそんなこと知ってるんだよ！－、と心の中で叫びながらもぶちのめす氣満々で迎え撃つ。

（あの子は僕と同じ騎士だ。守りたい者のために強くなる。だから僕に敵意を向けていたんだ。だけど・・・）

左手を掲げ、構える。

そして自分にとつて最強の一撃を使つ。

「君じや、騎士には程遠すぎる・・・

一瞬でジャンの懷に入り込み、クロス・グレイヴを決める。  
この一撃、正確に言えば一撃だが、これで2人の戦いは幕を下ろした。

「おつかれ。代わるうか?」

「ありがとうございます。頼んでいいですか?」

氣を失つているジャンを背負い、アレンはみんなの元へ戻る。ジャンをスバルに頼み、AINNHALTのところへ行つた。

「もう大丈夫なの?」

「はい。アレンさんは・・・」

「平氣平氣。一発もくらつてないから。な、ティム」

アレンの頭の上でティムは頷いていた。翼を開いたり閉じたり、尻尾をアレンの頬に当てたりして、まるで「その通り」と言いたそうにも見えた。

それを見てAINNHALTは一安心。笑顔のアレンは頭のティムを撫でていた。

(僕は、この子を守りたい。だからもっと強くなるんだ。誰よりも強く)

騎士は負けてはいけない。

ましてや大切な主の前で恥をかくわけにはいかない。だから絶対に負けないようにするために強くなるんだ。

それにアレンは自分が第2騎士王と言うこともあり、余計にそう言

「気持ちが大きくなってしまった」。

強さだけを追い求めても何の意味もない。  
それはアレン自身ももわかつてはいた。

だがそれでもアレンは強くならつとしていた。

（何だらつ、左手がうずくへ。速く戦いたいといひやすこへる）

手袋で隠している左手に埋め込まれた十字架がうずくめ出した。  
速く戦わせろー。

そう言つているよつともみえた。

「（あ、今はいいか）そろそろ帰りうかな

「えー..?」

「どうしたの？」

「い、いえ、なんでも。その、お帰りになるんですか？」

「うふ。あんまり帰りが遅いと心配しちゃうから

「あ、そりなんですか」

「うむんね。じゃ、僕はこれで」

うすく左手をおさえながらアレンはその場を後にした。

その背中をアインハルトは少し寂しそうに見つめていたのだった。

「ただいま、母さん」

「おかえり」

アレンが帰宅したのは夕方だった。

少しばかし寄り道しながらだったので当然と言えば当然だ。

だがユウはアレンが怪我なく帰つてくれたので、ちょっとぐら  
い帰りが遅くなつても気にはしない。

それにつになく上機嫌なので何かいい事があつたのだろう。

「母さん、何かいいことあつたの？」

「え？ ああ、うん。ちょっとね。あ、そつそつ、週末にちょっと出  
かけるから予定入れないようにな」

「？ う、うん。わかつた」

やはり上機嫌なユウ。

何があつたかはわからないが、それほど嬉しかったことだろう。  
その証拠にその日の夕食はいつにもまして気合いが入つていた。

## 第09話 騎士王の求むもの（後書き）

次回、出かけ先とは・・・。

オリキャラは出ません。原作キャラの所に行きます。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第10話 騎士王親子 vs 烈火と鉄鎧（前書き）

ユウさんの容姿を若干変更しました。

セミロングから長髪にしました。

D·G·r·a·y·m·a·nの初期の髪を降ろしたリナリーを想像していく  
ればわかりやすいと思います。

そして今回はユウの友人の家（八神家）へ！

騎士王親子のタッグの相手はタイトル通りもちろんあの2人。  
アレン君の左手はいつの間にか違う姿になっていた！？  
そして戦闘終了後、ついにアレン君に逆ペントアクルが・・・！

## 第10話 騎士王親子 vs 烈火と鉄鎧

何事もなく日が過ぎ、ついに週末。

現在ユウとアレンはあるところに向かつて移動中。

移動方法はユウが運転するバイクだ。

サイドカーに荷物を入れ、アレンがユウに背中から抱きつく様にしてしつかりつかまり、ティムキャンピーはアレンの服の中に入つて飛ばされないようにして道路を交通法ギリギリ守つてぐらういのスピードで爆走していた。

2人でちょっと遠くに出かける時はたいていこれなので、最初の方こそびびっていたアレンも今じやすっかり慣れていた。

ユウ本人は「風が気持ちいいからすぐ慣れるよ」と言つていたがアレンが本当にすぐに慣れてしまい、ちょっとビックリしていた。

「母さん、これからどこに行くの？」

「友達の家だよ。泊りがけだつて言つたけど忘れちゃつた？」

「泊りがけは覚えてるけど、友達の家とは聞いてなかつたかな

「ああ、ごめんね。それと強い騎士の人人がいるから、アレンは稽古つけてもらひな」

「う、うん

バイクを飛ばして約30分。

ついにユウの友人の家に着いた。

大きい家なので、お金もちらなどをアレンは想像してしまつ。

「ユウさん、いらっしゃい。久しぶりやな」

「久しぶりね、はやて」

出迎えてくれた女性　八神はやはてはこの家の主だ。

関西弁で年齢23歳だが、10代後半を思わせる容姿とスタイルの持ち主で、魔導書『夜天の書』の主。

今は守護騎士ヴォルケンリッター達と共に暮らしていく、ユウが管理局に入つて一番最初に仲良くなつた人物でもある。

「君がアレン君やね。八神はやはてや、よろしく」

「あ、えっと、アレン・カミタです。よろしくお願ひします」

「カミタって事は、ユウさんが正式に母親に？」

「うん。少し前にな。とりあえず、今日から3日間よろしく」

「美味しい料理とか期待しどつてな」

「はいー。」

はやてに対して笑顔で返すアレン。

その後、家の何かに案内されて来客用の部屋に荷物をおく。

一瞬大きすぎてアレンが迷子になってしまったのは、本人とティム  
キャンピーだけの秘密だ。

「そうだ、シグナムとヴィータいる?」

「ん? いるよー。模擬戦でもするん?」

「ううん、アレンの稽古付けてもらおうと黙ってね」

「アレン君って確か第2騎士王やつたね。どういう戦い方するんや  
?」

「それはお楽しみって事で ってアレンは?」

「あれ? さっきまで後ろに・・・」

「これって、まさか・・・」

「「迷子」」

迷いのままなく迷子になっていた。  
急いで探しに出たのは言つまでもなかつた。

side out

一方その頃。

アレンとティムキャンピーはこうつと。

「・・・

あるのをみて、足を止めていた。

頭の上に乗ったティムキャンピーもおとなしく眺めていた。

その視線の先には2人。

ピンク色のポニー・テールをした女性と、赤毛で三つ編みの少女が模擬戦をしていた。

騎士甲冑をきているところから騎士なのだろう。

アレンが見入る理由もわかる。

「ん？」

「どうした？」

「あそここの白髪の少年。今日来ると言っていたユウが預かっていると言っていたヤツじゃないか？」

「あー、たぶんな。迷子か？」

「わからん。待つていろ、見てくる」

「了解」

模擬戦をいったん中止し、ポニー・テールの女性 シグナムが、自身の愛用の剣『レヴァンティン』を鞘に納めてアレンへ歩み寄る。白髪でオッドアイ、金色のゴーレムを頭に乗せたアレンは、近づいてくるのがわかり、首だけ向けていたのを直し体もシグナムへ向けた。

「私はシグナム。お前の名前は？」

「アレン・カミタです」

「カミタ……」コウの唇をくわへる。「あ、見つけた！」  
コウ

シグナムの言葉が終わる前にコウがアレンを見つめて顔を出す。  
すぐさま近くまで行き、アレンの心配をしていた。

「もお、ダメだよ。ちやんとつこてこなわせ」

「でも心配したんだから、念話くわしぬなわせ」

「は、はー」

怒鳴るまでは言わないが、アレンを軽く叱るコウ。  
アレン本人は「やつてしまつたな……」と頭の上に乗つてくるト  
イムキヤンパーとともに反省する。

「わづだ。ちようじここし、模擬戦やのうよ」

「4人でか？」

「うさ。私とアレンのペア、シグナムとワイヤータのペアで」

「え？」

「良いだろ？、面白そうだ。アレンの実力も見てみたいしな。ヴィー タ」

シグナムは、いつの間にかこちら側へ来ていた赤毛の少女 ヴィー タに声をかける。

近くで見ると自分と身長がほとんど変わらず、アレンはすごい勢いで驚いていた。

「聞こえてたから早速やろ？ぜ。ちよっと楽しみだ。コウと久しぶりに戦えるからな」

「負けないわよ。今回アレンもいるんだし」

「そ、そんなに期待しないでくださいね？」

side out

5分間の作戦会議。

互いのペアは準備を終え、ついに模擬戦開始だ。

「おお、すっげえな。あの左手」

「第2騎士王固有のレアスキルだ。人体の武器化らしいが、ここまでは」

騎士ペアの2人はアレンの左手、発動状態となり銀の巨大な爪とな

つた『神ノ十字架』を見て驚いていた。

最初の真っ赤な腕にも驚いたが、どちらかと言つどこちらの方が驚きが大きい。

あんな大振りな武器を使い、どこまでやれるのか。

あのユウガ師匠となつてるのであれば、相当強いんじゃないかと予想し、気合いをさらに入れていた。

一方、騎士王ペア。

ユウのバリアジャケット姿をものすごく久しぶりにみたアレンは、ちょっとだけ懐かしさの中に居た。

3年前とテザインは変わらず、黒い服に白いラインにスカート。足に着いたインテリジョントデバイス『シュバルツ』は黒光りしていて、少しばかし久しぶりなリミッター無しのマジバトルに向けて備えていた。

「緊張する？」

「うえ？ ああ、うん、少し」

「あの2人、特にシグナムは強いから気を付けてね」

「了解。行こう、母さん」

「頑張って勝とうね」

アレンの頭に乗っていたティムキャンピーは、翼を広げてパタパタと飛び始める。アレンの周りをぐるぐるしているところから、相當やる気満々のようだ。

両ペアがある程度の距離を置き、互いを正面にじらえる。

そしてはやての合図で模擬戦が始まった。

『レディー・・・』

まず最初に飛びだしたのはアレンとシグナムだつた。シグナムの愛剣『レヴァンティン』は、アレンの左手『神ノ十字架』をぶつかり合い火花を散らす。

ギリギリとその場で力比べをする2人。だが今回の力比べではシグナムの負けのようだ。

(すごい力だな。こんな巨大な腕だ、当然だろうが半端じゃない)

ギャリリッ！－ブウンッ！－

剣の軌道をずらし、大きく横薙ぎをするアレン。しかし、いとも簡単に避けられる。

これだけで終わるとは思つてもいながら、ちょっとショックだ。

「アレン！」

「了解！」

「円舞『霧風』！」

ユウの蹴りから放たれる風は竜巻のようになり、シグナムへ襲いかかるうと迫る。

だがヴィータがデバイス『グラーフアイゼン』をギガントフォームへ変え、竜巻を一振りでかき消した。

「アレン、手え伸ばして！」

「え？ あ、はい！」

「じゃあ、行つてらつしゃ――い――！」

「うわああああ――！」

戻ってきたアレンの手を掴み、ぶんぶんぶんと回転してから再び2人へ向けてアレンを投げ飛ばす。当のアレンは空中で投げ飛ばされながらも体制を立て直し、爪を寄せて突撃の構えに入る。

だがどうせ軌道は読まれているわけで、これもあっさりと避けられてしまい、アレンはその向こう側へとダイブしてしまつ。

ズドオオオオンツツ――――！

土煙を上げながら思いつきり瓦礫の中へ飛び込んだアレン。

今がチャンスと言わんばかりにシグナムとガイータはコウの方へ一気に距離を縮めながら迫る。

しかし、アレンを無視したことなどが仇になつた。

「――？」

後ろからの突然の射撃。

瓦礫の煙の中からのこととで当然回避ではなく防御となる。

だが、驚いたのは2人だけではなかつた。味方であるコウですら驚いていたのだ。

アレンは射撃なんかできない。出来るわけがない。  
出来たとしてもせいぜい斬撃を飛ばすぐらいだろう。  
まず射撃なんて出来る腕の形じゃないし、古代ベルカ式じゃ遠距離  
戦なんて度外視してるから大きいの以外は使えないはず。

そんな考えだつたのに、それが打ち破られたのだ。驚くのは無理もないし、驚くなと言う方が無理だ。

アレンの銀の爪は形を変え、巨大な砲口を作っていた。  
さらにはその砲口の周囲に5枚の放射状に開いた花弁のようなエネルギー  
ギー体のようなものが発生していた。

「アレン、その腕何・・・？」

「え、えつと・・・なんて言うか、その・・・2日前ぐらいに、こ  
うなつちゃつて・・・で、でも！痛くもなんともないし、体にも異  
常はないから、大丈夫かなって思つて・・・」

「まさか・・・・・2人とも、一旦模擬戦中止！」

「・・・?あれ? 転換しないのに、なんで勝手に  
「  
」

左手が砲口から勝手に爪へと戻った。

左手が発動状態のまま勝手に動き、そして

アレンの左目を自分で切り裂いたのだった。

## 第10話 騎士王親子 vs 烈火と鉄鎧（後書き）

アレン君の左目の能力をどうしよう・・・。

アクマなんて出す気ないし、ホントどういう能力にしよう。

期間はアレン君の眼が開くまでかな。

それまでに考へないと・・・。

あ、考えついた方は遠慮なく教えてください（本当に遠慮しなくていいですからね？）

次回は八神家でのお泊まり。

男1人（ザッフィーは除外）のアレンはどうなるのか。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

あ、後アイディアとかネタもある方はどうぞ遠慮なく。

## 第11話 第2騎士王（前書き）

今回はアレン君の秘密に迫るー。

逆さペンタクルと左手の武器は一体何なのか・・・。

今回は挿入絵あります。

## 第11話 第2騎士王

「アレンー」

「うう・・・あ・・・・・」

アレンは自分の左手に切り裂かれた左目を押さえていた。痛みで『神ノ十字架』は強制解除され、ティムキャンピーはものすごく焦つていてどうすればいいかわからないでいる。

「ヴィータ、シャマル呼んできて！シグナムは包帯とか持ってきてちょうだい！速く！」

「お、おつー」

「わかった！」

素早く2人に指示を出すコウ。

現場慣れしているから出来ることだ。

「アレン、傷口ちょっとだけ見せてね」

左目を押さえている手をそっと退ける。額から頬にかけて大きな切り傷が一つ。

状態から見て、確実に左目はもう見えないだろう。だがユウはアレンの額にあるものを見つけた。

「これ、『逆さペンタクル』……？」

数分後。

シャマルを連れたヴィータと、医療箱を持ったシグナムが戻ってきた。

すぐさまシャマルに傷を見せるが、どうしたことかシャマルは「傷がない」と言いだした。

しかも、失明したと思われていた左目の視力が少しずつだが回復してきているそうだ。どうしたことなのか全員さっぱりだ。

「左目、なんともない？」

「う、うん。開けないけど、痛くはない」

当のアレンも今じゃ普通。

傷口があった頬の部分にはタトゥーのような模様が入り、左目の上部分には逆さペンタクルが描かれていた。

つまりは怪我が無くなった理由がそれだと云うことだ。

頭の上に居るティム・キャンパーもアレンが無事でほつとしている。心配し過ぎて今ではアレンの頭の上でぐつたりだ。

「そうだ、アレン。少しの間だけ席をはずしてくれないかな？ ほんのちょっとでいいから」

「？・・・、うん」

「いめんね」

コウの言ひとおり、部屋から退席するアレン。心配してそんなコウの顔を見たが、自分にはどうにもできないと判断し、頭の上のティムキャンピーが落ちないよつて飯おをけながらその場を後にした。

とりあえず自室（寝泊まりする部屋）に向かつ。左目をぽりぽり人差し指で搔いてみるとやつぱり痛みはない。そんなことをしていると、窓に移った自分の顔が目に入った。

「あれ？ 何これ？」

窓に移った自分の顔にはタトゥーのような模様が入っていた。気になつて前髪をあげてみるとそこには逆さまの星があつた。

アレンは大きなリアクションこそ見せてはいながら、むしろ結構驚いている方だ。と言つか何でこんな状態になつたのか混乱していた。

> 29169 | 2054 <

「みんなになんて言われるかなあ・・・と言つかその前にいつ眼が開くかわかんないし、どうしよ・・・」

1人ため息をついてしまうアレン。

肩を落とし、頭を傾けてしまつたせいでティムキャンピーが落ちて

しまじやうになるが、ギリギリのところでアレンが受け止めた。

「はあ、早く治らないかなあ・・・」

side out

「と言つ事なの」

アレンが席を外した後。コウによるアレンの左手、と言つより第2騎士王のことと今回ついた『逆セペントタクル』について説明していた。

簡単にまとめるなら、まず最初に第2騎士王は基本寿命が短い。戦死とかそう言つたものではなく、それはレアスキルのせいだ。だからアレンがあんなにおおぐらいなのが頷ける。

そして問題なのは武器が、寄生者自身が進化すると言つ事だ。寄生した武器は寄生者をさらに強くするために進化する。その進化がどこまで行くかわからない上に、やつかいなことに一つ進化するかも未だ謎のままだ。

ただ、わかることが一つ。

ほとんどの第2騎士王とその末裔達は、武器の進化に耐えられず死んでいったと言つ事だけだ。

次に『逆スペントクル』だ。

これは王たちの間では呪いとされているもの。アレンの左手につけたのが呪いと言つて証だ。

何の呪いで、誰の呪いかわからない。

一番有効な説は、その者の血縁関係の誰かのせい、と言つものだ。

だとすれば、アレンの血縁関係は母親か父親。それと自分の先祖である第2騎士王位だらう。

そしてこれは災いを呼ぶものとされていた。

近々アレンの身に何かよからぬことが起きるんぢやないか。そうコウの頭に無理やり連想させた。

「アレンの左手の形、替つてていたでしょ？あれが進化したと言つて証拠よ。遠距離戦が出来ないから、遠距離戦が出来るような形になつたの」

「まだ死ぬわけじゃないのだらう？」

「わかんない・・・私が知る限りじゃ、一番速くて20歳ぐらいらしいから、たぶんまだと思つ」

「大丈夫だろ。さう言つ話つてだけで」

「だからわかんないって言つてゐるじゃない！」

ヴィータの言葉につい怒鳴つてしまつコウ。

それほどアレンの事が心配なんだ。無理もない。ユウはすぐさまはつとなり、「ごめん」と一言謝つた。

昔の文献で読んだだけ。  
もしかしたら一部嘘かもしれない。

ユウはすと願っていた。

出来ることなら呪いを消してあげたい。

あの真っ赤な腕だって、普通の子と同じよし、普通の腕に戻して  
あげたい。

そう心の中で願っていた。

「どうあえず、そろそろ夕食だ。あんまりつらそうな顔をするなよ

「わ、わかってるわよ

「顔がいつも言つていなくて

「え？」

ユウのその顔は涙でぬれていた。

顔は赤くなり、まさしく「泣いてました」と言つてこる顔だ。

こんな顔でアレンの前に出れば心配をかけさせてしまう。

すぐさま涙をぬぐい、いつもの顔に戻るユウ。  
だが内面はまだ涙でぬれたままだった。

## 第1-1話 第2騎士H (後書き)

楚良「はい、今更ながらあとがき」「一ノ瀬アレン」

アレン「ホント今更ですね。もう10話以上になるって言ひのこ」「HDDワード・ニコーゲート様を見てて俺もやりたくなつたわけや」

アレン「で、これはどんなことするんですか?」

楚良「えっと、質問」「一ノ瀬アレン」とか?」

アレン「何で疑問形なんですか。まあ、いいんじやないですか?」

楚良「今のところまだからな。後々増やそうかと思つ。あ、思ついた方は遠慮せず言つてくださいね」

アレン「そこは基本他力本願ですね」

楚良「まあ、俺じゃ思いつかないようなアイディアが思いつく人はいるし、ダメつてわけじゃないだろ。ダメつて言われば気合いと根性で1人で考えるけど」

アレン「やつですか。とつあえず、頑張つてくださいね」

楚良「何言つてんだよ。お前、基本このレギュラーだから」

アレン「マジですか・・・？」

楚良「マジ。報酬みたらし団子」

アレン「快く引き受けましょう（キツ）

楚良「と書つ」とで、これからはあとがきコーナーをやって行きた  
いと思います。今のところは質問コーナーだけですが、後々増やし  
たいと思います。後ゲスト（アレン以外のキャラ）がたまに（ほほ  
毎回？）来ます

アレン「質問がある方、アイディアが思いついた方は遠慮せずにお  
願いしますねー（もぐもぐ）

楚良「次回予告！！」

アレン「次回は再び模擬戦再開！騎士王親子 vs 鉄鎧烈火コンビ！  
勝つのはどっちだ！？」

楚良「では、また次回

楚良&アレン「「まつたね～」

アレン「つてこれ『桜の花が咲く』のに』の初期のキャラ紹介の時  
のあれじゃないですか！」

楚良「良いじやん別に。」これ結構気に入つてんだ

アレン「そんなんでいいんですか・・・」

楚良「良いんだよ」

第1-2話 再戦 騎士王 - s vs 騎士 - s (前書き)

今回は再模擬戦！  
勝つのはどっちのペアだ！？

## 第1-2話 再戦 騎士王 - s vs s 騎士 - s

八神家宿泊1日目の中。

すでにもう夜中となつていて、アレンは未だに眠れないでいた。

(母ちゃん、僕に何か隠してる・・・)

寝る前までのユウの表情はいつもと違った。

何かを隠している、と言つても3年間一緒に過ごしてきたアレンだ。隠し事をしている時の表情はすぐにわかつてしまう。

「アレン・・・」

「つ

「死んじゃ、何処かに行っちゃこいやだよ・・・」

「(寝言・・・?)」

寝ていたと思ったユウが、アレンの背中に抱きついた。本当はアレン同様、眼れずに起きていたのだ。

アレンが寝ていると思い、ユウはアレンを起こさないよう優しく、だがそれでも力強く抱きしめる。寝言だと思っていた声は涙でぬれしていく、小さいが泣き声も聞こえてきた。

「アレン・・・?」

そんなゴウの泣いている声を、アレンは聞きたくなかった。  
だから寝返りをうつ振りをしてゴウに向き合い、抱き返した。

「あらん・・・」

「ひ・・・ありがとう、アレン。おやすみ」

その言葉を聞くと何故か不思議と眠くなつた。  
すぐに睡魔が襲ってきて、アレンはそのまま眠りこついた。

side out

翌日の朝。

ゴウの表情はいつもと変わらない、隠し事もない笑顔だった。

何かを決心した。

そんなことが顔に書かれているようだ。

話を変え、アレンの左耳は徐々に回復速度が上がりはじめていた。  
この状態なら数日後には完全に治つて開けるそつだ。

何でこんなに回復力があるのか、治療もせずにこんな重傷が自力で  
再生しようとするのか。

医療系に強いシャマルでもわからないでいる。

ゴウいわく「呪いの影響」らしい。

『準備はええかー?』

「 「 「 「 こつでも」 」 」

今日は昨日中止した模擬戦の続きだ。

アレンの左目が見えない、と言つハングティがあるが本人は大丈夫と言つているし、コウもやらせてあげてほしいとの事でやることにした。

4人ともセットアップ状態、武器を構えて準備は完了していた。そしてそれを確認したはやてが開始の合図をする。

『それじゃあ・・・レディー・ゴー!』

合図と同時にシグナムと、今度はコウが飛びだした。素早い足捌きと剣技がぶつかり合い火花を散らす。

最初はお互いが攻防を繰り返していたが、次第にシグナムがどんどん防御に徹して行くようになつた。

コウのスピードについていけず、反撃の隙を見つけられずにずるずると押され、防御をするしか手が無くなつていたのだ。

「はあ！」

力を込めた右足の蹴りを入れるコウ。

シグナムはそれを防ぎ、一気に後ろに押されてしまう。

距離が出来たのを気に、コウも一旦アレンの所まで退く。今度はアレンが攻撃に入ると想い、ヴィータが前に出る。

だがそれはフェイクで、アレンはその場にどどまり、巨大化させた左手の上にコウを乗せていた。

そしてコウを乗せたまま振りかぶり、ヴィータに向かつて”投げた”

「い！？」

音速の左手が生み出すスピードに乗り、足を突き出した一気に突っ込むコウ。そして投げた後、アレンは左手を砲口へ転換し、援護射撃をする。

さすがにこれをアイゼンのギガントハンマーで打ち返す、なんてことはできず、ヴィータは全力で防御に徹するしかなくなつた。

「残念、一段構え」

「は？」

「クロス

猛スピードのコウは急に動きを止め、防御を無意味にする。さらにその後ろ、コウの陰からアレンが一気に距離を詰めてくる。そしてヴィータの眼の前で左手を掲げ、防御がずれた絶妙なタイミングで攻撃を入れる。

「グレイ つ！？」

「いい攻撃だ。だが、残念だつたな」

振り下ろしの左手を、シグナムがギリギリのところで防いだ。決まったと思つた攻撃を防がれ、アレンには隙が生まれる。そこへ攻撃が出来ないシグナムに代わり、動けるよつになつたヴィータがアレンをアイゼンで殴り飛ばした。

殴り飛ばされ、瓦礫の中へ叩きつけられるアレン。煙を上げ、コウが心配するがそんな暇もなく2対1の状況が出来あがつてしまつ。

「大丈夫だよ、ティム。さ、反撃だ」

瓦礫をかみ砕きまくつてアレンを掘り出すティムキャンピー。口の中に入れたものがどうなるのかはわからないが、そう言つ機能のようなものが付いている事に少し驚くアレン。

瓦礫の中から這い上がり、左手の砲口を閉じて槍の形態に替える。そしてユウを追い詰めているシグナムへ一気に迫つた。

「シグナム！」

「！？」

「不意打ち、ごめんなさい。クロス

不意打ちになるが、しつかり謝り槍を一突き。

全力の一突きは、突き刺すと同時に標的を十字に引き裂いた。

「スピアー！…！」

「ぐ、がはあつ…！」

この攻撃によりシグナムはダウン。

残りはヴィータだけとなり、形成は逆転した。

左手を<sup>コンパート</sup>転換し、元の形に戻す。

そしてそのままヴィータと激しい攻防を繰り返し始める。

一方ユウは後はアレン一人でも大丈夫だろ？と判断し、倒れているシグナムを介抱した。

もしアレンが負ければこちらの負けで良いつもりなのだろう。

「こんのおおおおつ……！」

「へ？」

「ブウォンツッ！……！」

ラケーテンハンマーがアレンの真横から迫る。  
直撃かと思い振りかぶったが、手こたえがなかつた。

よく見てみると当つたのは白いマントだけでアレンの姿がない。  
姿を見失い、すぐさま姿を見つけようとするが少し遅かった。

「つー？」

「クロス……グレイヴ！……！」

アレンの最強の一撃がヴィータを背中から襲う。

見事に決まったその攻撃で模擬戦は騎士王ペアの勝ちで終わつた。

side out

時間は経ち再び夜。

今日の夕食はバーベキューとなつた。

アレンが大量に食べると、張り切るはやてとリイン、そしてアギト。それを見ていてシャマルも手伝ったそうだったが、残念ながら断られたらしい。

「しかし、アレン。お前は強いな」

「いえ、不意打ちが上手く決まつただけで。あれが避けられたらどうしようかと思いましたよ」

「それでもアタシとタイマンで勝つたけどな」

「さすがはユウの弟師だけはあるな」

「や、そんなに持ちあげないでください。は、恥ずかしいですから」

今日は模擬戦の話で持ち切りだった。

シグナムとヴィータ、2人をダウンさせたのはビジャもユウではなくアレンだったのだ。

みんながアレンを褒めるのはわからないでもない。

ユウも師匠として鼻が高い、と言っている。

アレン本人は恥ずかしくて顔が赤くなっていた。

「これならユウにも勝てんじゃね？」

「確かに。お前らに勝つほどだ。実力はある上に、今年のインター ミドルは良いところまで行くかもしけんな」

「そのミカラって子、強いんですか？」

「ああ。シグナム達と模擬戦が出来るぐらいな」

「へへ。会つてみたいなあ・・・もぐもぐ」

「それなら明日、道場に行つてみる?」

「んぐ・・・道場?」

道場、という言葉に疑問が出てくるアレン。  
「この近くに道場なんてあつたんだ、と納得し、やがてリコワードヒル

「明日は日曜だ。他の子もたくさん来る。見てみるか?」

「・・・はー!」

楚良「あとがき」「一ナ一」

アレン「今回で2回目ですね。お便りが来てないのが残念ですけど、楚良「そんなの書き続けてればその内来るさー今はコーナー案を考えることが大切だ！」

アレン、もう二回案が出てるんですか?」

楚良 よくぞ聞いてくれた。実はな

アレン「まだ決まってない、なんて書いたらぶち抜きますよ?」

楚辭 · · · (卷之三)

アレン - 義星ですか「

楚良「いや、あるんだぞ！？」でも、ただ焦らしてただけって言つか、

アレン「大丈夫ですよ。みたらし1年分で許しますから」

楚良「俺のごすかいが————！」

アレン「と云うわけで、読者の皆様、あとがきコーナーのコーナー案が思いついたら遠慮せずに書いてくださいね。お願ひしますよ」

楚良「現在は質問コーナーだけですが、そちらにもお便り待ってます」

アレン「さてさて、次回の『銀の左手』は？」

楚良「え？俺が次回予告書いつの？」

アレン「はい」

楚良「（マジか）じほん。八神家道場へと足を踏み入れるアレン。  
そこで出会つミウラと言つ少女。彼女はアレンに一目惚れしてしま  
う。彼女が取つた行動とは・・・！」

アレン「僕も次回がすくへ気になります。ミウラは何をしてくるん  
ですか？」

楚良「ネタばれはしません」

アレン「それはまた次回のお楽しみです」

楚良「ではまた次回」

楚良＆アレン「まつたね～」

現在お便り募集中！

今は質問コーナーだけですがお待ちしております。

コーナー案も思いついた方は遠慮せずお願いしますーー！

第1-3話 王の左臣 第2騎士王暗殺（前書き）

パソコンが壊れましたw  
現在携帯でしか更新できませんw

第1-3話 王の左目 第2騎士王暗殺

八神家宿泊、最終日。

アレンの左目は未だに開いていないが、運が良ければ今日の夜には開くそうだ。

それともうひとつ。

何故だかはわからないが、アレンの左目上の逆さペンタクルが、最初は線だったのだがいつの間にか塗りつぶされていた。

これも呪いの影響なのかもしれないが、どういったことなのかさっぱりだ。

話を変え今日は八神家道場へ行く予定だ。

ミウラという子を紹介してくれるらしく、アレンは少し楽しみにしていた。

「お、おお・・・」

八神家道場についての感想は驚きしかなかった。

大きすぎてそれしか言えないのはしょうがないことだらう。

とりあえず、ザファイーラの後に続き、道場内へ入っていく。コウもどいう子がいるか少し楽しみにしながら中へ入つていった。

「あ、師匠。おはよ'りぞこます」

朝一番でザファイーラに挨拶をした少女の姉妹ミウラ・リナルディ。こじー、八神家道場ではシグナム達が認めるほどの実力の持ち主だ。

「あれ？そつちは・・・」

すぐに後ろにいたアレンに気付くミウラ。  
すかさずアレンは笑顔で握手を求める。  
その時、ミウラの顔が突然赤くなつた。

(か、かっこいい！)

まさかの一目惚れだつたようだ。

白髪で片目を閉じてる状態だが、ミウラにとつてはむしろスマート  
イクだつたようで、赤くなつた顔が元に戻つてない。

「ぼ、僕、ミウラ・リナルディつていいますー！」ウラつて呼んでく  
ださい！」

「僕も、アレンでいいですよ（元気な子だな）」

握手した手をブンブンと振るミウラ。

アレンは少し困惑ぎみだが、これがミウラのやり方なんだなど一人  
で納得した。

そしてそこへザフィーラが割つて入る。

「じゃ、早速試合するか」

「「はい！」

side out

「お互い、準備はいいか？」

「「はい！」」

八神家道場、外。

中庭にあたる場所でにて、八神家道場生徒と八神家メンバーやユウが見守るなか、アレンとミウラは向き合っていた。

ちなみに2人ともセットアップ済み。

ミウラは愛機『スター・セイバー』を使い、フードのついた上着、シグナムのような騎士甲冑をモチーフにしたバリアジャケットに身を包み、両腕にはスター・セイバーが形を変えて装備されていた。

対してアレンは黒いコートに白のライン、仮面のついたマントを見にまとい、巨大な左手を除けばさながら道化のように見える。だがそのアレンに異変が起きた。

「な、なに・・・これ？」

左目が、さつき開いたのだ。  
しかし、その左目は奇つ怪だつた。

ミウラと対峙したとき、左目に大小のスコープが2つ、突然現れた。見えたのは相手のステータス。魔力量、パワー、防御力、スキル。そしてバトルスタイル。

さらには相手の姿を障害物があつても、遠くにいても、相手のリンクーコアを見つけて関知できるようになつた。

はつきり言つて、フェアじゃない。

だが、それは左田が許してくれなかつた。

たとえ左田を瞑つても、右田にも映つてゐるのだ。

両田を瞑つて戦うなんてアレンには出来ない。

出来るなら対抗策を練りたかつた。

「では、初め！」

△惑つアレンの思ひは虚しく、ザフィーラが合図をした。  
合図と共に飛び出すミウラ。

ヴィータが「止まれバカ！」と叫んでるとこを見ると特攻癖があるように思える。

しうがないと思い、左田をそのままにして応戦するアレン。ものすごい勢いで迫るジャブを、軽々とかわしていく。

左田の能力でバトルスタイルが見えているのだ。動きはある程度読める。

「ハンマー・・・

「つー？」

「シュラーカー！..」

下からアップバーのようなパンチを繰り出すミウラ。

決まつたと生徒達がどよめくが、技を繰り出した本人のミウラには手応えが感じられなかつた。

ギリギリのところで左手を体の前に持つてきて、手のひらでミウラの拳を受け止めたのだ。

さらに左手を<sup>コンパート</sup>転換し、槍の形へ変えて//ウラとの距離をとるために無理矢理難ぎはらつた。

左手の形が変わり驚く//ウラだが、攻撃を喰らわないよう、しつかり避ける。

「<sup>コンパート</sup>転換」

左手を爪に戻し、再び向き合つ。ピシリと伝ってきた違和感があつたが、あえて言わずに無視した。

「さあ、//からは本氣で行くよー。」

「はーー。」

> i 2 9 4 9 8 — 2 0 5 4 <

s i d e o u t

アレン v //ウラ

一進一退の攻防が続き、試合時間は15分を過ぎていた。

「つー?」

突然のことだつた。

キィイン・・・

アレンの頭の中で何かが切れる音がした。  
そして左手が”はじけた”

左手が強制解除され、バリアジャケットが破れてさらされた真っ赤  
だつた腕は真っ黒く染まつっていた。

「あ・・・あああああーーーー！」

突如、激痛が走る。

アレンは、左手を押さえて叫ぶしか出来ない。

試合は一旦中止。

ゴウとシャマル、そして相手をしていたミカラがすぐさま駆け寄る  
が、何が原因なのかわからない。

そして次の瞬間

ズ・・・パンッ！ーーーー

繋ぎ目部分から左手が、今度は”左手”こと”弾けとんだ”

鈍く、肉片が落ちる音と共に、左手から大量の血が吹き出す。  
あまりの激痛に、アレンは意識を手放し気絶してしまつた。

「アレン？アレン！」

「ゴウさん、急いで病院つれてくんやー！」

「う、うんーザフィーラ、手伝つて」

「ああ」

氣を失つてゐるアレンをザフィーラが担ぐ。

そんな中、ミウラは一人地面に腰を落としてしまつていた。

それを見たシグナムが駆け寄る。

「ミウラ、大丈夫か？」

「ぼ、僕、何か・・・アレン君が、血がたくさん・・・」

「大丈夫だ。お前は何も悪くない。アレンは助かる」

慰めるシグナムだったが、ミウラは震えたまま。  
完全に自分のせいだと思い込んでしまつてゐる。

こういうとき、シグナムはどうしたらいいかわからなかつた。

第1-3話 王の死と 第2騎士王暗殺（後書き）

今日はあとがき「一ノナ」はなしです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第1-4話 炎王と騎士王（前書き）

シリアルアスボックなつてきた気がする。  
それと左手がない状態がちょっと続きます。

ちなみにアレン君は少しの間大人モードのまま生活します。

## 第14話 炎王と騎士王

白髪で片目の周りに赤い模様が入つていて、左手がない少年 アレン・カミタ。

彼が眠つてゐるここは、聖王教会と呼ばれる場所のある一室だ。

一週間寝たきりのアレンは、実質一度死んでいた。

出血多量。一時的とはいえ、致死量を超える血を出したのだ。

急いで血を入れ、電気ショックで心臓を動かしたが、もう少し遅かつたらアレンの命はなかつたそうだ。

そんな死から逃れたアレンは1人、目が覚めるのだった。

「僕は、生きてる……？」

side out

一週間前。

アレンが病院に運び込まれた時のことだ。

「なんとか一命は取り留めたみたい」

左手から大量に流れ出た血。

病院にあつたアレンと同じ血液型の輸血パックを大量に使い、何とか持たせたのだ。

先ほどのシャマルの言葉で胸を撫で下ろすユウ。だが、次の言葉で再び不安が出ていてしまう。

「アレン君の左手は、やっぱり無理みたい」

「えへ、だよね・・・」

言いにくいくらいだが、アレンの左手はない。  
くつかない、などではない。左手自体がないのだ。

取れたはずの左手は姿形を変え、その場でみずらを粒子としたのだ。  
今は小さなアレンに、コウが苦労して集めた左手だった粉が入っている。

眠っているアレンのねばに置いてはいるが、今のところは何の変化  
も起きていない。

「気になつたんだけじよ、なんでアレンの左手は取れたんだ？」

もつともな疑問をコウに問いかけるヴィータ。

いきなり左手がはじけ飛び、なんて通常ありえないことだ。

「それは私にもわからない。手が粒子になつたのもね」

じこじこと、いろいろ起つてすきでコウも滅入つていた。

急速的に進化を遂げていく第2騎士王の血を引く継ぐアレンと、逆  
スペンタクルの呪い。

どう対処していいのかわからないのは普通だし、滅入るのも普通だ。

「それにしても、あの手の取れ方はおかしかったな

「ああ。まあで、破裂するような感じだった」

ザフィーラとヴィータが変なことを言い出した。手の取れ方、それがおかしいと。

アレンの左手は真黒になつた後に繋ぎ田部分から少し大きく膨れ、そして次の瞬間血をまきちらしながらはじけ飛んだ。普通なら真黒くなつた時点で止まり、手がとれるまではいかない。取れたとしても、はじめ飛ばずにそのまま落ちるはずだ。

「誰かがアレンを狙つたってこと?」

「たぶんな。だが狙う理由がわからん」

「それなら、聖王教会に・・・」

「そやな。ひと段落するまで預けとこか」

side out

「なんで、僕は生きて・・・」

目が覚めたアレンは、自分が生きてることを不思議に感じていた。

左手が真黒になつた瞬間、駆け抜けた激痛。

今までには感じたことがないぐらいの痛みと不安、そして恐怖が襲つてきた。

左手はもう使えないんじゃないかな。そう思ひ程だ。

その後、また激痛が襲ってきた。

左手の感覚はなくなり、一気に血が噴き出すのがわかつた。  
あふれ出る温かい血は、アレンに確実で絶対的、あらがうことがない『死』を感じさせた。

それなのに、アレンは生きていた。

夢だと思っていたが左手の感触はなく、すぐに現実に引き戻された。

「なんで、なんで涙が出るんだよ・・・」

生きてて嬉しいのか、左手がなくて悔しいのか全然わからなかつた。ただ体が震えだして、目からは涙があふれ出して止まらなかつた。暫くの間アレンは泣くことしかできなかつたから、ずっと泣き続けた。

右手だけで膝を抱え、前の母親 マナがいなくなつた時のように。

「母さん、何処・・・」

右手に付いていた点滴の針を口で器用に外し、ベッドから出るアレン。

横で眠っている修道士らしき女性が起きないよひ、仮をつけながら部屋を後にした。

行先はない。

ただ歩き続け、いるかどうかもわからないユウを探すのだった。

アレンが部屋から出て行つて10分後。

アレンの寝ていたベッドに突つ伏していた水色の髪をした修道騎士見習い セインはようやく目を覚ました。

「やば・・・寝ちゃつてた・・・」

田を覚ますセインの前にアレンはない。

警護を頼まれていたのに、見失った上に居眠りしていた、なんてバレたら大変なことになるだろ？

「セイン、入るよ」

コンコンとノックとともに声が聞こえてくる。やばいやばいと思ひながらも、セインはもう諦めていた。

そして頭の中で最速で言ひ訳を考えることに。

「あれ？ アレン君は？」

「！」めん、油断した。トイレ行つてゐ間にいなくなつちやつたみたい

「そんな悠長なこと言ひてないで、早く探さないと…あの子、まだ動ける体じゃないんだぞ！」

「ええ！？ わ、わかつた！」

部屋に入ってきた少年　　オットーの言葉で再びあわてだしたセインは急いで部屋から飛び出していた行つた。

オットーは持つていた代えの点滴用の輸血パックを置き、アレンがいつ戻つてもいいように準備を始める。

「これ、涙の跡・・・」

ベッドに涙の跡を見つけたオットー。

すぐさまアレンのものだとわかつたが、それみたオットーにはど

つある」ともできなかつた。

一方、部屋から抜け出したアレンは、ただただ歩き続けていた。絶対に立ち止まらず、なんのあてもなくコウを探していた。

途中、貧血に襲われたが無視。

一週間前にミラウラの攻撃をまとも以上にクリーンヒットされまくつたことから、その痛みにも襲われるがそれも同じように無視した。

「ああ、またこの部屋か。それにこの感じも・・・」

道に迷つたか、何度も同じ道、同じ部屋の前を通りていた。そのたびに、最近はご無沙汰だった王が近くにいるときに感じられる何かをアレンは感じ取っていた。

何度かは無視していたが、少し気になってきたかアレンはその部屋の前で止まつた。

左右を見て、誰もいないことを確認した後、唯一残つた右手でドアを開けた。

その部屋には、ベッドに寝る一人の少女。

この少女の名前はイクス・ヴェリア。

古代ベルカの王の一人、冥府の炎王と呼ばれていて、今では目覚めることのない永遠の眠りについてしまつている。

イクスの姿を見るなり、アレンは近くにより手を取つた。その手は暖かく、何かを感じられた。

「君は・・・そつか、イクスって名前なんだね」

イクスの手を取っているアレンは、イクスの言ひてことぬいがわかるのだろうか。

少し間をおいてイクスに話しかけていることから、会話をしているのだろう。

眠っている彼女と話ができる。それはそれでいいことだ。

はたから見れば独り言をしゃべっているアレンは、イクスのベッドの横にあつた椅子に座り、手を握りながら話している。そんな時、不意に後ろから声をかけられた。

「やつとみつけた、白髪女子」

「う

「勝手に部屋抜け出しちゃダメじゃん。ま、部屋戻るよ」

「あ、はい。じゃ、イクス。またね」

イクスに別れを告げ、手を離してからセインのもとへ行くアレン。その表情は、落ち着いて安心している顔だった。

## 第14話 炎王と騎士王（後書き）

今回もあとがき「コーナーはなしです。  
というかパソコンが復活するまで、あと「コーナー」がしきりかたまつ  
てからにします。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第15話 涙の騎士王

イクスの眠る部屋を後にし、2人は再びアレンが寝ていた部屋に戻ることにした。

途中、また貧血に襲われたアレンだが、あえて黙っていた。

「あ、自己紹介まだだつたね。あたしはセイン」

「アレンです。今はこの姿ですけど、本当は子供ですから」

「ああ、そこいらへんは知ってる。アレンのお母さんから聞いてるから。それと、感知するまでその姿を解除しちゃダメだつてさ」

「え? ど、どうしてですか?」

ちょっとおかしな忠告。

大人モードを解除したらどうなるのだろうか。

気になつたアレンは、恐る恐る聞いた。

「んー? なんでも、また激痛走つたりするからだつて」

「そ、そうですか? (絶対に解除しないー)」

大人モードの解除=死へ一直線。

アレンは大人モードを解除する「」とに恐怖を覚えたのだった。

「そいえばさ、アレンってイクスと知り合い?」

「いえ、さつき知り合いました」

「あれ？じゃあ、なんで名前知ってんの？」

「イクスの手を握ったとき、声が聞こえたんです。そのときは名前を聞いて、さつきまで話してたんですよ」

「ふ～ん　　って、寝てるイクスと話せたのー？」

「まあ、なんとなく、ですけどね」

先ほどセインに見つかるまで、アレンはずっとイクスの手を握りながらじゅべつていた。

つまりは、手を握ってるときだけは話せるみたいだ。

ほえ～、と驚きながらも歩き続けるセイン。

後ろのほうでドサッ、と音がして振り向いてみれば、そのころまつりまで元気に見えたアレンが倒れていた。

side out

同日午後3時。

貧血で倒れたアレンはようやく田を覚ました。

右手には最初に起きたときと同様、点滴の針が刺さっていた。

先ほどのが夢じゃないかと思つたが、やはり最初に起きたときと同じように、左手の感覚がないことに気づき現実に引き戻された。

起きたばかりでアレンは頭が動いていない。

顔を横に向けてセインたちを見るが、ぱーっとしていてぼやけて見える。

そんなアレンの横顔をペチペチと叩く音が聞こえ、それでようやく頭が働きだした。

「ティム……？」

田だけを横にやると、そこには相棒ティムキャンパーがいた。名前を呼ばれると、ティムキャンパーはアレンの顔の上から退き、目の前でパタパタと翼を羽ばたかせていた。

右手だけで何とか体を起こし、頭を抑えるアレン。先ほどまでのことを整理し始めた。

「僕、貧血で倒れたんだ」

「いきなり倒れるからびっくりしたんだぞ。ちゃんと調子悪いなら言わないとダメじゃん」

軽くだが、アレンを怒るセイン。

誰でも後ろで人が倒れればびっくりもするし、調子が悪いのに言わないなんて怒りたくなるものだ。

その後、じじが聖王教会だと聞いて驚いた。

こんなに大きな建物なんだ、迷うのは普通だと。

説明をしてくれたセインとオットーの2人にお礼を言ったアレンは、少し気になっていた。ミウラのことだ。自分の目の前で左手が取れて、血を浴びたのだ。

もしかしたら精神面でダメージを受けてるかもしないと心配して

いた。

「あ、そういえばアレンにお密さん」

「お密？」

疑問に思つた。

こんなとこにお密？

しかも自分が聖王教会にいることを知つてゐるなんて。

そんなことを考へていると、オットーが声をかけた。  
入ってきた少女は見覚えがあり、先ほどまで心配していた子だ。

「ミウラー。」

「えつと、お見舞いに来ました」

「あ、ありがとうございます」

ミウラの手には花と果物。

左手だつた粉が入つた小ビンの隣にそれを置く。

「その、大丈夫・・・ですか？」

「うん、大丈夫。左手はないけど、命はあるよ」

「そつか。よかつた」

他愛もない短い会話。

これだけだが、アレンの安否を聞いてミウラは一安心した。

一方アレンも同じだった。

お見舞いに来れる、といふことは精神面は心配ないところだ。

それはまさしく安堵の一言である。

「左手、治るんですか?」

「んー、どうだらうね。まだわからんのかな」

「僕、治るって信じてますからーそれで、治つたらもう一回ー今度  
こそー!」

「・・・うん

愛器器』『スターセイバー』を見て時間を確認する//ワカ。  
するともう時間らしく、短いお見舞いは本当に短く、すぐ最終終わ  
ってしまった。

こうこうときに誰かに励まされる。

それが嬉しく、アレンは笑顔でミウラを見送った。

このとき、小ビンの中の粒子が少し光っていたのを3人とも気づ  
ていなかつた。

side out

またも同日の夜。

夕食をとったアレンは、騎士カリムやシスター・シャツハのところへ、  
遅すぎるが挨拶をしていった。

「えっと、今日は助けていただき本当にありがとうございました」

「いいのよ。それよりも、命があつて何よりだわ」

「はい、おかげさまで。それに傷が完治するまでおいてもうえるなんて」

「はやて達の頼みだもの、断れないわ。それに、こんな子供が死ぬのは大人としても見たくなーいし」

最初、というよりほとんどアレンはお礼しか言つていない。  
それほど感謝しているということなのか、さすがに行動が早い。  
そんなアレンをその話題から引き離そうとする2人、騎士カリムと  
シスター・シャツハ。

一段楽したところで、アレンに聞きたいことがあった。  
それは左手のことなど、他いろいろだ。

「その、変なことを聞くんだけど、誰かに命を狙われたよ!」  
は身に覚えがある?」

「・・・ギャンブルでパンツ一丁にしたやつらはたくさんいるし。  
でも、そんな程度で僕を恨むなんてばかばかしい。・・・心当たり  
はありません」

「そ、そり・・・ありがとう。」めんなさいね(この子、今すつご  
く危ない発言しなかつたかしら。ギャンブルでパンツ一丁ってどん  
な生活送ってきたのよ)「

小声の独り言のつもりだったが思いつきり声に出ていた。  
だがそんなのお構いなしでキリッと、ない、と言つた。  
本当に心当たりはないんだろう。

「今日はもう疲れたでしょ。早めに休むといいわ」

「はい、そうさせてもらこます。では、僕はこれで

静かに席を立ち上がるアレン。

悲しげな表情をしていたが、2人にはわからなかつた。

それほどポーカーフェイスだったのだろう。

部屋に戻ったアレンはその夜、一晩中泣き続けたのだった。

## 第15話　涙の騎士王（後書き）

誤字脱字、感想あればお願ひします。

・・・感想がほしい・・・。

## 第16話 形<sup>ハ</sup>き王の手 (前書き)

今回は挿入絵あります。

## 第1-6話 形<sup>ハタケ</sup>の手

「発動……！」

霧に包まれた大きな部屋。

アレンの掛け声とともに、霧は勝手に動き始め、やがてはアレンの左手に集まつて形を作つていぐ。

作るのは銀色の巨大な爪。

爪の先の部分から徐々に形を成していくが、次第にそのスピードは落ちていく。

そしてついには・・・

「うわっ！…？」

何かが途切れたように、左手は一気に形を崩す。

手首ほどまでできたいたのに、それらはすべて霧に戻つてしまつた。  
アレンはその反動で体制を崩す。  
思いつきり後ろのほうへ飛ばされ、部屋を出てしまい、階段を頭から勢いよく落ちて行つた。

「いっ……！」

階段の下まで行き、頭を抑えている。

頭を押さえながら、若干泣き田になつていいのは秘密だ。

「アレン君？」

「ん? ヴィヴィオ?」

side out

2日ほど前。

怪我がほほ完璧に治つてきただつた。

「左手に義手はやつぱつ無理見たいね」

「はい。医者にも、「左腕だけ人の細胞とは違う」って言われてるんで」

「ねーねー、3人とも」

カリムとアレン、シャツハの会話に混ざるセイ়ン。  
何事かと聞くが、それは意外なものだった。

「アレンの左手って、そのビンの中に入つてんでしょ?」

「え、えっと、はい。そうですね」

「あたしが、思つたんだよね。発動させて腕の形にしつらえれば後は解除してもそのまんまじゃないかつて」

「・・・・・」

「あ、あれ? あたし、なんかまずつた?」

「セ、セインが珍しくす」ことを言つてゐるわ・・・

「今までの私の教えは間違つていなかつたんですね」

「ちよ、二人ともあたしがそんなに馬鹿だと思つてのー!?」

「違つてですか?」

「ひどいー。」

セインの発言に驚くカリムとシャツハ。

苦笑しているアレンの横ではセインが必死に馬鹿じやないと囁いてゐる。

だが意外といい線を行つていた。  
形が変わつても左腕はそこにある。

ときどき微量の光を出してアレンに反応してゐるのだ。  
やつてみる価値はあると思える。

「じゃあ、まあ、やつてみる?」

「えつと、はい。やつてみたいと思います」

といつうわけで早速移動。

アレンは動きやすい格好に着替え、大きな部屋に入つて行つた。

特に何もなく、動くにはもつてこいと言つていいくらい大きな部屋に、自分の左手だった粉を撒き散らす。

最初は何も動きはなかつたが、しばらくすると突然風が吹き、粉は舞い上がって霧となつた。

「じゃあ、行きます」

すー、はーと深呼吸をし、準備完了。

上を見上げ、霧が自分の左手だと再確認する。

「（頼む、発動してくれ）神ノ十字架ー発動ーー！」

^\_30522 — 2054 ^

掛け声とともに霧は渦巻き、左手に集まる。つなぎ目部分が若干不安定なようで、ぶれていが、大雑把な形は形成できてきている。

もう一步。あと一步だった。

もうひと踏ん張りで形ができていた。だが、そう簡単にはいかなかつた。

「やつ つー？」

発動した！

そう確信した時だつた。

集中力は当たり前のように途切れ、振り上げていた左手は形を崩し霧に戻る。

「え、戻つ！？」

さらさらと崩れ去った左手は再び霧になつて漂つ。

成功した、発動できた、そう確信していた全員は言葉を失つた。

なんで途切れた？

なんで霧に戻つた？

どうして発動できない？

様々な疑問が浮かぶが、そんなのはアレンの心を乱すだけだった。ここで発動できなかつたら、一度と戦えない。ヴィヴィオや、アインハルト。みんなと楽しい毎日が送れない。その思いで心がどんどん焦りだす。

「大丈夫だつて！えつと、そうだ、たまたまできなかつただけだよ！ほら、もう一回！」

「・・・はい！」

セインの励ましで、再びアレンは左手を構える。そして先ほどと同じように深呼吸をし、叫んだ。

「発動！――」失敗

「もう一回やってみよつよ！」

「発動！――」失敗

「発動！――」失敗

「発動！」失敗

「発動……！」失敗

「発動……！」失敗

計7回。全部が失敗に終わった。

アレンの体力もそろそろ限界が回つてきていた。

「なんで発動しないんでしょうね？」

「アレン君に反応して発動手前まで來てるけど、体から離れてるからうまくコントロールすることができないとか？」

「いや、もしかしたらもう戻らないんじゃないじゃ……」

カリムとシャツハがちょっと物騒な話をする中、セインはアレンに飲み物を渡していた。スポーツドリンクだが、何も飲まないよりは何か飲んだほうが楽だろ？

若干落ち込んでいるアレンだが、あきらめる気はなかつた。

「諦めないぞ、諦めてたまるもんか！絶対発動させて、みんなのところに戻るんだ！」

side out

「ヒväう訳で、さつきみたいに左手を発動させよ!としてたんだ」

先ほど、聖王教会に来ていたヴィヴィオに会つてしまい、隠すこともできなかつたので今までのことを説明していた。

最初のほうこそヴィヴィオは左手がなく、大人モードになつていたアレンがちょっと怖かつたが、今は慣れてしまい普通に接していた。

「ヴィヴィオ」

「なに?」

「ここのことは、誰にも言わないでほしいんだけど、いいかな?」

「えつと、いいけど、どうして?」

「こんなみつともない姿じや、僕が会いたくないしさ。それに左手がないつて知つたらみんな心配するでしょ?だから、言わないでほしいんだ」

「うん、わかつた」

ヴィヴィオは約束だよと付け足し、笑顔でアレンに返す。  
それを見たアレンはありがとうと言しながらヴィヴィオの頭をなでた。

その後、今更だが、今日来た理由をヴィヴィオに聞いてみた。

「今日はイクスのお見舞いに來たんだ」

「ちなみに聞くけど、ヴィヴィオはイクスと話はできないよ」

「やだな~アレン君、眠つてるイクスとお話はできないよ」

「やっぱ、そうだよね（眠ってるイクスと話せるって、僕は何者なんだ？）」

一人自分が何者なのか疑問に思いながらも、諦める。  
どうせ、このままやつても発動できる見込みがないので、今はヴィ  
ヴィオと一緒にイクスのお見舞いに行くことにしたアレンだった。

## 第16話 形<sup>ハ</sup>き王の左手（後書き）

次回はいまだに未定。

感想、誤字脱字あれば尾根がします。

## 第17話 王と王の約束（前書き）

ついに500000PV突破！

これからもがんばっていきたいと思います！

## 第17話 王との約束

「発動……」

また聞こえてきた掛け声。

左手の復活はまだまだ先そうだ。

理由としては、左手が霧に戻るのがだんだん速くなつてきていると  
いうことだ。それとついでに集中力が持たない。

最初は肘の辺りまで集めることができていたのだが、今では手首は  
おろかその手前までしか集まらなかつた。

「うわっ、とと、危な

またはじかれて後ろのほうへ飛ばされそうになる。

ギリギリのところで踏ん張るが、左手はまた霧に戻つてしまつた。

「やつぱ何度やつても駄目か~

「セインさん、そんなやる気をやがれ落とすよつない」と四つの中のやめて  
くれません?」

「え~、だつてトータルで100回行つてんぢやないの?失敗した  
数」

「うつー…」

ヴィヴィオも見守る中、結局復活しなかつた左手。  
もしかしたらカリムやシャツハが言つていたように、もう元に戻ら

ないのかもしない。

だが、それでもアレンは諦めていなかつた。  
何度も何度も挑戦し、そのたびに失敗していた。

「あ、そうだ」

「今度は何ですか？」

「アレンがヴィヴィオと組みてやれば？」

「「はい？」」

「ほら、あれだよ。アレンがピンチになれば復活すんじゃないかな  
～って」

意外や意外。

またセインが珍しいことを言つた。  
しかも中々にいい発案でもあつた。

とりあえず、どうする?とヴィヴィオと相談。  
別にかまわないし、運動用の服はバッグに入れてあるそうだ。  
イクスのお見舞いじゃなかつたのかな?と勘違いしそうだったのは  
アレンだけだろ?。

「大人モードのほうがいいかな?」

「どっちでもいいよ。やりやすい方で」

じゃあ大人モードと言つて横に浮いていて、ヴィヴィオや他人の動

きをなぜか真似する『デバイス』セイクリットハートを使い、大人モードになるヴィヴィオ。

今まで何度か見たことがあるが、組み手などをするときの視線で彼女を見るのは初めてだった。

紅と緑のオッドアイに、金髪の再度ボニー。

母親であるなのはに似た姿だが、残念ながらアレンはなのはを知らないのでそれはわからない。

準備運動を終え、構えたヴィヴィオ。

それに反応し、最近ご無沙汰でもあつた左目の前にスコープが現れ、目の色が黒と赤ので、変わる前の目の色が反転したような目になる。

もちろん、能力は健在。

魔力量他が簡易的に映し出される。

バトルスタイルは『カウンターヒッター』

相手の動きを読んで強力な一撃を入れるタイプだ。

この目の能力について、アレンはすでに諦めていた。

今は絶対発動するなら、むしろ活用してやるといった勢いで使っている。

ちょっと卑怯かもしけないが、これがアレンの戦い方になつたのだしあうがないと言えばしあうがないだろう。

「じゃ、追い込んで活路作戦、開始と行こうか」

「お互い、手抜きはなしだからね！」

結果から言おう。

結局は失敗だ。

一番最初にヴィヴィオのカウンターパンチがヒットしてアレンの中の何かに火がついたが、勝ち目はなし。いくら左目のおかげで動きが予想できるといつても、やはり左手がないから防御も何もない。全部右手だけなんて無理だ。

途中途中で左手を発動させて防御するが耐えきれず霧に逆戻り。アレンに反応することはあっても、やっぱり反応するだけで何も起こらず、結局は霧のまま漂つてただけ。

「ふう、もう夕方か」

「あ、ホントだ。もう帰らなきや」

「それなら外まで送つてくよ。今日は組み手の相手をしてもらつたからね」

外を見たヴィヴィオは大人モードを解除し、帰る用意を始めた。アレンも外を見るが日が落ち始めていて、きれいなオレンジ色の空になつっていた。

違う部屋で着替えを済ませたヴィヴィオが戻つてくる。バチバチとティムキンンピーとセイクリットハート改めクリスはにらみ合つている。なんでデバイス同士なのに喧嘩してるのがよくわからなかつたが、何かあつたのだろうと1人納得するアレンだつた。

「じゃ、また今度」

「うん。あ、でももうもうテスト期間だから」

「ああ、そつか。ならテスト終わつたとだね。それと、あの事は絶対に誰にも言わないでよ」

あの事とは左手のことだ。

テスト前なのにそんなこと言えれば集中できなくてテストどうじゅうじやなくなるだろう。それだけは本当に迷惑をかけてしまうので言わないでほしかった。

ヴィヴィオは約束を破るような子じゃない。

そう思つていたから言わないでと約束したのだ。

少し話をしながら歩いていともう外だつた。  
アレンはヴィヴィオの姿が見えなくなるまで見送り、手を振つていたのだった。

「ん? 黒い蝶?」

side out

『お前、騎士だな?』

「な、なんだお前は...」

真夜中の暗闇の中。

黒い物体の中から出てきた人影。

右手には蝶が止まつていて、騎士甲冑のような姿。おかしな姿をしているものの、形は人だ。

『貴様の命、もううつよ』

「なー? ぐああああー! ! !」

田の前にいる騎士らしい男性の心臓をひと突き。血が流れ出し、一瞬で彼の命はなくなり息絶えた。

黒い蝶はまた飛び始め、人影に何かを伝える。それを確認した人影はひとり笑いだした。

『ふははははー! ! ! まさか死んでいなかつたとはなー良いね、今度こそ殺してあげるよ』

『アレン・カミタ』

人影と蝶は再び闇に消えたのだった。

## 第17話 王と王の約束（後書き）

次回はまだ未定。

ちなみにもう少ししたら異世界合宿のターンです。

それと最後に出てきたあれ。

ぶつちやければ犯人です。

先に公開している挿入絵を見た人なら容姿はわかりますよね。  
あ、AKUMAじゃないですよ？普通にロストロギアです（あれ？  
これネタばれじゃね？ま、いつか）

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第18話 うつかりな聖王様 第2騎士王暗殺の黒幕（前書き）

今回も挿入絵あります。

ぶっちゃけたら次回も挿入絵あります。

## 第18話 うつかりな聖王様 第2騎士王暗殺の黒幕

「え？ 異世界合宿？」

定期的に来てくれるよくなつたヴィヴィオからの言葉に少しばかし驚くアレン。ちなみに今は前にセインが思いついた『追い込んで活路作戦』を実行中。

横ではまたもティムキャンパーとクリスがにらみ合って喧嘩中だ。

「うん。 テスト明けの4日間を使って知り合いのいる無人世界まで」

今更だが、今の学校はテスト期間。

勉強も大事なはずなのに来てくれているヴィヴィオにアレンは本当に感謝していた。

本人は「ちゃんと勉強してるから大丈夫！」だそうだがちょっと不安。

自分のせいでも赤点を取つたらどうしようかと思っていた。

「スバルさんやティアナたちも来るし、楽しいから。アレン君もどうかなつて」

「でも、僕は今左手ないから」

「みんな気にしないって。それにもしかしたらだけど、行って模擬戦とかやつたら復活しちゃつた、とかあるかもしれないよ？」

「・・・考えておこうかな」

ヴィヴィオの勢いに押され、とりあえず保留にする。

みんな気にしてない、と言つていたが気になるのはアレン自身だった。自分ひとりだけ何もできないなんていやだつた。

模擬戦なんて左目の能力があつても、左手がなきゃ誰にも勝てるわけがなかつた。それに復活するきぞしもないのに、突然復活するこはないだろ!』

「そろそろ夕方だし、ヴィヴィオはもう帰んなきゃダメなんじゃない?」

「あ、ホントだ! じゃ、また今度ね!」

「うん。また今度

side out

同日の夜。

今夜は数日ぶりにコウが来てくれた。

今まで仕事がたまつてこれなかつたらしく。

アレンは最近のことを話し、左手はまだ戻っていないことを伝える。

「そつか。まだ戻んないか

結果を聞いて残念がるコウ。

確かに左手を何度も発動しても全部失敗はがっかりだ。

せつかくの『追い込んで活路作戦』も無意味に感じてしまつ。

だがそれでもアレンは笑顔だった。

大丈夫、絶対復活させてみる、と意気込んでいて見ていて元気になれた。

そんなアレンを見ていて、コウはある提案をした。

「異世界合宿に行つてみない？」

「え？」

「仕事場での知り合いとか、スバルとティアナも来る。他にもその知り合いの娘さんとその友達とかが来るつて。行つたら左手が復活するかもしれないから。ね？」

正直に言つと、アレンは驚いていた。

ヴィヴィオにも言われたことをコウにも言われた。  
たぶんコウの言つてゐる合宿と、ヴィヴィオの言つてゐる合宿は同じものだね？

アレンはどう返せばいいかわからなかつた。

行けば何か得られる。でも左手がない状態ではみんなとは会いたくなかった。

「母さんは、行くの？」

「うん。だから、アレンも一種に行こ」

「・・・僕は、いいかな」

アレンが出した答えはNO、つまりは行かないということだ。  
左手がない状態でみんなに会つ。それはたまらなく嫌だつた。

「こんなみつともない姿で、何もしないで見るのは嫌だった。

「母さんだけ行つてきなよ。僕はここで待つてるからわ」

その答えにユウは驚いた。

どうしても嫌なの?と聞くが、アレンは小さくうなずいた。  
それなら自分も行かない、と言おうとしたがアレンが先にしゃべり  
だし、その言葉は発せられなかつた。

「母さんが帰つてくるまでは左手復活してんだろ?からさ。そし  
たらお帰りつて言つてね。僕もお帰りつて言つから」

そういうアレンは笑顔だったが、目尻に涙が見えた。  
本当は行きたい。行つてみんなと合宿を楽しみたい。  
でも今のままじゃ何もできず、何もやらずに終わつてしまつ。  
それだけは本当に、絶対に、何と言われようと嫌だつた。

その気持ちを理解してくれたのか、ユウもわかつたと行つてくれた。  
本当なら自分も行かずにアレンのそばにいてあげたいと思つたが、  
本人の気持ちを考えると、それは逆にやつてはいけないと分  
かつた。

だからユウはアレンのお願いを聞きいれた。

「じゃ、お言葉に甘えよっかな」

「僕の分まで楽しんできつてね」

あれから数日。

左手の復活はいまだに遠い。

テスト期間も終わりを迎へ、ついに合宿出発となつた。

向かうは無人世界カルナージ。

ミッドチルダとの標準時差は約7時間。

クラナガンの次元港からの臨時次元船で約4時間かけて向かい、合宿の始まりとしては中々に良い始まり方だ。

そして現在はその無人世界カルナージに到着している。

ここに住む住人、メガーヌ・アルピーノとその娘ルールーことルーテシアと挨拶を交わし、4日間お世話になることに。

ちなみにユウがアレンの母親であることは最初の挨拶で言つておいた。

アレンがこれない理由をちょっとまかしながらあるが簡潔に言つたところ、みんな納得してくれたようだ。

「じゃ、大人組みは着替えてアスレチックに集合ね」

『はい!』

ユウとなのはの教導官2人の指示で動く大人組み。

ちびっこたちはノーヴェヒルーテシアに続いて川へ向かつた。

「アレンさんもこれたら良かつたですね」

「アレン君は左手ないから行きたくなかったって言つてましたよ

『え？』

「あ」

うつかり口を滑らしてしまったヴィヴィオだった。

side out

一方、ミッドチルダ聖王教会。

現在の時刻は午後7時ぐらい。

カルナージでの時間は12時で昼<sub>じ</sub>ころだらう。明かりのついたいつもの大きめな部屋でアレンは一人左手の復活を試みていた。

今のところ最高で手首までしか行かない。やはり元には戻らないだろうかと思つてしまつが、諦めずに挑戦するのみだと自分に言い聞かせる。だがさすがに疲れてきたので外の空氣を吸いに休憩を入れた。

「今頃みんな楽しくやつてるんだろうな。僕らはお留守番だね」

肩に乗つていてるティムキャンピーはアレンの顔を見る。いつも通りの表情だが、少しさびしそうだった。

どうにか元気を出してもらおうと一人（？）で試行錯誤するが中々、というかまったく思いつかない。パタパタと回つているがやっぱり何も思いつかなかった。

「あ、また・・・

振り返り、戻ろうとした時だった。

目の前を先日見かけた黒い蝶が通りかかる。  
その時だった。

ザワツ！

後ろから何かただならぬ気配を感じたアレンは反射的に振り向いた。  
空を裂くように現れたそれは、暗闇でも十分わかる形をしていて、  
そして物凄く黒く、闇に溶け込むような色をしていた。  
その頂から人の影が現れた。

「つー？」

その姿を見るなり左目が反応する。

スコープが現れてはいるが、何も映し出されない。  
魔力は感じられるが、それ以外、リンクアーコアもバトルスタイルも  
何も見れなかつた。

人影は手に蝶を止め、ぎょろりといくつもの目を開いた。  
騎士甲冑のような姿をしていて、人の形ではあるが、何かがおかし  
かつた。

『やあ、こんばんわ・・・アレン・カミタ・・・』

第1-8話 うつかりな聖王様 第2騎士王暗殺の黒幕（後書き）

次回、ついにアレン君の左手が進化して復活します！

名前は次回出されますが、『神ノ道化』じゃありません（最終的に  
これですが

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第19話 第2騎士王復活（前書き）

今回も挿入絵あります。  
そしてついにアレン君の左手が復活します！

## 第19話 第2騎士王復活

「ヴィヴィオ、それビリーヴィー？」

「そんなの聞いてないよー？」

アレンが黒い人影に出会う少し前。ミッドの時間でいえば大体午後4時、カルナージなら朝9時ぐらいだろう。

川へ遊びに行く途中、うつかり口を滑らせ、アレンの左手がない状態がばれてしまいみんなに問い合わせられるヴィヴィオ。どうにかごまかせないと必死に考えるが、考えつくより先にみんなから来る質問でさらにもう考える暇がなくなってしまう。

「アレンがどうかしたのか？」

「何か楽しそうな話？」

前の方でルーテシアと話していたノーヴェとルーテシアが後ろを振り向き、後ろ歩きしながら話に混ざりてくる。ヴィヴィオは笑いながらごまかそうとするが、残念なことにリオが言ってしまい、さりにこの2人にはまってしまった。

「左手がない・・・か」

「第2騎士王に関する資料あつたかなー」

「でも、あいつはあいつで結構強いし、大丈夫なんじゃねえか？それに聖王教会にいるなら、オットーとティードもついてるだろうし、

事故は起きないだろ」

ヴィヴィオの捕捉で話の内容を理解する2人。オットーもティードも元ナンバーズ。実力はあるし、護衛としても心強い。安心しても大丈夫なはずだ。

だが、それでもノーヴェは1人不安だった。つい最近ギンガとスバルから聞いた話で、たくさんの騎士が重傷を負う、もしくは殺害されているという事件があった。今のところ八神家から被害者は出でていないが、家族のほとんどが騎士なので狙われる可能性が高い。そして、カミタ家もまたしかりだ。

第1騎士王末裔のユウ。  
同じく第2騎士王末裔のアレン。

2人とも騎士だ。

それも王ということで、さらに狙われる可能性が高くなる。今回アレンが左手を失ったのも同じ犯人がやつしたことではないのかと、ノーヴェは1人思っていた。

「ま、そんな簡単に見つかって殺されるとかはありえねえよな」

「？ ノーヴェ？」

「ん？ ああ、いや、なんでもねえよ」

『ふむ、『白髪』に『奇怪な左目』そして『左手がない少年』。確認しよう、お前がアレン・カミタか?』

黒い人影はアレンの大まかな特徴をあげ、確認していく。  
複数の開いた眼球はギョロギョロと動き回り、時に一斉にアレンをにらむ。

形は人。  
全身を騎士甲冑のようなものを纏っている。

そこはまだ”普通”だ。

違つたのは手には丸く短い筒のようなものがあり、胴が物凄く細く、普通なら2つしかない目がいくつも開き、灰色と黒で統一された。

「何者ですか?」

『おつと、これは失礼。我が名は『ナイト・ハンター騎士狩』古代ベルカのとある騎士嫌いの人物が作った自立型ロストロギアだ』

自己紹介を終えた人影　　ナイト・ハンター（以降ハンター）は礼儀正しく、ペコリとお辞儀をする。  
自立型ロストロギアなんて聞いたことも見たこともない。  
古代ベルカの騎士嫌いなんてほとんどの人間を否定するようなもんだ。

そして今のアレンの状態は最悪。

左手がなくて戦えず、逃げようとすれば捕まるだろう。勝ち目が限りなく、いや絶対的に皆無だ。

『さあ、私を楽しませてくれよ』

「う！」

突然辺りの空気が変わった。

ハンターが結界を張ったのだろう。しかも封鎖領域。これで逃げることも、誰かを呼ぶこともできなくなつた。

『ノルマニ

両手の手首に付いた筒から紫色の魔力刃を出すハンター。その場から一気にアレンの懐まで”飛んだ”。

魔力刃で一突きではなく、スコープを貫きながら左目を”えぐつた”。

右手で抑えるが痛みが減ることはない。むしろ増えていた。  
大量の血が出て、左目は完璧に使いものにならなくなる。  
ようよると立ちあがるのがやつとだ。

『その左目、相手のステータスがわかるんだろう？ そんな厄介なものがいると詰まんないじゃないか』

危険を感じたアレンは痛みを無視してその場から移動した。  
どこでもいい。どこか遠くへ。

今の状態じゃ勝つなんてできんないのは当たり前。捕まれば確実に殺される。

力チャヤ力チャヤと足音を立てながら後を追うハンター。それほど余裕で、本当にこれ樂しんでいた。

「は、発動！」

恐怖から体の震えが止まらなくなるアレン。

必死に左手を発動させるが、集まるどけるかちょっととも反応してくれない。

こんなに怖くて、こんなに冷たいのは初めてだった。だからどうすればいいかわからなかつた。

「動け！動けよ！」

叫んでも何も起じらない。

どんどん近づいてくるハンターを見、また恐怖する。またそれ繰り返し。

やがては追いつかれ、殴られ、蹴られた。

「がはつー！」

『ほりほり、早くなんとかしないと死んじゃつよ～？』

倒れたアレンの首を片手で持ち上げ、手に力を入れていく。

気がつけばそこは聖王教会付近の川だった。

そこで、何を思ったかハンターは、持っていたアレンを川へたたきつける様にして沈める。

「「Jばばつつ……」

『「Jのまま水の中で窒息死するか、首をへし折られて死ぬの、どっちがいい?』

アレンからの返事はない。

右手だけが水の外でもがいでいるが次第に意識が朦朧としてくる。酸素が足りない。空気がほしい。もがいてももがいても力が出ない。

水が左目に入つてきてさらに痛みが増してもっと力が出なかつた。

もう駄目だ・・・

そう思った時だつた。

『何! ?ぐわつ ! !』

突然ハンターの腕が自分の首から離れた。上半身だけを起き上がらせ、精一杯空気を吸う。

だけど何か違和感のようなものが消えていた。

「え、嘘・・・でしょ・・・?」

違和感があつた場所は左手が“あつた”場所。

その違和感が消え、あつたのは見覚えがあるようないような十字架が描かれた真っ黒な左腕だつた。

そしてもう一つ。

先ほどまでにハンターがいた場所に白い何かが浮いていた。バリアジャケットで作ったあの仮面のついた白いマント。それが自分で勝手に動き、アレンを守つていたのだ。

「お前は・・・僕の・・・」

アレンに向き直り、顔を見つめる仮面。  
それをみたアレンは黒い左手で仮面に触れた。  
その瞬間、周りがまばゆい光で包まる。

『な、なんなんだお前は！』

ハンターは荒々しく叫ぶ。

こんなの想定外で、予想外だ。  
こんな左手がなかつた子供に負ける何んてあり得ない。  
そう考えていたからだ。

光が晴れ、アレンの姿が見えてくる。  
左手は前の巨大な瓶の詰めではなく、黒くシャープな鉤爪。  
仮面のついた白いマントをたなびかせ、えぐられた左目は何事もな  
かつたように再生され、2つのスコープを出現させていた。

「僕は、道化・・・右は白、左は黒の2色の道化・・・今日からこの武器の名は

> i 3 0 5 2 4 — 2 0 5 4 <

「黑白道化だ」

黑白道化

## 第19話 第2騎士王復活（後書き）

次回は戦闘描写から。

そしてその後意外なこと…。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第20話 落ちる王

「ティム」

静かに相棒の名を呼ぶ。

その言葉にすぐさま反応し、ティムキャンパーはアレンの方へと止まつた。

それを確認すると、アレンは白いマントだけを消した。

発動しているのは黒い左手と白い右手、そして仮面の部分だけだ。

「セットアップ。バリアジャケット再設定」

一瞬だけ光に包まれ、バリアジャケットを身にまとったアレンが出てくる。前のバリアジャケットとほとんど大差ない。だがアレンはちょっとした違和感を覚えた。

そう、髪型だ。

後ろの方を触つてみると跳ね上がつてゐる。

前髪も軽くだが二つに分かれてしまつてゐる。

『お前、本当に何者だ？道化？第2騎士王じゃないのか？』

「僕は僕だ。日常の中の僕も、白と黒の2色の道化としての僕も、第2騎士王としての僕も、全部まとめて僕だ」

『そりゃ、なら私は狙つた獲物は絶対に逃がさない狩人だ。今度こそお前を殺す！』

「来い！さっきまでの怯えた僕じゃないってのを見せてやる…」

ハンターが一気に跳躍し、アレンに飛び掛かりながら魔力刃を展開して思いっきり振りぬいた。それを最小限の動きでかわすアレン。

復活した左目のスコープにはハンターのステータスが映し出されていた。

逆さペンタクルの呪いが強くなつた証として、人じやないものでも見れるようになったのだ。

『のぉーーー』

かわされた攻撃の後、すぐに追い打ちをかけるよつこまた振りぬく。アレンはかわすではなく、左手で受け止めた。

ギリギリと力を入れてくるが、なぜだか押し返せない。

それが不思議に思い、ハンターは困惑していた。

薙ぎ払い、いつたん距離をとるアレン。

そして再び白いマントを展開させ、仮面をつけた。

「クラウン

」

マントを大きく広げ、それを身にまとう。

さらにそこから蜘蛛の糸のようなものをハンターに向けて大量に伸ばした。

「ベルトーーー！」

素早い動きで糸はハンターを襲つ。

両腕で数本は薙ぎ払うことができたが、何分数が多い。

全部さばき切るには腕が2本じゃ足りなかつた。  
最終的にはハンターの両腕を刺し貫き、もぎ取つた。

これでは狩る前に逆に狩られる。

そう確信したハンターは、ある行動に出た。

それは逃亡だ。

今の状態では万に一つ勝ち目がない。

ならばいつたん引いて体制を立て直さなければならない。

狙つた獲物は逃がさないというプライドに反するが、今は仕方がないといえるだらう。

ここに来るとき出した黒い建造物。

それを再び出現させ、逃げようとした時だつた。

「逃がさない……」

その何ともわからない建造物にアレンが入り追つてきたのだ。

騎士狩、ということならば当然ユウが狙われる。

今逃がしたら行くすべのないアレンはどうしようもできなくなる。  
だからこそここで仕留めるため追いかけたのだ。

黒い建造物に入ると風景は一気に変わつた。

暗かつた周りは一気に明るくなり、どこかの町のよつな場所に出る。

だが人の気配はちょっともしない。

左田も反応しないし、無人なのだらう。

チラチラと左右を見て回すが、今は関係なかつた。

とどめがさせる状態ならば今がチャンスなのだから。

見逃すわけにはいかない。

「これで終わりだ！エッジ

」

『来るなあああああ……』

「…………」

とある家のドアを開けて逃げようとするハンターを一撃。まばゆい光を伴い、巨大化した左手で胴体を引き裂いた。ドアの外に出ると同時に、ハンターは爆発し跡形もなく無くなる。

やつた！

そう思つたアレンだが、何かが変だつた。

「え、縁？」

田の前には縁。

といひどりに違つものは見えるが、一番多いのは縁だった。それと屋根が見える。たぶん家だらう。

そして最後に落下してゐる感覚。

風が下から当たつてくるあたり本当に“落ちてこらのだらう”。

「え、ちよ、落ちてる……」

アレンは現在落下中だった。

無人世界カルナージ。

アルピーノ親子が住むこの世界で、ヴィヴィオ達は合宿に来ていた。

時間は大体1~2時のお昼頃。

ミッドで言つたら午後7時過ぎだらう。

川遊びを終えた子供メンバーも戻つてき、大人メンバーが昼食の料理をして、準備が整つた。全員でテーブルに料理を並べ始めている時だった。

「ん？」

「・・・て！・・・どい・・・ーどいて！・どいて！・どいてえええ  
！！！」

空から声が聞こえてきたのだ。  
しかも聞きあほえがある声。  
だがまず空から聞こえるのがおかしかった。

気がついた数人は空を見上げる。  
確かに人影が見えた。

白いマント。

左手は鉤爪が付いている。

ついでに言つなら近くに羽がついた何か。

「みんな、料理守つて！」

なのは掛け声でテーブルに置いてあった料理をすぐめざむかる。

落下中の少年はこのままでは確実に落っこちるだろ？

何を思ったか、少年は”構えた”。

「へ？」

「クラウン・ベルト！」

ちょっと遠くだが、家の周りにあった木の一本に何かを伸ばした。そしてそのまま一気に伸ばしたものを作りとるようにするが、今度は木に思いつきり頭から突撃してしまった。

木はびくともしていない。

むしろ無傷だといつてもいいぐらいだ。

その少年は木の下で頭を押さえている。

「あ、頭が……割れる……父さんばっくれられたときの」と  
思い出しちゃうよ……」

爪のついた左手で頭を押さえる。

血は出てないから大丈夫だが、頭の痛みは相当なものだろ？  
バリアジャケットを解除し、普通の格好に戻る。

だが左手は真っ黒だった。

「はあ、ここどこだ？なんか違う場所に来ちゃったみたいだけど。  
ティムキャンパーはどうか行っちゃうし、僕ここから動けないな

そんなことを呟いている時だった。

心配で見に来たユウが後ろから声をかける。

「ア、アレン……？」

「つーか、母さん? な、なんで母さんがここにいる…？」

最後まで言い終える前に言葉は遮られた。

ユウが少年 アレンに抱きついたからだ。

「ううとうとうまだどうしていいかわからないアレンはテンパっていた。

「お帰り……」

「……た、ただいま」

泣きながらユウは抱きつく力を強めた。

正直言つて心配してくれるのはうれしいが、痛い。

でもそんなことより、お帰り、と言つてくれてうれしかった。  
それだけで痛いのなんてどうでもよくなつたのだ。

side out

再び昼食の準備を再開。

あの少年 アレンはユウに任せ、他はちょっと意味だった。

「やう言えれば、さつきのアレンの声に似てなかつた?」

「そうね。でもあっちからひつひつ普通これないでしょ

スバルとティアナの他愛もない話

アレンを心配するが、次元移動出来なければ何の意味もない。

そもそも空から降つてくる時点であり得ないのだから。

「あ、コウさん戻つてきた」

「さつきの子もいるみたいね」

森の方からコウが戻つてくる。

その隣には先ほどの少年がいて、2人話している。  
だけどその少年の左手は真つ黒で、少しおかしかった。

だが顔に見覚えはあった。

白髪の少年、なんてアレンしかいない。  
大きいのは大人モードだからだろう。

「あ、あれ? アレン? ? ? だよ?」

「そ、そうね。でも、どうしているのかしら?」

若干困惑する2人。

他の子供メンバーも気付き始めてそちらに目をやる。  
もちろんすぐにアレンと気がついた。

「あ、あははは。な、なんていふか、事故でこっちに来ちゃいました」

苦笑いするその少年はまさしくアレンだった。

## 第20話 落ちる王（後書き）

ハンターが使っていた建造物『ノアの方舟』です。使えるのはハンターが他のロストロギア『方舟の鍵』を持っているからです。

（後付けごめんなさい）

それと、他に使えるのはアレンだけです。理由は・・・まあ、奏者ですから。

ちなみに、いまさらですがアレン君の今の状態（服装）はアジア支部にいるころのあれです。動きやすさメインだつたらこれがいいかなーって思いました。

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第21話 速き騎士と道化の騎士H (前書き)

今回はアレン君 vs ハリオ君。  
好きな子にいじり見せようがんばります。

## 第21話 速き騎士と道化の騎士王

「ということです・・・」

『あー、まあ、しょうがないわよね。事故で”次元移動”しちゃつたんだから』

「本当にすいません。戻るにしてもどうしようもないんで」

あの後、昼食を取つてから次元通信でカリムと連絡。謝罪他を言つて、今に至る。

問題なのは来てしまつた事や移動方法じゃない。  
移動してしまつたことだ。

無許可での次元移動は禁止、犯罪とされている。

その次元世界内だけでの移動であればまだ大丈夫なのだが、ミッドからカルナージに事故で来てしまつたとはいえ犯罪は犯罪。いくら身内のユウでも目をつぶるかと言われば難しい。

カリムも同じくだ。

いくら管理局に籍を入れていて発言力があると言つても無理だ。

そしてここにいるなのはと執務官のフロイトもまたしかりだ。  
友人の息子だから助けてあげたいが、見逃すことできない。

「そついえば、服とかどうするの？」

「あ、そこら辺は大丈夫です。ティムの内部空間にスペアを入れてあるんで」

服の心配は大丈夫だ。

ティムは自分の中少し小さいが内部空間を持つている。

服のスペアと食糧を入れており非常時に対応できるようにしてあった。

ついでに言つとティムは自分が食べた物を服を入れている内部空間とは別の内部空間に入れている。

その食べたものがどういう原理かわからないが魔力に変換され、その魔力を貯蔵することができるのだ。

『じゃあ、今日は特別に見逃しましょつか

『へ?』

カリムの言葉にアレンだけではなく他のメンバーも反応する。まさか見逃すところ言葉が出てくるなんて思つてもなかつたからだ

うづ。

その言葉を聞いて一番うれしかつたのはアレンとコウだ。コウはアレンが助かつたという意味で喜んでいた。

アレンもみんなに迷惑をかけないで済むと一安心だった。

「ありがとうございます!」

『ところで、左手はもう大丈夫なの?』

「え、あ、はい。まだ感覚はボケてますが、もう大丈夫です。あ、でもイカサマはまだ無理かな」

そう言って左手を見せるアレン。

真っ黒くなり、埋め込まれていた手のひらの十字架はなくなっている。

その代わりに白い十字架が手のひらに描かれていた。

普通の人との違いは色と指の形ぐらいだらつ。

今までの赤い腕は接合部分がでこぼこしていたの比べ、今の状態は完璧に違和感なく接合されている。なぜか左肩の周りに模様が描かれているが気にしてはいけなさそうだ。

『では、後は大人のみなさんによろしくお願ひします』

「本当にありがとうございます」

カリムの言葉に礼を述べる。「  
なのはとフロイトもとうえず今回は見逃すところ」と納得してくれたようだ。

「じゃ、私たちは午後の訓練を行こうか」

「アレンはどうあるの?..」

「どうするって言われてもなあ・・・川があるみたいだけど僕は泳げないし、訓練に混ぜてもらえるなら混ぜてもらいたいな」

「って言つてるナビ、どうする?..」

「ゴウさんが教えてるんですね?..ならスバルとかと模擬戦してもらって実力を見たいです」

「気合で頑張らせていただきます！」

side out

そんなこんなで午後の訓練。

アップとして準備運動からランニング。そこからいつものアレンの訓練メニューを一通りやってエリオと模擬戦という予定になつた。

まず驚いたのはアレンの体力の多さ。

WFメンバーですら今でもアップで息を切らし始めるのに対して、アレンはけろりとしていた。さらに自分のメニューでやつと息を切らすといった感じだ。

片手とう立腕立て500回。

もも上げ1000回。その他大量。

さすがはユウの息子で愛弟子といったところだ。

ユウも増やしそぎてたらこうなっちゃた、と本人もこいつなるのは予想外だった。

とりあえずアップも終わり、準備は完了した。

セットアップしたエリオとの1対1の模擬戦。ギヤラリーが増えてきたのはしょうがないのだ。

アレンはアインハルトに、エリオはキャロにいことじりを見せよう<sup>りよう</sup>と氣合が入つてきている。

しかもお互い騎士で、先輩後輩見たいな関係になつていてる。さらに負けられなくなってきた。

「そういうえば、そのマントはどうから出てきたの？バリアジャケット？」

「いえ、これは僕のレアスキルです。『黑白道化』は僕の魔力を使つての左手の武器化とこのマントの形成です」

「へえ～」

「2人とも、そろそろいいかな？」

「「はい」」

「じゃ、始め！」

なのはの合図で模擬戦スタート。

左目の能力はやつぱりずるい気がするがもう気にしない。

それと、エリオのバトルスタイルは『スピード』を使ったものだ。

まずはエリオが様子見で強めに一撃を入れた。

それを左手でガードはせず、かわしてさらに動きを読もうとする。

動きは悪くないと思いながらもそこからさらに追撃。

今度はガードはせず、アレンは構えた。

そして左手のエッジを内側に斬った。

攻撃技が来る！

そう思ったエリオは、その攻撃が出される前に攻撃しようとするためさらに加速。だが、その突撃はなにかに”ぶつかってはじかれた”。

『！？』

それに全員が驚いた。

エリオがぶつかつたのはがれきや建造物などではない。  
アレンが作ったシールドだった。

「クロス・グレイブの進化版かな？」

アレンの最強の技『クロス・グレイブ』は通常なら一度に横薙ぎと振りおろしを決める、当たれば一撃必勝の大技。それが防御用の技になっていたのだ。

驚くのも無理はないだろう。

「じゃあ、今度は僕から行きますね！」

その場から一気に跳躍。

エリオの田の前まで行き、左手を駆使して武器をはじいて隙を作ろうとするひ。

だがエリオもやられっぱなしではない。

そこは先輩の意地で負けじと速さで翻弄しようとするが、アレンの左目がエリオの追いかけるせいでの動きが読まれやすくなる。  
それを知らないエリオはなお大変だろう。

「開いた！」

一瞬のすきを突き、今度は左手を外側に斬った。

今度は攻撃技。クロス・グレイブの様だが一度しか腕は振つていな  
い。通常なら2度振る動作が見られるはずだ。”今までの”クロス・

グレイヴならば。

ギリギリのところで防御に成功したエリオの前には光る十字架があった。先ほどの防御のときとの違いは、十字架のデザインだらう。

「あれ？ 防御されちゃったか」

「ア、アレン、い、今何したの・・・？」

「え？ 一撃で一撃入れただけだよ？」

「どうやつてー?」

「え？ だから、どうやつて」

近くの瓦礫に向けて軽く一振り。

すると瓦礫はいとも簡単に四等分されてしまった。

一瞬で、しかも呼び動作なしで2回の行動をしたアレン。

いろんな意味で手先が器用だと改めて思い知られたユウだった。

## 第21話 速き騎士と道化の騎士王（後書き）

次回はまだ未定。

とりあえず今回の模擬戦の結果から始まります。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第22話 Hの子守唄（前書き）

今回は物凄く普通な回。

終盤にアレン君がピアノを弾きます。

もちろんあれ、14番目の子守唄です。

歌詞を載せたいですが載せたら消されるんで頭の中流していくべきさ  
いね。

## 第22話 王の子守唄

「ハア、もう……無理。全然勝てない……」

結局模擬戦はアレンの負け。

途中からエリオがソニックムーヴを使ってきたり、戦法を変えて肉を切らせて骨を断つ作戦にしたが威力的に耐えられなかつたりと残念。

だがアレンはアレンで何かいいことがあつたようで……。

「覚えた……」

何を覚えたのかわからないが発見ありの様だ。

その分左目を酷使しすぎたのか、先ほどから押さえている。

「大丈夫?」

「あ、はい。あれ覚えるのに左目じゃないと追い切れなかつたんで

「? まあ、あんまり無理しないようにね」

ちょっとよくわからなかつたが本人は大丈夫そうだ。  
押さえている左目を外すと目は閉じたままだがそのうち開くだ  
るう。

いまだに大人モードを解除できないからバリアジャケットを解除しても外見は変わらず。別に解除してもいいと思うが、左手が体に完璧に馴染んでない状態で体の大きさを変えればまたひどいことになるだろう。

そう考へるとアレンはぞつとして解除できなかつた。

「さて、模擬戦は終わつたし。私たちはウォールアクトしようか」

「僕は一旦休んでもいいですか・・・? もう、体力が・・・」

「もちろんだよ。お疲れ様」

休憩の許可をもらつて早速休憩。

現役局員のウォールアクトを見て何か発見がないかと思うがあんまりなさそうだ。

いつの間にか左目も開いて、大分体力も回復してきた。  
改めて左手を空に掲げ、眺める。

前の不安定な赤い腕よりも安定した黒い腕。

赤かった十字架は白に変わった。

まだ怖がられるかもしれないが、前に比べたらまだましだ。

姿かたち、全部が変わつた。

大きく、堅く、速く、雄々しかつた銀の爪から、普通の大きさ、前とは比べられないぐらいの堅さ、前なんか比じやないぐらいの速さをもつた黒い鉤爪になつた。

「また初めからやり直しか」

一方、ルーテシア達の方では。

ちびっ子たちはルーテシアの古代ベルカ関連の資料を見ていた。

聖王に関すること。

霸王に関すること。

騎士王に関すること。

ユウが知っていること以外のことがたくさんあった。  
一番多かったのはやはり騎士王関連のことだろうか。

「うわあ、すごい。昔の第2騎士王とアレンの姿がすこいに似てる。といふか瓜二つだよ」

「ホントだ。顔の模様も全部同じだ。性別が違うだけみたいだけど、これは似すぎだね」

古代ベルカ最強の騎士の一人、第2騎士王『ネア』  
第1騎士王との違いは、コンビネーションの強さ。  
霸王『クラウス』とのコンビは古代ベルカ最強。  
勝てる者はなしそれただ。

だがその生涯は悲しいほど短い。享年19歳。

そんな若さでこの世を去ってしまうほど、彼女は弱かつたわけじゃない。

アレンと同じ左手を持った彼女は、耐えられなかつたのだ。  
左手の進化に、第2騎士王自身の進化に。

進化の最終地点はすべて死。つまり、ネアは左手に殺されたのだ。

そう考へると、アレンも同じ道をたどる可能性がある。

今年の年齢から考へるとあと7年。  
もしかしたらもうと早いかもしない。

「アレンさん、少し心配です」

「やうですね。でも今と昔は違つから大丈夫だと思いますよ」

「だといいのですが」

先ほどやつてきたAINヘルトも心配氣味。  
ヴィヴィオも心配はするもののプラス思考。

「ま、死なれちゃ困るのはみんな同じってことだろ」

「あれ? ジヤン、もしかしてアレン君のこと心配してんの?」

「バツ、お前な!俺は負けっぱなしだから勝ちたいだけなんだよー。」

ジヤンの発言にリオがちゃかす。

予想通り、素直じゃないものの心配はしているようだ。  
それを見てヴィヴィオやロロナもくすぐすと笑っている。  
このやり取りは意外とお決まりなようだ。

「あら? もう夕方? 早いな~」

「夕飯のお手伝いしなきゃね」

ふとルーテシアが窓の外を見たらすでに口が落ち始めていて、空は  
すでに綺麗なオレンジ色になっていた。

時間がたつのは意外に早いな~、と感じながらも見ていた資料を棚

に戻し始める。そんな中でこんな話が。

「アレンの「」とすり「」く心配してゐみたいだけじ、アインハルトつてアレンの「」ツ好きなの？」

「え、ええー？」

「そうなんですか？」

「え、えつと、そ、その・・・ーー。」

「ものす」ぐ動搖しきやつてゐわね。図星つてやつへ。」

女の子に似合つてゐる会話だった。

s i d e o u t

「眠れないな・・・」

同日夜中。

時刻は大体〇時前ぐらいだろうか。

みんなもう寝静まつてゐるが、アレンは眠れないのでいた。

夜空に浮かぶ月は二日月。  
見上げれば明るく、綺麗だつた。

こんなに眠れないのはすごく久々だ。

昔、家で一人膝を抱えていたことを思い出す。

『子守唄を歌つてあげよ』

ふと頭に浮かんだその言葉。

手を差し伸べてくれていたのは前の母親ではなく、銀髪の女性。その場に誰もいないはずなのに聞こえてきた歌は優しかった。

どこからともなくピアノの音が響き、声は透き通りていた。

一度しか聞いたことがなく、今の今まで忘れないが、今さつき思い出した。

「あ、ピアノ……」

ティム・キャンピーを連れ、歩いていると月明かりに照らし出されたピアノを見つけた。部屋のドアは開いていて、引いてくれと言わんばかりだ。

だがアレンは生まれてこの方一度もピアノを弾いたことがない。丈夫なのだろうか。

ポロン・・・

鍵盤に触れる。

綺麗な音が響き渡る。

頭の中に歌詞が、楽譜が浮かんでいきた。

今なら弾けるんじゃないかな。そう思いピアノを弾き始めた。

頭の中で誰かが歌う。

今弾いているメロディに合わせてくれている。

しばらく弾きながら歌つていると、声をかけられた。

「アレンさん……？」

「aignhardt?」

aignhardtだった。

アレンの弾くピアノの音と、歌声で起きてしまったのだろう。気にはしていないようだが、それよりも気になることがあった。

「泣いてるんですか……？」

「え？」

泣いてる。

そう言われ、すぐさまぬぐつた。

確かに涙が流れている。何が悲しいのかわからないが涙は止まつてくれなかつた。

窓に映つた自分の顔を見れば、左目の模様が細かくなり、発動状態に似たよくなつていい。そしてやはり涙が止まらない。

「あの、続き、聞かせてもらひてもいいですか……？」

「え？ ああ、うん」

中断していた演奏を再開する。

メロディは風に乗り、歌は透き通る。

優しい子守唄は、アレンの心に響いた。

そしてやがて涙が止まらなくなつてくる。

歌声は徐々に涙ぐんでくるがやめようとはしない。涙で鍵盤がぼやけてくるが、気にせず弾き続けた。

なんで涙が出るんださう。

なんでこんなに懐かしいんだろう。

そう思つていた時だつた。

突然アレンの後ろに白く光る”なにか”が出てきた。

「これ、なに・・・?」

その夜は一旦放置して、寝よう。

朝になつたらみんなに言えぱいい。

そう思つたアレンとアインハルトは部屋に戻つたのだった。

## 第22話 HのH守頃（後書き）

最後の方がなんか適當すゝめる?  
氣のせいかな?

次回は方舟をじつにか消して陸戦エキシビジョン。  
アレンはティアナチームです。

「やつぱり眠れないなあ」

AINHARDTが寝たのを確認したARENは、またあのピアノがある部屋に足を運んでいた。TIMMYはもう頭の上でぐつたりだ。たぶんだが、もう真夜中でみんな絶対に起きない。

突然出てきた”白い何か”はまだある。  
どうにかして消せないだろうかと考えながら、またピアノを弾いている時だった。

「あ、消えた。もしかして、僕の思いに反応するとか？・・・開」オープン

ポロン・・・  
試しに適当な音を出しながら「もう一度出でっこ」と願ひ。すると、先ほど思つたようにARENの言ひことを聞くよつだ。  
とりあえず、もう一度消して、またピアノを弾き始めた。  
なんでだか、ピアノを弾いている間だけは何も考えずに済んだ。

side out

翌朝。

みんな目を覚まし始めた。

大人メンバーが先に、子供メンバーが後に。だが1人足りず、違和感を感じていた。

「あれ？アレン君は？」

「昨日、寝る前はいたのに」

ヴィヴィオやコロナがアレンがないことを言つ。確かに、昨晩の寝る直前まではいたはず。寝た後はどうかわからないが、たぶんいたはず。そんな、疑問を浮かべている時だ。

／＼＼＼

どこからか、ピアノの音が聞こえてくる。少しすると歌声も聞こえてきた。

その声の主はまさしくアレン。

甲高い声はみんなの耳に入ってきた。

子供メンバーと頼まれたスバルは声のする部屋へ。扉を開けると、アレンの背中姿があり、ピアノを弾いていた。

「つ、ああ、もう朝か」

『え？』

「あれ？みんな、どうしたんです？もしかしてもう朝ご飯の準備始めちゃつてるとか？」

振り向いたアレンの左目は発動状態に似ていた。

目の周りの模様は細かくなり、右目には泣いた跡。

ぶつちやけてしまえば、昨晩AINHARDTが見た状態と同じ状態だつた。

しかもさつきの発言からすると徹夜の様だ。

AINHARDTは黙っているが、少し心配そうだ。しかもかなり。

「ふう、ティム。朝だよ」

頭の上で眠っているTIM KIRKINGERを軽くつつく。  
ちょっととびっくりしたか、すごい勢いでアレンの周りを飛んでいる。

「あははは、『めん』『めん』。ちょっと強すぎたね」

昨日、とこりか少し前のアレンと何かが違った。

いつもは元気でどこにでもいそうな普通の男の子。  
でも今のアレンは、どこか違う、落ち着いた雰囲気があった。  
見てない間に何があったのだろうとスバルは少し心配だった。

side out

「全員そろったね。じゃ、試合プロトコーサーのハーヴィさんから

！」

「あ、あたしですか！？」

朝食をとり、全員が集合した。

そしてフェイトの紹介？でノーヴェの挨拶。

「えー、ルールは昨日伝えた通り赤と青の7人チームに分かれたフィールドマッチです。ライフポイントは今回もDSA A公式試合用タグで管理します。後は皆さん怪我をしないよう正々堂々頑張りましょう」

『はーいっ』

2日目の予定は陸戦エキシビジョン。

これが一番の目的とも言つていいだろう。

ちなみにアレンはコウが変わってくれたので人数的にはばっちりだ。もつと言つてしまえば赤組のティアナチームだ。

「じゃあ、赤組、元気に行くよー！」

「青組も、せーのー！」

『セーット・アーップ！－』

赤組

ティアナ	CG	LIFE	2500
フェイト	GW	LIFE	2800
ノーヴェ	FA	LIFE	3000
キャロ	FB	LIFE	2200
アレン	GW	LIFE	2800
AINHALT	FA	LIFE	3000
コロナ	WB	LIFE	2500

青組

なのは : CG	LIFE	2500
スバル : FA	LIFE	3000
エリオ : GW	LIFE	2800
ヴィヴィオ : FA	LIFE	3000
ルーテシア : FB	LIFE	2200
リオ : GW	LIFE	2800
ジヤン : FA	LIFE	3000

『それでは

『みんな元気に・・・』

メガーヌとユウがモニター越しで試合の合図の準備。  
後ろでガリューとフリードがゴングを鳴らそうとしている。  
そして2人の声と同時に・・・

『『試合開始』』！』『

ジャアアアアアアンッッ！－！－！

「ウイニング・ロード！－！」

「エアライナー！－！」

ゴングと一緒にアスレチックじゅうに魔力でできた足場が広がる。  
すぐにその足場に乗り、走り出す影が六つ。  
子供チームが先走っているのだろう。

「行くよ、リオ！ジヤン！」

「オッケー！」

「了解！」

先に走り出したのはヴィヴィオ。  
それに続いてリオとジャン。

逆側からはアレンとAINHの年上2人に続いて年下のコロナ  
のメンバー。ユウやなのはいわく意外にバランスが取れてるチーム  
だそうだ。

「AINHはヴィヴィオを、コロナはリオをお願い」

「承りました」

「任せてください！」

ヴィヴィオ vs AINH FA vs FA  
ジャン vs アレン FA vs GW  
リオ vs コロナ GW vs WB

第23話 陸戦エキシビジョン 01（後書き）

今回からしばらくバトルメイン。  
途中挿入絵を入れるつもりです。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

## 第24話 陸戦エキシビジョン 02（前書き）

今回は挿入絵あります。

ああ、これで挿入絵のストックは終わりかあ・・・。  
新しく描かなきやなあ・・・。

## 第24話 陸戦エキシビジョン 02

ジャン vs アレン FA vs GW

「雷衝一幻！」

最初に戦った時と同様、先に仕掛けたのはジャン。

迫りくる斬撃と雷は、前にみたものとは比べ物にならない量。たくさんの練習を積み重ねてきたことがわかる。

アレンも前と同じように、一撃で振り払おうと思った。だが、今の左手は巨大化させることも、伸ばすこともできない。ジャンはそれがわかつていて同じことをしたのだろう。

（受け身に入った！足を止めてくれればガードしたときの着撃時に回り込んで斬れる！）

左手を構え、内側に斬ろうとするアレン。その姿は前日のエリオとの模擬戦時に使ったガード版クロス・グレイヴそのもの。しっかりとそれを見ていたので学習済みだ。六幻を握る手にさらに力が入る。

考えが浅い、とはいうことか言ひのうだらう。

第一にアレンがいつ内側に斬る動作がガードといったらどうか。第二にアレンがクロス・グレイヴをしてくるという確証はない。もしかしたらエッジエンドや、他の技かもしれないのに。そしてアレンの行動はジャンの期待をことごとく裏切った。

確かにクロス・グレイヴではあった。

しかし、使ったのは両方。ガードと攻撃技だ。

左手を内側に斬った後、すぐに体の向きを変えて外側へ斬る。

一回目はガードで、二回目が攻撃だ。ジャンの攻撃は盾に当たり、回り込んで攻撃しようとしたジャン自身は先読みをされていたか、クロス・グレイヴの餌食に。

ジャン

LHF E 30000 - 18000 = 12000

「クラウン・ベルト…」

体制を立て直そうとしてるジャンへ追撃。

右手首から飛ばした無数の蜘蛛の糸のよつた鞭は、煙で前が見えていないジャンに直撃してしまつ。

ジャン

LHF E 18000 - 9000 = 9000

「よし、あと少し…」

『アレン、ストップ!』

「ええっ、あ、はい」

ライフが4桁を切ったジャンをさらに追撃をしようとするアレンを止めるティアナ。深追いはかえって自分のライフも削る可能性もあるし、あのライフだとジャンは一旦下がらないといけないからだ。

ちょうど、一人余る形になってしまったので、ティアナはアレンに  
ある行動に出でもらつた。

『CJの隙に先陣突破で斬り込んで！青組のCG、なのはさんのところに…』

「了解です！…」

s i d e o u t

ヴィヴィオ vs アインハルト FA vs FA

「ソニックシューター・アサルトシフト！ファイア！」

魔力弾をアインハルトへ向けて飛ばすヴィヴィオ。  
アレンに対して取ったジャンと同じ作戦。アインハルトが受け身に入つたところを回り込んで攻撃するつもりだ。

迫りくる魔力弾にアインハルトはゆるりと脱力し、構える。  
足を止め、少しの間目を閉じて集中する。  
そして目を開き、行動に出た。

「いつ！？」

アインハルトが取つた行動は避けでもなければ防御でもない。  
そう、それは受け流しだ。

その行動を見て、ヴィヴィオは驚きを隠せない。

これは反射でも吸収放射でもない。  
本当に受け止めて投げ返す技だ。

魔力弾の弾殻を壊さず、手のひらで受け止めているアインハルト。  
最終的にはすべての魔力弾を自分のものにしてしまった。  
そしてそのすべてを一つに集め、持ち主のヴィヴィオに押し返すと言わんばかりに投げ返す。

「霸王流・・・旋衝破!!」

ヴィヴィオ

LIFE30000 - 800 = 2200

(反射技!?)

考えている余裕はない。

技を受けてライフが削れらる中、ちらにアインハルトの追撃が来る。

空中で地面にたきつけられ大量に削られる。  
だがカウンターには成功した。

ヴィヴィオ

LIFE2200 - 1000 = 1200

アインハルト

LIFE3000 - 500 = 2500

(あのタイミングでのカウンター・・・ヴィヴィオさんはやつぱり  
すごい)

『アインハルト、そのままヴィヴィオの足止めお願い！今、アレンがなのはさんのところに向かつたから！』

「（アレンさんが？一人で大丈夫なんでしょうか）わかりました」

side out

リオ v s ハロナ G W v s WB

「炎龍！」

まとわりつく炎龍を物凄い音を立てながら粉碎するハロナとゴライアス。

思いつきり叩きつける要領で炎龍を殴り、拳は地面にめり込んだ。

「雷龍！」

立て続けに今度は雷龍を送りだす。

地面にめり込んだ右腕を裏拳を繰り出しながら引き抜き、雷龍をかき消す。この素早いゴーレム操作は誰にも真似はできなさそうだ。

気がつけば目の前にリオの姿がない。

後ろに気配を感じ、すぐさま次の行動へ移る。

ビキビキビキッ！－ゴオオッ！－

ゴライアスの上半身が徐々に動き始め、次の瞬間には回転をしてリ

オの接近と攻撃を許さず、懐に入っていたリオを殴り飛ばした。これぞ回転パンチ。目が回るだろ。

現に止まつた状態のゴライアスの肩でコロナは目を回していた。

「ハ、このパンチは乗つたままだと危ないかも～？」

『I also think so.』

(同感です)

リオ

LIFE2800 - 1100 = 1700

瓦礫の中から炎と雷の柱を立てながら出でてくるリオ。

一つの変換資質は伊達じやない。

さすがにやられっぱなしは生にも合わない。

『Her damage is less than the expectation.』

(予想よりもダメージが少ないです)

「リオ、防護もうまいんだ」

感想はさておき、次に備える。

体制を立て直したりオは早速構え、身体強化を使いながら突っ込んでくる。

「轟雷砲！！

操作をしているコロナ狙いかと思いきや、別の場所を狙つてくる。狙うは足と、その足場。どんな巨体でもバランスが崩れればただの

大きな人形と何ら変わりない。

見事足場の破壊に成功し、バランスを崩す『ゴライアス』。片膝をつき、右手で全身が転ばぬよう押さええる。だがリオはその右腕を両腕で思いつきり掴み

「よいっ しゃお——つ……！」

背負い投げを決めた。いや、ただの投げか？ どちらにしろ、あの巨体の『ゴライアス』を投げ飛ばしたのだ。物凄いかいり機といえるだらう。『ロナもその愛機の『ブランゼル』も驚いている。

『Your friend is surely powerfu...』  
(マスターのお友達は力持ちでいらっしゃいますねえ)

「ブランゼル、そんなんのんきな！」

side out

なのは vs アレン CG vs GW

現在アレンはなのはのもとへ移動中。  
魔力の足場を伝つて走つていくよりも、建物を飛んで移動した方が早いことに気がつく。

通信は常に怠らない。

左田で全員の大体の位置を把握できるが、声までは聞けないので通信を使い。

『ティアさん！ルーカちゃんが何かたぐらとあります！』

『あの子の悪だくみは洒落にならないのよね。アレン！聞いてたわよね！向こうの作戦の要は間違いなくのはさんよー全力でぶち当つて止めなさいー！』

「わかつてますってー黒と白の道化、最後まで踊りさせてもうこますよーー！」

目に見えてくるのは栗毛のサイドポニーに白いバリアジャケット。杖を持ち、射砲支援を行っているセンターガード。

『Hース・オブ・Hース』高町なのはだ。

「なのほさん、手合わせを願いしますーー！」

「喜んで引き受けましょー！」

## 第24話 陸戦エキシビジョン 02（後書き）

楚良「あとがわ」「——」

アレン「おお、すっごく久しぶりなんじや？」

楚良「いやあ、すっかり忘れてた。とつあえずさびしいから書いとこうかなって思つて。あ、質問コーナーは健在なのでお便りくださいね？」

アレン「えっと、現在陸戦エキシビジョン中ですね。次回、僕はなのはさんとの対戦ですか？」

楚良「うむ。アレンが『覚えた』と言つていたものが発揮されるぞよ？」

アレン「わいにえば、4巻は買えたんですけどもう一〇月なんですよ？」

楚良「大丈夫、すでに購入済みだ。ちなみに今日は俺の誕生日」

アレン「あー、おめでとうございます（棒読み）

楚良「みたらしの量減らそうかな~」

アレン「みわあー。」めんせご「めんなさいー。」

楚良「まあ、今回まじめに見て次回予告ー。」

アレン「陸戦エキシビジョンも急展開ー。アレンがまさかあの技をー。」

?ジャンがまさかのアインハルトと対決!?何が起こるかわからな  
い!まだまだ続くぞエキシビジョン!」

楚良「誤字脱字、感想あればお願ひしますね。あ、それと質問コー  
ナーにも」

アレン「では、また次回」

楚良＆アレン「「まつたね～」」

## 第25話 陸戦エキシビジョン 03（前書き）

今回は予定を変更してアレン・スノウのはだけ。  
AINHART・ジヤンはまた今度書きたいと思います。

## 第25話 陸戦エキシビジョン 03

なのは vs アレン CG vs GW

「青組CG高町なのは、各員に報告。間もなく赤組GWアレン君と接觸。射砲支援が止まります。ティアナとキャロの支援攻撃に要注意！」

『了解！』

「アクセルシューター！ 弾幕集中」

なのはへ近づいて行くアレン。  
左目が反応し、嫌な情報を与えた。

『砲撃手』『集束』『魔力【多大】』

これでもかと思つぐらい砲撃を使う人間には必要なものがんこ盛り。

なのはのバカ魔力はまだまだ健在のようだ。

そんななのはに対して、アレンは憚してない。  
むしろどう戦えば勝てるかうずうずしていた。

『新技行つてみようか！』

左手に魔力を集めた。

そして指輪に似た王冠が大量にエッジの先まで現れる。

そこへ、なのはが弾幕用の誘導弾を放つ。

だがアレンはそんなの気にせず、左手を思いつきり振りかぶった。

「クラウン ハッジ！…」

それはまさしく鞭。

なのはの弾幕はすべてアレンの攻撃で相殺された。

「あら？ 結構な量撃つたのに一回で相殺？」

「はあっ…！」

大量の弾幕をすべて相殺し、なのはとの距離を一気に詰めた。インファイトを決め込み、猛攻を仕掛けるが、すぐて防がれる。まるですべて読まれているようだ。

(すつごい。こっちの手の内を読んで攻撃してきてる。左目の呪いつて言ってたけど、頼り過ぎてない。コウさんが教えるだけはある)

防御と解析。

こう言うときのなのはは楽しそうだ。  
だが防戦一方で、距離を取らなければ反撃は望めないだろう。

「（読まれるな…・でも） 左手ばかりに気を取りられすぎですよ。」

「つー？」

基本、アレンは左手でのラッシュを使う。  
右を使うことなんてあまりない。

そして特徴的な左手に目が行くため、右はカウンターとして、ともに入りやすくなっている。

アレンの言葉通り、なのはは左手しか見えてなかつた。左手のエッジというトリックキーな戦い方には対処が難しい。当然、目立つものに目がいく。人としては普通の行動だ。

バキイツ！

なのはめがけて渾身の右ストレート。だが手ごたえがない。そして何か違う感触。そう、例えるなら壁を殴った感じだ。

「！？」

右手の拳に巻きつくるは魔力の鎖。しかも一本や二本じゃない。4本で器用に絡みついてくる。

『バインディングシールド』

なのはの接近戦闘で使う必勝戦法。

捕まえた瞬間距離をとり、砲撃でたたき落とす形が出来てしまつた。

「ぐつ、このー！」

「エクセリオン」「

砲撃の体制にはいるなのは。

防御。している暇はない、しても防御ごと持て行かれる。回避。捕まつているから動けない。

逃げ場は完璧につぶされた。

後は砲撃が来るのを待つことしか許されない。

「（どうする。）のままじゃ……あ、そういえば。まだ、方法はある……）サンダー」

逃げることと防御ができない。  
なら残る選択肢はただ一つ。  
そ、攻撃だ。

運よく相殺できれば、バインドも外れる。  
相殺できなくとも、ダメージ軽減もできるはずだ。

アレンは左手に魔力をため、とあるものに変換させる。  
バチバチと迸る電気は薄い水色。はやてが氷結魔法を使うときと同じ要領で、アレンは魔力を電気に変換させていた。

「バスター——！——！」

「レイジ——！——！」

放たれた砲撃に対し、アレンが使ったのは『サンダー・レイジ』  
元はフェイトが小学生時代から使い、さらに受け継がれてエリオと  
変換資質で『電気』を持った2人が使っていた技。

アレンが前日に、覚えた、と言っていたのはこれのことだろう。

真正面から、右手をバインドされている状態で左手を振りかぶる。  
バチバチとアレン本人でも想像以上の雷を纏った左手で、ほぼ力任せの半分以上投げやりで地面へ向けて砲撃を”そらした”

「え・・・？」

それを見ていた全員が驚いた。

あのなのはの砲撃を、バインドをかけられた状態でそらしたのだ。  
しかもサンダーレイジを使つたことから、同チームのフェイト、敵  
チームのエリオはみんな以上に驚いている。

「解けた！」

バインドが解けたのを確認し、横の瓦礫に向けてクラウンベルトを伸ばした。

次の攻撃の狙いを定めさせないよう、止まつては動きを繰り返す。  
徐々に距離を縮め、一気に跳躍。また左手に魔力を溜め始める。

「エッジ・エンド」

「ストライク・スターズ！！」

ドゴオオオオンツツ！！！！

当るか当らないかギリギリの距離で、零距離砲撃。

アレンは桜色の光にのまれ、地面へ叩きつけられた。

アレン

LIFE2800 - 2740 = 60

ライフ100未満なため、治癒が行われるまで活動不可

ライフ2800を一撃でほとんど吹き飛ばすのは。

確実に決まつたと思ったが、意外にも粘られてしまつたようだ。

（最初のはうまく調整できなかつた。でも運よくそらせたけど、も

しそらせなかつたら・・・それに、急いで防御に回つて、受け流す  
どころか飲み込まれた。あれが本物の砲撃か・・・次は勝てるかな  
?)

また新しい目標ができた。

魔力を他のものへの変換の調整。

今よりもちゃんとした強靭な防御。

そして砲撃用の対策と、なのはへのリベンジ。

「まさかエリオのサンダーレイジをコピーするなんて。びっくりだ  
なあ」

「なのはさん!」

「?」

「お手合せ、ありがとついでございますーーー!」

大の字で倒れるアレンは、右腕の拳をなのはに向けて礼を言つ。  
また新しい目標を作らせてくれて、相手をしてくれて、経緯を評し  
て今の状態で出来るお礼の仕方を取つたのだ。

「うん。またやろうね」

返事を返したのははまた射砲支援に戻る。

それを見届けたアレンは召喚魔法でキヤロの元へ呼び寄せられた。

## 第25話 陸戦Hキシビジョン 03（後書き）

楚良「あとがわ」「一ナーハー」

アレン「あれ？なんか短くないですか？」

楚良「うん、まあ、うん。アレンとののは戦闘かいてたらそれだけ2000文字以上行ったからいいかなって思つて」

アレン「僕にあんな予告までさせとこて、裏切ったんですね？」

楚良「『めんなさ』……」

アレン「ま、みたらし追加で手を打ちました。ただし僕は、ですけどね」

楚良「いやせ、最近忙しいんだよ。プリント30枚やつたり、双乳絵描いたり出でる。あ、そういうば、インターHジルに入るとようやくアレンが（容姿的な意味で）オリキャララつぽくなるぞ」

アレン「と、言こますと…」

楚良「つむ、髪型を少し変えよつかと思つてな。アホ毛とかつけたりして」

アレン「まあ、とつあえずその事は後にしで、次回予告の願いします」

楚良「ひどーーーまあ、こいや。」ほん。白熱するHキシビジョンも

後半戦！数の均衡が崩れ、20n1に突入！まさかの異色コンビが誕生するかも！？（あくまで”かも”です）そしてついにスターライトブレイカーが放たれる・・・！」

アレン「現在、あとがきコーナーではお便りを募集しています。まあ、質問コーナーだけなんですが。コーナー案も受け付けていますので、遠慮せずにお願ひしますね」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願ひします！」

アレン「では、また次回」

楚良&アレン「「まつたね～」」

## 第26話 陸戦エキシビジョン 04（前書き）

何回も予定変更すいません。

まあ、他のところを書いてないだけで、そんな予定変更ってわけじゃないんですけど。

とりあえず毎回アレン君のところしか書いてないような気が・・・。

今回もアレン君のパートだけですし。

どうしたらいいのかな・・・。

## 第26話 陸戦エキシビジョン 04

リオ&ルー・テシア GW&FB

∨S

キャロ&アレン&アインハルト FB&GW&FA

「防護バリアで守るから、2人ともそこでじっとしてね！」

「ですが・・・」

「僕はもう戦えますよ」

現在アレンとアインハルトが治療中。

アインハルトはヴィヴィオとの1on1の時、ジャンに乱入されてライフを大ア場に削られてしまった。  
まさか前中衛の2人がそろって回復中だなんて、少し情けないと反省中。

さらにこの状況で目の前には敵チームメンバーが2人。  
戦えな2人がいる状態では実質キャロ一人で戦うことになっていた。

アレン 治療中

LIFE 60+1940=2000

アインハルト 治療中

LIFE 90+500=590

(なら、時間稼ぎの手伝い。それと、出来るだけアインハルトから離れるの)

(了解です!)

アレンのライフはもう十分戦えるまでに回復した。

それならばと、キャロは念話で聞かれないように頼む。

時間稼ぎ、ということは何か秘策があるのでどう。

そしてアインハルトをこの場に残して敵を遠のかせる。

時間稼ぎで何かをした後、残ったアインハルトが相手に斬り込むのだろうか。どちらにせよ、出来るだけライフは温存してもらいたい。

「黑白道化！」

そうとなつたら自分もできるだけ防御に徹する。

出していなかつたマントを展開させ、仮面を付けた。

この状態ではスコープが出てきてはいないが、仮面の目の部分にレンズのようになつていて、未だに発動である。

それに少し驚きながら、アレンは瓦礫にクラウンベルトを伸ばして先に移動を始めたキャロを追いかけた。

「クラウン・ベルトッ！…」

「アルケミック・チョーンツ！…」

場所を移動しながらの牽制攻撃。

別に当てなくともいいから2人をあまり離れさせないで、がキャロの頼みだ。マント全体から放たれる蜘蛛の糸のような鞭は無造作にリオとルーテシアを狙う。

さうにキヤロ自身も召喚魔法で無機物操作を行う。

捕縛用の魔法『アルケミック・チエーン』

アレンと同じように大量の鎖は大まかな動きで迫った。

「当んじゃない、当んないつ

「なら、無理やりにでも当てます！－クラウン

ルーテシアのダガーやらリオの炎龍と雷龍やらをかわしまくり、先ほどのはとのバトルのときについた技を構えた。爪についた王冠は徐々に数を増やし、やがては爪飛び出す。だがそれでも王冠は爪の軌道に沿ってさらに増え続ける。そしてアレンは鞭を振るように左手を振った。

「 ハッジッ！－！」

上空真上からの巨大鞭の一撃。

その間をやすやすとかわされるが、地面は大変なことに。文字通り、上空から放ったため地面には大きな爪痕が。まるで巨大な獸がなにかしたようだ。

「まだまだあつ！－！」

さらに空中で体制を立て直しながら無数のクラウンベルトを放つ。それと同じタイミングで、キヤロもアルケミックチエーンを使う。

「うひふふ～ 当らないよんつ

「そりや、そうですよ。」れらは・・・

「当てるためじゃなくて、撃墜のための布石だもんね」

「ナイスです！キャロさん、アレン君！」

自信満々のキャロに、口元が笑ってるアレン。

そしてその言葉通り、むじう側声が聞こえてきた。

その声の主はコロナ。

さらにはコロナが乗つていてるゴライアスは腕を構えている。その腕はやがてはものすごい音を立てながら回転を始めた。

「ゴライアス、ページブラストッ！…ロケット  
ツツー！」

「オオツー…・・・ドゴオオオンツツー！」

回転しながらゴライアスの巨大な岩の拳が飛んできた。しかも考えられないスピードで。

「「へ？」「」

それを見た2人はさも当然のように不抜けた声を出す。  
ほどなくして巨大岩石ロケットパンチ（アレン命名）は2人に直撃した。

「「うそ…………？」「」

ルーテシア

LIFE 2200=life over

リオ

LIFE 1700 = life over

「擊墜成功！」

「勝利のVツ！！」

「ふう・・・」

2人擊墜成功。

これは相手チームに打撃を与えるはずだが、おかげで3人とも油断している。だがこの油断が戦場では命取りなのだ。

・・・キイイインツ！！

「ウニ?」

1人即座に近づく物体に気付いたアレンはその場を離れる。  
ほどなくして・・・

カコーンツ！

「へう――つ！？」

ビキニッ！

「！」

キヤ  
口

コロナ

捕縛されたことによりバインドが解除、または破壊されるまで行動不能

一発の魔力弾の一発がキャロの頭をとらえてキャロは撃墜。  
コロナは”桜色”の鎖により捕縛されて身動きが取れない。  
それを行つたのは

「ありやー？アレン君には気づかれちゃつたか～」

「な、なのはさん、いつの間にー？」

「勝つたと持つた時が一番危ない時！現場での鉄則だよ～！」

桜色の魔力光はなのはだ。  
もちろんアレンにも撃つたのだがやはり先に感付かれて回避された。

「プラスターーーッ！」

愛機『レイジングハート』を構えたのは。  
魔法陣を開き、そこに魔力が集まつていく。  
そう、彼女の得意とする集束魔法だ。

『赤組生存者一同ーなのはさんを中心に広域砲を撃ちこみますー』

やばいと悟ったアレンはアインハルトの元まで離脱中。  
そこにティアナの通信が入つた。

合図で離脱したが、とのことだがそんなにやばいのだらうか。アレンはなのはの集束砲を見たことがないので少し疑問。だが本気でやばいとティアナは言つて、ひことに従つた。

マントを消していたアレンに容赦なく放たれた集束砲。

力一卽

無防備だた状態のアレンに迫るそれはまさしく恐怖。だがアレンは立ち止り、左手を3度も振った。

「さりきは1枚でダメだつたけど、3枚でどうだあー！」

> i33407  
— 2054 <

その瞬間、陸戦上全体が光に包まれた。

## 第26話 陸戦エキシビジョン 04（後書き）

楚良「あとがわ」「一ナーハー」

アレン「はい、今日は陸戦エキシビジョン第4回でしたね」

楚良「なんやかんやで他の人のパートが少ないのはお許しください」  
アレン「いやー、なんか僕すっごく頑張つてないですか？クラウンエッジ使つたり、クラウンベルト使つたりで」

楚良「まあ、飛行魔法ない状態だとクラウンベルトがすげ活躍するからなあ。だがしかあし！覚えたいと言つなら主人公補正で覚えさせようじやないか！」

アレン「いや、別に良いですから」

楚良「あ、そう？え？いいの？空飛べるんだよ？引っ張られる感じじゃなくて、飛ぶ感じだよ？」

アレン「どうぞの異世界に行くんじゃあるまじ、要りませんよそんなの」

楚良「方舟」

アレン「え？ちみ、マジですか？」

楚良「YESS インターミナルの修行編でどうかに行つてもいいます！」

アレン「な、ならやりますよー！覚えたいですよー！頼みますよー。？」

楚良「ま、コウセイたちのを見て学ぶんだな」

アレン「ちくしょーつ……」

楚良「さあ、次回予告だー！」

アレン「え、あ、えっと、」ほん！次回で陸戦エキシビジョンは終了！最後に残るのは誰だ！？スター・ライトブレイカーの光から出てきたのは・・・！？」

楚良「えー、現在あとがきコーナーではお便りを募集しています

アレン「質問コーナーだけですが待っています。コーナー案もあればお願ひしますね」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願ひします」

アレン「では、また次回」

楚良＆アレン「まつたね～」

## 第27話 陸戦エキシビジョン 05（前書き）

今回はあとがき「一ernerでアンケートがあります。  
読者の皆さん、ご協力ください。

## 第27話 陸戦エキシビジョン 05

スターライトブレイカー 着弾後。

フェイト

LIFE 0

S LB着弾直前にエリオの攻撃により撃墜

エリオ

LIFE life over

S LB・PS直撃・撃墜

コロナ

LIFE 30

S LB・MRを『ライアスで防御するも防ぎきれず戦闘不能

「いや〜」

『it is safe master?』

(大丈夫ですか、マスター?)

「な、なんとかね・・・」

なのは

LIFE life over

S LB・PSを相殺しきれず撃墜

ティアナ

L  
I  
F  
E  
  
2  
3  
9  
0  
-  
2  
2  
8  
0  
=>  
1  
1  
0

SLB-MRをなんとか相殺

「な・・・なんとか生き残つた・・・」

スター ライトブレイカー

『ファントムストライク』 『マルチレイド』

## 激突した2つの集束砲。

陸戦場全体が光に包まれるほどの威力

「残つてるのは、私とあと・・・4つ！？しかも、2つ近づいてきてる　つてこの速度は片方はスバル！？」

「じゃなくてヴィヴィオです！」

「俺はスルーですか」

ヴィヴィオ

LIFE 1800

スバルに庇つてもらいほぼ無傷

ジャン

LIFE 1600

回復中にSLB-PSの余波を受けるが生還

「ウソオ！？なんで2人も無傷！？」

スバル

LIFE 60

SLB-PSからヴィヴィオを庇い行動不能

ノーヴェ

LIFE life over

SLB着弾後ヴィヴィオの攻撃により撃墜

「みたかレスキュー魂！」

「あー、もう、ちくしょう！..」

向こう側で動けない状況のナカジマ姉妹。

2対1で勝てるかどうか不安なティアナに、ヴィヴィオとジャンが容赦なく迫る。2人も残るなんて予想外だ。

クロスミラージュで応戦するが巧みにかわされる。だが、残り2人はどっちのチームなのだろうか。

「「行きます！」」

「来なくていいから！」

あと一步。あと一瞬で攻撃が決まるところだった。  
そう、邪魔が入らなければ、だが。

「霸王」「クラウン」「

「「？」」

「空破弾（仮）！」「ヒッジー！」

アインハルトの攻撃がヴィヴィオを。  
アレンの攻撃がジャンを直撃した。

最後に残っていた2人はこの2人だつたのだ。

ヴィヴィオ

LIFE 1800 - 700 = 1100

ジャン

LIFE 1600 - 900 = 700

アインハルト

LIFE 1350

回復中にSLB-MRの余波を受けるが生還

アレン

LIFE 1100

三重クロス・グレイヴガードと黑白道化のマントでなんとか防御成功

「けほつ・・・3枚目にはひびが入ったときは終わったと思った・・・」

「ティアナさんはやらせません。それと、アレンさん大丈夫ですか？」

「な、なんとかね」

「2人とも・・・」

「「はい？」」

ティアナを守ることに成功した王様コンビ。  
アレンのライフがちょっと少なめだが大丈夫そうだ。  
だが後ろにいるティアナに声をかけられる。

「「あん、さっきのでもうやられたりやつた」」

「「ええっ？」」

ティアナ

LIFE 110 - 110 = 0

ヴィヴィオの単発ソニックショーターで撃墜

「・・・よし、僕は何も見てないぞ」

「ええ！？ア、アレンさん！？」

「そんなことよつ 「雷衝一幻！..」 もうと」

話している途中、むこう側からジヤンの攻撃が放たれる。

アレンは最初から来るとわかつていたが、AINHARDTは違う。なのでとつとアレンはAINHARDTを持ちあげて回避してしまつた。

すぐには気がつかなかつたが、少ししてようやくわかつた。アレンがやつたのは俗に言つお姫様だつ。」

左手の爪でAINHARDTを傷つけないように右手で脚を持ち、左手の手のひらで背中を支えている。

それに気がついたAINHARDTは恥ずかしくなつた。

「ア、アレンさん！？」

「あ、ごめん。攻撃が当たりそつたからとつとで。すぐ引りますね」

「あ・・・」

「？ どうかした？」

「い、いえ、なんでもありません」

下ろすと同時にAINHARDTは少し落ち込む。なんでも落ち込むのかはアレンにはわからない。

しかし、今そんなことを考へる暇はなかつた。

体制を立て直した相手コンビが作戦会議をしてくる。  
そんな暇をあげるのはアレンとしてもアインハルトとしてもいけない。そのためアレンはすでに会話モードから戦闘モードだ。

「アインハルト、ジャンをお願い。ちょっとダイヴィオを懲らしめないといけないから」

「あの、アレンさん？ ものすこに笑顔のはどりですか・・・？」

「アインハルト。約束は守らいないとね？」

「え、あ、はい」

「じゃ、お先！」

side out

アインハルト vs ジャン FA vs FA

「リベンジさせていただきます」

「さつきは不意打ちだつたからな。今度は正々堂々と真正面から叩つ切るー！」

魔力の道に沿い、走りながらジャンに迫る。

黒い刀型デバイス『六幻』を黒光りさせ、ジャンはそれに備えた。

最初、ヴィヴィオと戦っていたアインハルトのライフをジャンは不意打ちで大量に削り、無理やり後退させてヴィヴィオを助けていた。その後にティアナの『クロスファイア・フルバースト』をまともに喰らい、アインハルト同様に後退する羽目になった。

「六幻・災厄将来『雷衝』」

「

六幻を握る力が強くなる。  
アインハルトがギリギリまで近づいてくるのを待つ。

「一幻！！」

「

ヒュツ・・・バチャイツ！！

あえてアインハルト自身を切らず、すれすれのところを斬った。  
そしてその斬ったところから雷が放たれ、アインハルトの腹を直撃する。

アインハルト

LIFE 1350 - 1200 = 150

「ぐう・・・！霸王・・・断空」

「ひ、左！？」

「 拳……」

「 オッ！！

攻撃を耐えきり、無理やり左手で拳を突き出す。  
それはみごとに無防備だったジャンの腹部をとらえ、放たれた雷ご  
と殴り飛ばした。

ジャン

LIFE 700-1000=life over

「 ハア、ハア……か、勝つた……」

## 第27話 陸戦エキシビジョン 05（後書き）

楚良「あとがわ」「——」

アレン「あれ？ 今回でエキシビジョンを終わらせる予定じゃなかつたんですか？」

楚良「まあ、良いじゃないか。次回はアレンが活躍（？）するんだからや」

アレン「なんでそんな疑問形なんですか」

楚良「まあまあ、そんなことせどりでもここじゃないか。そんなことよりアンケートがあるんだぜ……」

アレン「いや、イヤな予感しかしませんが……」

楚良「大丈夫だー早速アンケートの内容を発表してくれー！」

アレン「あの、僕じやなくてあなたがやるべきじや……」

楚良「……うおほんつーえー、アンケートの内容は次の通りです」

アンケート

インター＝ゲルの修行で方舟を使つてビリの世界に行くが。

1・無難に過去。なのはGOD的な？といあえずA-S時代

2・いやいや、過去なら古代ベルカ時代だろー！

3・斜め上を行つてリリなのじゃない世界でログレー、もしくは他

4・全部なしで普通にミッションで修行

楚良「こんな感じですかね」

アレン「なーんか、全部イヤな予感しかしませんね。いや、「冗談抜きで」

楚良「期限は・・・インター＝ミドルの修行編に入るまでです。まあ、期限が迫れば報告しますので今のところ細かい日付はありません」

アレン「では、続いて次回予告ですか？」

楚良「次回でようやくエキシビジョンも終了！アレン、ヴィヴィオオーディオが勝つか！ヴィヴィオが勝てばアインハルトとバトル！？」

アレン「今日はお便り募集とかしないんですか？」

楚良「まあ、別にいいんじゃない・・・？今までやつてて一通も来てないし」

アレン「あ、落ち込んでる」

楚良「とつあえず、誤字脱字、感想あればお願ひします！あ、後アンケートも

アレン「では、また次回」

楚良&アレン「「またね～」」

アレン vs ヴィヴィオ GW vs FA

AINHARDTがJYANを撃墜した。未だに戦闘を開始していない2人。

それはどうしてだろうか。理由はこれだ。

「ア、アレン君？ どうしてそんなに黒いオーラを出してるのかな……？」

「どうして？ あはは、ヴィヴィオは冗談がきついな。僕との約束を破つておいてそれはないと思つよ」

「ギクリ」

そう、アレンが黒いオーラを出しながら言葉でヴィヴィオを責めていいのだ。

初日にポロッピヴィオが言つてしまつたのをAINHARDTから聞いていた。約束をしたのにも関わらず、ヴィヴィオはその約束を破つた。

アレン本人、今ではあまり気にしていないのだが、さすがに何も仕返ししないで終わるのはつまらない。

たまにはそう言つのもいいんじゃないか（普通ならダメだが）

そう思ったアレンは、ヴィヴィオと当つて倒すこととした。

「あ、AINHARDTの方は終わったみたい。よし、僕も早々に終わ

うせよつかな

「ま、負けないよー。」

「素直に負けてくれると嬉しいんだけどなあ。ま、いつか」

「ーー?」

突然アレンが消えた。  
いや、姿が見えなくなつた。

田にもとまらぬスピード。またもやヒリオとフフュイトが使う『ソニック・ムーヴ』をコピーしたのだ。

魔力による加速、急停止がまだできないのでクラウンベルトで無理やり止めるつもりらしい。どちらにせよ姿が見えなければ攻撃は受けられなかつた。

「ーー?」

ブウンッ!!

不意打ち、ではないがヴィヴィオの後ろからアレンが爪を振りかぶる。

だがそれをヴィヴィオは頭を下げて避けたのだ。

(避けられたー!?)

「一閃必中

「ーー? (防御一間に合わないー)」

「アクセルスマッシュ！」

「ゴウウッ！」

アレンの顎にヴィヴィオのアッパーが直撃した。

アレン

LIFE 1100 - 1000 = 100

空中を待っているアレンの意識は朦朧としてきた。  
アッパーをもろに食らいすぎたせいだろう。  
かろうじて見えるヴィヴィオの姿はぼやけて見える。  
非殺傷設定でも痛みはひどかった。

「あ・・・（やばい、こりゃ、まずったな・・・でも、1人勝ちはさせないよ）」

左手の爪は解除されていない。

まだライフも、かすかだが残っている。

相討ちに持っていく気でアレンは意識だけで左手を動かした。

「え、嘘つー？」

「Hツジ・・・Hン、ド・・・ー。」

落ちてくるちょうどいいタイミングで左手を構える。

そして無理やり左手を振り抜き、ヴィヴィオを攻撃する。

ヴィヴィオも、まさか空中で反撃をしてくるなんて思つてもいなか

つた。

避ける前に驚きが出て、アレンの攻撃を避けられずに直撃する。

ヴィヴィオ

LIFE 1100 - 1500 = life over

ドサツ・・・

アレンが落ちると、ヴィヴィオが倒れるタイミングは同じ。  
一つの音は重なって一つとなつた。

『はい、試合終了ー！』

メガーヌの声が通信で聞こえる。

ああ、勝ったのかと、アレンは一安心。  
そのせいで気を失ったのは言うまでもないだろう。

### 結果

青組	行動不能1名	撃墜6名
赤組	行動不能1名	撃墜5名（ラストはアインハルト）

試合時間23分13秒

赤組に生存者がいるため赤組の勝利

side out

「え、一回戦・・・？」

おやつ休憩中に気がついたアレンの第一声。  
AINNHALTとほぼ同じ様に、疑問符を浮かべながらキヨトンとした顔をしている。

「あ、あれ? 戻ってる」

よつやく体の異変にも気がついた。

大人モードがついに限界を迎えたか解除されている。  
一瞬やばいんじゃないか、と思うがそんなこともなく。

別に何か起きるとか、そう言つのは全く感じられもしなかった。

周りの大人メンバー。特にユウは一安心。

無事子供の姿に戻れたということで胸をなでおろしている。

ちなみに服はティムキャンピーの内部に保管しておいたスペアを引張り出して着ていた。2着しかなかつたが、ブカブカな服を着たり、何も着ないよりはまし。

運動用の服、と言つのがいろんな意味で功を奏したよつだ。

「ソニックムーヴとサンダーレイジをコピーするなんて、驚いたよ

「む、無我夢中で。やつたら出来た、みたいな感じです」

エリオと一回戦目のプチ反省会。

「コピーされた本人のエリオからすれば違う意味で完敗だった。

アレン本人も少し驚いている。

雷の操作の難しさ。ソニックムーヴの急停止などを簡単にやってい

たエリオとフェイドの実力が改めて本物だと確認するほどだ。

「一回戦ではフェイドさんに少しレクチャーしてもうつたら、雷の使い方」

「あ、えっと、その」

「私がどうかしたの？」

アレンが少し遠慮気味に断るうとしたタイミングで、フェイドが話に入ってくる。噂をすればなんとやらはまさにこのこと。何でもないです、と言おうとしたアレンよりも先に、エリオがフェイドに話を持ちかけてしまつ。これにより一回戦日の序盤はフェイドとコンビで行動することになってしまった。

まあ、中盤から後半は別行動でいいらしいが、相手チームが同じようコンビを出してくるかだけが不安だった。

「はあ・・・ティム、頑張ろつか」

大きくため息をつくアレンと、うなずいているティムキャンペー。いろいろな意味でティムキャンペーだけがアレンの味方だった。

アレン「あとがわ」「一ナーハー」

アレン「こやあ、やつと終わつましたねエキシビジョン」

楚良「うむ」

アレン「どうしたんですか？」

楚良「いや、最近中々小説が書けなくてさ。今回も一週間ぐらい前から書き始めてたのに今日更新だぜ？他の作品も中々書けなくて、ため息しか出ないんだよ」

アレン「……な、なんていうか、あれですね。スランプってやつですね」

楚良「たぶんな」

アレン「まあ、良いじゃないですか。一週間に一回は更新出来るんですけど」

楚良「前はほぼ毎日投稿だつただけどなあ……」

アレン「う……」んな暗に空氣は置いておいて、次回予告ですー。」

楚良「頼むわ」

アレン「ええ……あー、いほん。

もう少しで合宿終了。

ルーテシアの加入でインター＝ミドル参加を決めるアレンとアインハルト。

だけどアインハルトには『デバイスがない』  
インター＝ミドルの参加条件は『クラス3以上の『デバイスの所持』。  
デバイスのないアインハルトは果たして・・・』

楚良「今日は見やすいうように書き方を変えてみました。どうでしょうか？」

アレン「あとがき」「一ナーハーへのお便り待つてます!」といつても質問コーナーだけですが、それとアンケートもまだまだ募集中ですよ!」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願ひします」

アレン「あ、なんかちょっと回復しましたね」

楚良「あ、うん、たぶん。ではまた次回」

楚良&アレン「「まつたね~」」

## 第29話 決意する王

「う、うおお……う、腕があ、上がんねえ……」

「お、起きれない……」

命宿 | 田田夜。

陸戦エキシビジョン三連戦がよつやく終了した。

子供チームは現在身動きとれず。

全身の痛みと戦いながらつなっていた。

「う、動けません……」

「ほ、ほんと……」

動けないでいるのはヴィヴィオ、アインハルト、リオ、ロロナ、ジヤンの5人。ルーテシアとアレンだけは普通にしていた。  
ふるふる震えながらも動こうとするみんなをルーテシアは少し笑顔で見つめる。

アレンも同じように少し笑顔で見守っていた。

そしてやはりティムキャンペーとクリスはにらみ合ひの喧嘩中。  
この2機のどこに喧嘩する理由があるのかは不明だ。

「限界超えて張り切る過ちあるからだよ」

「なんでルーちゃんとアレン君は平氣なのー?」

「そこはそれ、年長者なりのペース配分がね」

「僕はこいつの慣れてるからね。それと、やっぱりペース配分かな」

コロナの疑問はばつさりと切られた。

動ける2人は同じ回答。

アレンはちょっと違うがまあ、同じことうえてもいいだろ。

大分動けるよくなつたか、みんなワイルドと横になりながら話しだす。

それを見て、アレンもルーテシアと話をしていた。

「そう言えばアインハルトはこいつの試合つて始めてだつよね。どうだつた?」

ふと何かを思ったルーテシアがアインハルトに話しかける。  
起き上がりアインハルトは、勉強になつた、と答えた。

それを聞いたルーテシアはまた笑顔。

スポーツとしての魔法戦競技の楽しさをわかつてもらえて何よりだつた。

「今日の試合が良かつたんなら、この先こんなのはどうかな~って思つてね。ああ、これはアレンにも言えることだよ

「はい?」

「デイメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエイション。  
通称『DASS』公式魔法戦競技会」

映し出されたモニターには競技場の映像が。

大きなリングにたくさんの観客。

前までのビデオだろうか。

たくさんの選手たちも見える。

参加可能年齢は10歳から19歳まで。

個人計測のライフポイントを使用した、より実践に近い試合。

全管理世界から集まってきた魔道師たちと競い合う魔法戦競技。

「インターミドル・チャンピオンシップ」

ドクンッ

その時だけ、なんとか心臓が確かに高鳴った。  
しかもアレンとアインハルト、2人とも同時に感じた。

今日みたいなのがまたできる。

今度はチーム戦じゃなく個人戦の1対1。  
自分の実力を確かめるには最高の場所だ。

他のメンバー5人も出る予定らしい。

ルーテシア自身も、今年は出る!と豪語していた。

それを聞いてお互いに顔を見合わせる2人。

「「あつ」」

なんとかすぐに顔をそむけてしまう。

今の間だけ、2人は以心伝心と言わんばかりに同じことを考えていた。

(（なんだか目を合わせるのがすこくはずかしい……））

たぶんお互いがお互いのことを考えていたのだな。そこからつい顔を見ようと見て田があつてしまい、顔をそむけた、と言つたところだ。考へることもほぼ同じでまさしく以心伝心。

「みんなー、栄養補給の甘いドリンクだよ~」

ナイスタイミングなのかわからないが、なのはとメガーヌがドリンクの入ったコップをトレイに乗せて入ってきた。

みんながそれを受け取り終ると、メガーヌがインター・ミドルの映像に気がつく。

「あら懐かしい。インター・ミドルの映像?」

「モー。アレンとアインハルトに出場の勧誘してたの」

学生時代に出場したことのあるメガーヌ。

懐かしき思い出に浸り始めてしまつた。

まあ、ちゃんと周りの様子を見てやめてくれたので良しとする。

(すい)いな、みんな。くたくたで疲れているのに、もう次のことを話してゐるよ。まだまだ先なのに、本当にすごいこや)

アレンとアインハルト以外のみんなはもう先の話を始めていた。どういう相手と当るか。うまく戦えるだろうか。その他にも色々、たくさん。

(でも、僕も似たようなもんかな)

「？」

チラッと、アインハルトに目を向ける。

その視線に気づいたか、アインハルトはこっちを向いてくれた。それに対してアレンは笑顔で返すも、アインハルトは顔をそむけてしまい、一瞬嫌われたと思つてしまつ。

(（戦いたいって気持ちを止められない！…）)

またもや以心伝心。

アレンとアインハルトは同じ思いを抱いていた。  
だが、これは誰にもわからない。

まあ、本人たちがわかつていたら物凄い勢いで顔が赤くなるだろ？

「どう、2人とも、出たくなってきた？」

「あ、その・・・」

「出たいです！」

「つ・・・」

「アインハルト。僕は君に、公式試合のステージの上でリベンジを果たしたい！」

今思つたことを率直に述べた。

最初に出会つてからの路上バトルから一度もアインハルトと戦つてない。

だからこそ、リベンジを兼ねてもう一度戦いたいと思つた。  
ちゃんとみんなが見守る中、しっかりと決着をつけたかった。

「わ、私も、公式試合のステージでAINHARDさんと戦いたいです！」

ヴィヴィオもアレンの勢いに乗ってきた。

どちらが先に当るかで変わってくるが、それでもいい。戦いたい、どれだけは譲れないから。

「・・・ありがとうございます。アレンさん、ヴィヴィオさん。インター・ミドル、私も挑戦させていただきたいと思います」

「はーー！」

うん、とうなずくアレンと返事をする、ヴィヴィオ。AINHARDTに思いは通じたようで何よりだった。

『やう言えど、参加資格で『CLASS3以上のデバイスの所持と装備』は、どうじょうか』

『・・・』

全員がなのはの言葉に黙り込んでしまう。

いくら年齢制限をクリアしたとしても、参加資格を守らなければ出場することはできないのだから。

「デバイス、持っていないです・・・」

「あー。じゃあ、この機会に作りなきゃ

簡単に作らなきゃ、と言つがAINHARDTの場合は別だった。

AINHARDTはアレン同様術式は古代ベルカ式。

古代ベルカのデバイスは、近代ベルカのデバイスよりも作るのが難しいと言われているのだ。

だが、そんな作るのが難しい古代ベルカのデバイス。ティム・キャンピーの製作者をアレンは知っていた。と言つよりも、ハ神家に泊つた時にユウから教えてもらったのだ。

「なら、ハ神家のみなさんに頼みましょうか?」

「あれ? アレン君、はやてちゃん達と知り合いで?」

「えつと、少し前に母さんと一緒にお邪魔しまして」

「そうなんだ」

「あ、あの、ハ神家のみなさんは・・・」

「ああ。えつと、なんていうか、家族全員がバリツバリな古代ベルカな大家族だよ」

## 第29話 決意する王（後書き）

楚良「あ、あとがき「一ノ一」

アレン「あれ？なんか元気ないですね」

楚良「いや、スランプが治つてないだけだ。まあ、『DOG DA YS FOX』の方は全然大丈夫だが」

アレン「開始したてはたいてい調子良いですもんね」

楚良「とつあえず今回は手短に済ませるー早速次回予告だー」

アレン「はいはい。

ついに合宿も終了。ようやくリッシュドに帰ってきた。

アレンはとある発見をし、各々が修行に移る。

全員が個別の指導を受ける中アレンは驚くべき行動にでた・・・

「...」

楚良「えー、現在もアンケートは募集中です。ちなみにメッセージでも数件来ているのでメッセージでもかまいません。感想欄でもかまいません」

アレン「誤字脱字もあつたらお願ひしますね。感想は大歓迎!と言 うかほしいと思つてるぐらい、だそうです!」

楚良「それとアンケートの終了期間を決めました。今週一杯です。 日曜日の夕方5時までにしたいと思います」

アレン「では、懲り氣味ですが」

楚良「また次回」

楚良&アレン「まつたね～」

### 第30話 王の方舟

4日間の異世界合宿がようやく終了した。  
現在ミッドの次元空港にいる。

「僕だけ手ぶらって・・・なんか、あれじゃない?」

「いや、俺に言われても・・・」

運動用の服を着たアレン一人だけ手ぶら。

まあ、聖王教会での戦闘中のさなか、事故で次元移動してしまったのだ。準備する時間があるわけもない上に、行くつもりはなかったのだからしようがない。

「まあ、明日からも特訓で大変だと思つけど」

4日間の合宿内で決まったインター・ミドル出場。まずは地区ごとに選考会を行い、その次に予選。そこで『ノービスクラス』と『エリートクラス』に分けられる。ちなみに選考会で優秀だったり、過去に入賞歴がある者はエリートクラスに入ることとなるらしい。

予選は勝ち抜き。

そこで地区代表を決め、中央17区の20人 + 前回の都市本戦の優勝者の21名でようやく都市本戦となる。

さらに都市本戦から世界代表戦もあるのだが、それは夢のまた夢。それでもそこまで行き、優勝すれば『次元世界最強』となる。

しかし、リリミシード中央は激戦区。

そうやすやすと予選や都市本戦で勝ち進めるはずがない。

アインハルトがノーヴェに率直な感想を聞くと当然の言葉が返ってきた。

「アレンとアインハルト以外の4人は地区予選前半まで、ノービスならまだしも、エリートじゃ手も足も出ない」

まずは同一年4人組。

実力はないわけではないが、やはり上には上がいる。

激戦区のミッド中央で挑むのならばなおさらだ。

「アインハルトはいいとこ地区予選の真ん中辺りまで。エリートで勝ち抜くのは難しいだろうな。そしてアレンだが……」

アインハルトもほとんど同じ。

少し上なだけだった。

そしてアレン。

チラッとノーヴェが見てくるが、アレン自身もビックセ同様内容だと思っていた。

「左目に頼つても地区予選はギリギリ上位。頼らなければアインハルトと同じってここだな」

やはりほぼ同じ。

他のみんなよりも少し上。

それでも都市本戦は無理だ。

だが、あくまでこれは今の状態での話。

これから予選までの2カ月間、全力で鍛えればどうなるかわからな  
い。

ノーヴェ自身は「あたし予想をひっくり返せ」だそうだ。

「アレン以外の他の奴らには基礎メニューを送るから、それをやること。アレンはコウさんに教えてもらつと思つが、あたしに協力できる」ということがあれば遠慮なく言つてくれ

「あ、はい」

合宿中に作った基礎メニューをアレン以外のデバイスに送った。  
基礎トレは今まで以上の量を。そこからさらに個人の特技の徹底強化となつていて。

コロナはゴーレム召喚と操作の精度向上。

リオは独自の『春光拳』と炎、雷一つの魔法の徹底強化と武器戦闘。  
ジャンは刀での剣術の鍛練と、雷の強化と操作精度向上。  
ヴィヴィオは格闘戦技全体のスキルアップとカウンター・ブローの秘密特訓。

そしてアインハルトは霸王流の型を崩さないようひとこと、公式試合経験のあるスーパー相手を山ほどやることに。自分で必要なものをつかむのが一番らしい。

唯一残つたアレンもアインハルトと同じ。  
ユウに教えてもらつところが違つが、まあ、さほど変わりはないだ  
ろづ。

さらにアレンは左手は爪が邪魔で握れないため、ストライクアーツなどには向かない。

そこから考えると、アインハルトと同じで自分で何かをつかむのがいいということになつた。

「母さん」

「ん?」

「次元移動の許可、ほしいんだ」

「・・・え?」

side out

(僕の考えじや、たぶん出来るはずだ。事故で次元移動できたんだ  
し、自分の意志でも行けるよね)

解散後、家でゆっくりしていた。

学校にもようやく行けると連絡し、ミウラにもメールで完治したこ  
とを報告した。

ユウいわく、次元移動許可は明日にはとれるらしい。  
まあ、そんなに早く取れても困るので、今はちょっとした休憩の様  
なもの。

疲れを取るには十分だ。

(家にピアノはないけど、大丈夫かな?というか、僕はなんであの  
唄を知っていたんだ?)

アレンが考えていたのはあの白い何かと子守唄。

『騎士狩』との戦闘中、あれを使って次元移動した。

そらく1日中2日中の朝に弾いたピアノとなぜか歌うことが  
できた子守唄。

自分の言つこと聞く、と言つことは操作ができるんじゃないかな。  
そう思つたアレンはユウに次元移動許可をとつてもう一つとした  
のだ。

「へへ」

なんとなく、思いついたように頭を口ずるわ。  
最初の方だけを何の気なしに歌い始めると……。

「・・・ええ」

頭の上にいたティム・キャンパーも驚き。  
アレン本人は驚きを通り越して呆けていた。  
なぜなら頭を口ずさんただけであの白い何かが出てきたのだから。

「・・・は、入れる・・・のかな?」

きょりきょりと、誰もいないことを確認。

そーっと手を伸ばし、その手は中に入ってしまった。

「ティム・・・入つてみよつか」

side out

「・・・変わんないね」

ユウに書置きをしてから、例の白い何かの中。

中の風景は最初に入つた時と変わらず白い建物だらけ。

何か特徴的なものもなく、静かで人気のない寂しい町のようだ。

「こは、方舟

「！？」

突然声が聞こえてきた。

いや、頭の中に響いてきたと言つた方が良かつた。

「あ、ドアノブを掴んで

どういふことかわからないが、アレンは声に従つた。  
適当なドアを選びドアノブを掴む。扉はまだ開けていない。

行きたい場所を頭に思い浮かべて、開けてみなよ  
きっと、そこに行けるはずだから

「キイイ・・・

静かにドアを開ける。

思い浮かべたのは八神家。

まだお礼も何も言つていなかつたのを思い出したからだ。

「本当に、着いた・・・

### 第30話 王の方舟（後書き）

楚良「あとがき」「——ナ——！」

アレン「今日はいつになくハイテンションで」

楚良「いや、テスト前だけど？」

アレン「勉強しましようよ！小説なんていつでも書けるんですから！」

楚良「バカ言え！テストは10分か15分前だけ本気出すもんどう！」

アレン「あー、もういいにダメ人間がいますよ」

楚良「いいんだよ。赤点さえとらなければな！」

アレン「はい、もうそれでいいです」

楚良「では早速次回予告だ！」

アレン「えー、じほんつ

方舟の力を理解したアレン。

八神家のみんなにお礼を言った後、方舟に戻った。  
声の主はいつたい誰なのか。

そして、無事家に帰れるのか・・・？」

楚良「たぶん帰れんな」

アレン「ええ！？いや、ちよ！それはないです！」

楚良「大丈夫、たぶん[冗談だ」

アレン「やつらのやめてくださいよー怖いですからー。」

楚良「まあ、いいじゃんか。ではまた次回」

楚良＆アレン「「まつたね～」」

### 第31話 王たちの時代へ

「で？なんか出来ちゃったから、挨拶をしに来たと

「はい。えっと、まだお礼言つてなかつたんで。左手はもう大丈夫ですよつて」

現在アレンはハ神家に来ていた。

幸い、はやてやザファイーラがいたため、家に入れてもうことに。ユウには、一応ティムキャンピーが使えと言わんばかりに出してきたメール機能を使って連絡済み。帰りが遅くならなければいいそうだ。

ちなみにそのメール機能。

ティムキャンピーが口を上へ向けて開け、空中投影したディスプレイを使って行うものだつたらしい。

「アレン君、なんやすい勢いでいろいろと厄介事持つてきてくれるなあ。死にかけた次はロストロギアかいな」

「あはは、す、すいません」

「まあ、別にええけどな。いつのまでは早めに言う方が得や。詳細とか教えてくれれば、教会に申請書を出しつく」

「本当、すみません。迷惑ばっかりかけて」

先ほど、今までの経緯と事情説明をしたところ。  
ロストロギア『方舟』を使ってここまで来たこと。

完璧に治つた左腕の」。合宿に行つてきた」と、他にいろいろ。

呆れられたが、同時に少し怒られた。

子供が遠慮するもんじゃない、と軽くだが言われてしまう。遠慮するな、と言われてすぐにそうできるわけではないが、アレンは極力そうできるようにしようと思つた。

「空間移動能力か。確かにそれなら事故で次元移動してまうのはわからんでもないな。もしかしたら過去にも飛べるかもしねへんし」

「過去……ですか？」

「まあ、やつちやだめやけどな」

「わ、わかつてますよ」

「ふ〜ん。なんや?なんか企んだるんな?」

アレンの顔をみたはやての眼はきらりと光つていた。

side out

時間と場所は変わり、夕方で方舟内。

八神家から帰宅するため、再び方舟の中にアレンはいた。

ね?ちゃんと田舎地に着いたでしょ

「誰ですか?姿を見せてください」

姿？うーん、難しいなあ・・・

また頭の中に響いてきた声に、返事を返す。  
どこかで聞いたことのあるようでない声だが、気になる。  
まるで自分のことを知っているかのよつな口ぶりだ。

まあ、そのうちわかるよ

「・・・わかりました。なら、一つ聞いていいですか？」

何かな？

「『』の方舟で、過去とか、いろんな世界に行くことはできますか？」

うん、行けるよ。でもアレンが行ったことのある場所じゃないと無理

返ってきた返事は、予想を斜め上を行くものだった。  
行けるには行ける。だが行つたことがないと無理。

それじゃあ、行けない事と同義なため、アレンは諦めようとした。

聞きたいことも聞いたし、返りつつ。

そう思い、ドアノブに手をかけた時だった。

それでも、私がいれば行けないこともないよ

「・・・また明日、来ます」

うん、待ってるよ

翌日。

昨日、帰宅するとコウは夕食を作っている最中だった。

夕食中にその日の出来事を説明。

方舟のことも説明し、インター・ミドルへ向けて異世界で修行をしようと考えていたことも話した。

次元移動許可是そのためだつたのかと納得してもらえたようだ。

さらに今日は久しぶりに学校だった。

約1ヶ月ほど行ってないため、クラスのみんなが忘れていないか少し不安だったが、行つたら行つたで意外に大丈夫だった。

事故にあつた、と先生から言われていたらしく、みんな心配してくれていた。左目のことと言われたが、怪我が目立たないようにしたと誤魔化した。

特に問題なしかと思われたが、クラス内ではインター・ミドルの話が出てきていた。クラスで出場する人も何人かいるらしい。AINNHALTと、ライバルが増えたと少し苦笑いした。  
まあ、2人とも負ける気なんてさらさらないが。

「あと2カ月間、死ぬ氣で特訓しなきゃね」

「負けられませんからね。でも、アレンさんはどうするんです?」

「ちょっとした秘策がね」

「秘策？」

「うん、秘策」

アレンの言う秘策とは方舟のことだ。

はやてに過去に行くことを止められたが、過去じゃなければOK。  
どこか異世界に行つて修行する気なのだ。

そして少し前に学校が終わり、今は昨日と同じように方舟内にいる。  
先ほど入ったばかりで、中心地に見えた塔の中へ向かつて歩いていた。

ちなみに格好は前の合宿時に来ていた運動用の服。  
すぐに特訓を始められるようにと準備は万端。  
ティム・キャンピーもアレンの頭の上で待機していた。

じゃあ、説明するよ

「お願いします」

頭の中に響く声の主の説明が始まつた。

簡潔に言つと、この声の主は方舟の管理者。

そのためさまざまな場所へ行つたことがあるらしい。

さらにこの方舟は、行つたことのある場所の過去に行くことができる。

通常なら、行つたことのない場所や、その場所の過去には行けない  
のだが、管理者権限を使いドアの向こう側を行きたい場所へつなげ

る事でいろいろな所へ行けるようになる。ぶつりやけてしまえば、アレンが行ったことがない場所でも行けてしまつと言つことだ。

「なら

「

ただし、行く先は私が決める

「な!?」

方舟を使わせてあげるんだから、そのくらいはいいでしょ?  
修行にもなるし、なにより私の正体がわかるよ

「あなたは、方舟の管理者じゃないんですか?」

そうだけど、そうじゃない。行けば分かるって

「・・・わかりました。行先はどこなんですか?」

「行先は・・・

古代ベルカ。聖王と霸王、騎士王たちがいる時代だよ

### 第31話 王たちの時代へ（後書き）

楚良「あとがわ」「——！」

アレン「今回はずいぶんとハイテンションですね。何かいいことでも？」

楚良「先々週ぐらいだが、テストが終わったー赤点はないーひとつは補修もなにもないー！」

アレン「お、おお。なんか今回は頑張ったんじゃ？」

楚良「そんな話は置いといて、次回から古代ベルカ編だ！」

アレン「飛行魔法はデフォルトで覚えてるつーんですけど？」

楚良「さあー過去の海鳴編では使えるんじゃない？他の人のをコピーーして」

アレン「僕はすでにコピーーがデフォルトなんですかー？何でもかんでもコピーすりや良いつてもんじゃないですよー？」

楚良「いいんだよ。たぶん」

アレン「たぶんで大丈夫なんですかー？」

楚良「まあ、それはその時になつてのお楽しみつてやつだ。それと次回予告よひしへー！」

アレン「話がかみ合つてない！・・・もう

方舟を使い、古代ベルカへ飛ぶアレン。

そこで出会うのは過去の歴戦の王たち。  
そして出会うべきではない第2騎士王の2人が出会う・・・！」

楚良「えつと・・・誤字脱字、感想あればお願ひします」

アレン「もう、お便り募集はやめたんですね」

楚良「全然来ないからね。一応いつでもまつてます」

アレン「そ、そうですか。では、また次回」

楚良&アレン「「まつたね～」」

### 第32話 過去の3人の王

「……」

方舟のドアを開け、見知らぬ場所に来たアレン。

管理者の行先は良く聞こえなかつたため、どこなのかわからない。

空は雲で覆われ、暗い。

雨が降り出しそうだが、たぶん振らないだろう。

さらに周りに見えるのは草むら。

だがどこからか煙のにおいがする。

ティムキヤンピーもどこかに行つてしまつていない。  
はつきり言つてイヤな予感しかしなかつた。

「つー? うわ! ?」

「外したか。不意打ちだつたのに、意外にすばしっこいな」

「・・・」

突然攻撃が仕掛けられた。

放たれた斬撃を間一髪のところで避け、顔を確認するが誰かわから  
ない。

さらにはいつ発動させたかもわからないが、黑白道化が発動してい  
る。

田の前にいるのは白いアレンとは対照的な黒い剣士。いや、騎士。  
手に持つ剣も黒く、漆黒という言葉がぴったりだった。

「ネア？いや、違つた。ネアはそんなに小さくない。貴様、何者だ？」

「何のことですか？」

「刃を切るつもりか。まあ、いい。貴様はここで倒す！」

ガキイツ！！

左手と黒い剣がぶつかる。

「貴様、その左腕は何だ？」

「僕のレスキル『黑白道化<sup>クワガタ</sup>』です。というか、いきなり攻撃を仕掛けてくるって言つのは非常識なんぢやないですか？」

「はつ、戦場でそんな甘つたれたことを言つとは！騎士ですらないな！」

鎧迫り合いをやめ、距離をとる。

左目が発動しているが全く読めない。

この騎士の強さは確実にシグナム以上だとわかつた。

そんなことを考えていると、相手は居合の構えに入った。鞘に納めてはいないが、魔力が溜まつていいくのがわかる。そしてその巨大な一撃は放たれた。

「サンダー・・・レイジー！」

フェイトに教わった雷撃変換を使い迎撃する。相殺、とまでは行かなかつたが、威力を弱めることには成功。一瞬のうちにソニックムーヴで回避した。

「甘いな」

「！？」

ザシユツ

アレンの右腕に痛みが走った。

急いでかわしたが、少し深めに掠つてしまつたのだろう。爪のついた左手で押さえながら、アレンは逃げ出した。

今の自分では勝てない。

それを認めるしかないアレンが生き延びるにはこれしかなかったのだ。だがそれ以前に驚いたことがある。

相手は殺傷設定で闘つていた。

通常、非殺傷設定なら攻撃を受けても黑白道化の袖が破れる程度だ。怪我を負わせるとまでは絶対に行かない。だが殺傷設定ならばどうだろう。いとも簡単に相手を傷つけることができる。

「逃がさん！」

黒い騎士は、アレンが逃げた森の中まで追つてきた。まるで狙つた獲物は必ず逃がさない狩人だ。騎士狩を思い出してしうがない。

そんなことはどうでもよかつた。ティムキヤンピーのいない今、アレンはセットアップできない。デバイスがあるのとないのでは結構違うのだ。

「はつ！」

「つあ……」

放たれた斬撃が、アレンの左脚をとらえる。森を抜け、開けた場所に出てきたが、これは失敗だった。左足も負傷し、逃げることも不可能。ここでアレンは死を覚悟した。

「おやめなさい、クロ」

「オリヴィエ様」

「あなたは子供を手にかけるのですか？」

「い、いえ。ですが、怪しいものでしたので」

「第1騎士王の名が聞いてあきれますね。あなたはどう思いますか、ネア」

「そうですね。こんな、子供に手をかける……なんて……」

「ネア？」

「・・・」

アレンは、出てきた人物たちを見て、名を聞いて驚愕した。古代ベルカの文献や、ルーテシアの家で見た本を見て知ったその顔。友達の、母の、そして何よりも自分の祖先。

第1騎士王『クロ』

第2騎士王『ネア』

そして聖王『オリヴィエ』

目の前にはその3人が立っている。

言葉も出ず、唖然とするしかなかった。

対して、第2騎士王ネアも驚いていた。  
自分と同じ姿、自分と同じ左手、自分と同じ呪い。  
全てが同じで、怖いくらいだ。

はつきり言って、少し気持ち悪かった。  
だが、こんな子供が殺されるのは見たくない。  
その思いから、ネアはある行動に出た。

(君、名前は?)

(つー?ア、アレンです!)

(そう。じゃあアレン、話を合わせて)

(は、はい・・・)

アレンを助けよう。

誤魔化し方も、すでに考えてある。  
そしてすぐさま実行した。

「クロ! あなた、なに人の弟殺そうとしちゃってくれてんのよ!」

「な、はあー？お、弟！？お、お前にかー？」

「やつよー！」の前、じつちに来るようゴーレムで手紙送ったの！  
そしたらタイミングの悪いことに戦が入って、このままー！」の子、  
巻き込まれただけよー！」

「な、何イー？う・・・す、すまんな。ネアの弟だとはいづ知らず、命を奪おうとしてしまって・・・つて、おい！大丈夫か！？」

気がつくと、アレンは倒れていた。

いや、先ほどから倒れてはいたのだが、上半身だけは起きていた。  
そして今はぐつたり、力なく倒れている。

クロとネアが心配するが返事は返つてこない。  
一瞬だけアレンが見たのは、曇った空の隙間から見えた太陽だった。

### 第32話 過去の3人の王（後書き）

楚良「あとがわ」「一ナーラ」

アレン「こやあー、ついに古代ベルカ編、開始ですね」

楚良「あう。ちなみにこの時代で闇の書の主とウォルケンズを出そ  
うか迷つてこるところ」

アレン「あー、なんだか微妙ですね。A-s編でシグナムさんを師  
匠にしておひたすらのこ、この時代でも余つて・・・」

楚良「まあ、そこいら辺は後々決めようと想つ。今はどのタイミング  
で『黑白道化』から『神の道化』にパワーアップさせるか迷つて  
いるんだ」

アレン「迷いすぎですね。人生迷子だらけなんじゃ？」

楚良「俺は常に迷子やー。（キリッ）

アレン「自信満々に言われても・・・」

楚良「そあ、次回予告だ！」

アレン「最近僕しかやつてない気が・・・

田が覚めたアレンが見たのは、古代ベルカの土地。  
さらに同じ第2騎士王であるネア。

そしてアレンはかつての霸王『クラウス』に出会つ・・・」

楚良「ちなみに後数話でアレンが（容姿的な意味で）よつやくオリキャラつぱくになります」

「アレン、『じつこいつ』の意味ですか、それ！？」

楚良「そのうち乗せるであろう挿入絵がカギだ。読者の皆さんをお楽しみに！」

アレン「気になるんですけど…教えてください…」

楚良「誤字脱字、感想あればお願ひします。では、また次回」

アレン「まつたね～・・・って、なんで今回だけ僕なんですか！」

楚良「イヤ、なんとなく」

### 第33話 翡翠クラウス（前書き）

今回は子守唄が出ます。

やつぱり歌詞の部分は「～～～」となりますね。

なので十四番目の子守唄を脳内再生でお願いします。

### 第33話 翡翠クラウス

目が覚めると、そこは知らない場所だった。  
アレンは気を失う前の事を思い出した。

古代ベルカの3人の王と出会った。  
そのうちの一人には殺されかけた。  
ネアに助けられたけど、その後が覚えてない。

「起きたみたいね」

ドアが開けられ、起きたアレンを見たネアが声をかける。  
それに少しばかり驚きながらアレンも返事をした。

「そ、いろいろ説明してもらひわよ。助けてあげたんだから、その  
くらいいいでしょ？」

「・・・わかりました」

説明をするしかない。

だがその前にここがどこだか聞いた。  
どうせわかつっていた。ここがどこのか知っていたが、聞く必要があつたのだ。

「ベルカ。まさかわからないとでもいつつもり？」

「いえ、知っています。ただ、僕からすれば古代の土地ですけど」

「どういう意味？」

「簡単に言つと、僕ははるか先の未来から来た者です」

side out

少し長く、ゆっくりとアレンはネアに説明した。  
自分の正体、どこから来たか。  
どうやつてきたか、どうしてあそこについたか。  
全部話した。

逆にネアからもいろいろ聞いた。

何とアレンとここまで経緯が同じだそうだと。  
ビックリ通り越して呆れてしまう。

そして先ほど、アレンの方舟を使って戻りうとした時だった。  
頭の中で唄の歌詞を唱えても、ゲートが出てこないのだ。

ネアの方舟では、ミッドに行つたことがないから無理。

そもそも、方舟には未来に行く能力はないのだ。

未来から過去に来て、未来に戻るは出来ても、過去から未来に行く  
といつのは無理。つまりは帰るすべがなくなってしまったのだ。

「これからどうしたらいいかなあ・・・」

「やうね

「話は聞かせてもらつたぞ、ネア」

「「え？」」

いつも間にか部屋にいた男性が声を出した。  
その人物をアレンは見たときにまた驚愕した。

碧銀の髪。

紫と青のオッドアイ。

本で見た見た田とほぼ同じ。

霸王『クラウス』その人だった。

「ク、クラウス様！？」

「様は付けるなと毎回言つているだろ？。それと、アレン」

「は、はいっ！」

「そつ身構えなくてもいい。聞けば方舟のゲートが開かないそうだ  
な」

「はい。頭の中で歌つても、出できませんでした」

「ふむ。では、声に出して歌つてみるといい。それとピアノも必要  
だな。では、行くとしよう」

「あ、クラウス様  
じゃなくて、クラウス。いつたい何をする気？」

「いいや、なにも。ただ試せることは試すに越したことはないだろ  
う？なあ、アレン」

「・・・やつですね。やれることはやつましょ」

早速部屋から出て、クラウスの後をついていくアレン。ネアもその後に続き、ピアノのある部屋へと向かった。

途中、クラウスと話をした。

本で見た感じとは全然違い、とても優しい。

最初はお堅い人の様な想像をしていたアレンにとつては、驚きだつた。古代ベルカの大地に霸を成したから、もつと戦いが大好きな人だと思っていた。

だが、そんなことはなかつた。

優しく、誰にでも笑顔で。

厳しい時もあるが、しつかりと見ている。まるでどこにでもいる父親だ。

そう思つたアレンはネアはつぐづく同じかもしない。ネアもクラウスを最初に見たときそう思つたのだから。

話を戻し、よつやく到着。

扉を開くと、白いピアノがぽつりと一つ。まるで最初にピアノを弾いた時と同じだ。

「あ、ティム！」

最初に気付いたのは、アレンだつた。

ピアノの上に羽をおろしているゴーレムを見て、すぐに自分のデバイスだと確認する。金色のゴーレムなんてティムキャンピーしか見ていないのだから。

他の色と言えば黒色ぐらこだらう。

名前を呼ばれたティムキャンピーは、すぐこアレン元へ飛んだ。頭の上にちょこんととまり、また羽をおろしている。

よっぽど寂しかったのだろうか、小さく腕でアレンの髪の毛を掴んでいた。

「ああ、アレン」

「あ、はい」

クラウスに言われ、ピアノの前に立つ。

頭に浮かんできた楽譜で、ゆっくりとピアノを弾いた。

「~~~~~

唄を歌う。

ピアノを弾く。

どうしてその一つだけで涙が出るのか。

その一つがそううとい、なんでか涙があふれ出してしうがなかつた。

優しい歌なのに、涙が出るなんて間違つてゐる。

別に嬉しくて泣いているわけじゃない。

かなしくて泣いてるわけじゃない。

ただ泣いているだけなんだ。

「出できて、方舟・・・」

寂しくそう呟いた時だつた。

目の前を、ピアノを挟んでゲートが出てきた。

アレンの言葉に反応してできたのだ。

「ええー」

「つまくこつたようだな」

「みたいですね・・・」

「では、一度戻ると良い」

「え?」

「強くなりたいのなら、ならば準備をしてくるんだ。私とネアが稽古を付けよ!」

「・・・はいっ!」

side out

過去の古代ベルカから未来のミッドに戻ると、すでに夕方だった。今更思い出せば古代ベルカの方でも夕方だった気がする。そう思いながらも、家に入った。

「あ、お帰り。特訓、どうだった?」

「えっと、いったん戻つてきただけで、すぐまた行つて来るよ。忘れ物があつてね」

家にはやはりユウがいた。

古代ベルカに行つていた、なんて言えるはずもなく。

適当に「まかし、自分の部屋へ向かう。  
ちなみに夕食はまだ作っていないようだ。

準備、といつても明日の準備だ。

どうせ夜までやるんだろうと思つたアレンは、今のつづいて明日の学校の準備を済ませてから行こうと思つた。毎日出発する前にしているが、たまにはこいつのも良いかもしれない。

「もうだ、夕食どうするの？」

「ああ、そつか。まあ、自分で何とかするよ」

「うう。行つてしまおう」

「行つてらっしゃい」

### 第33話 眇王クラウス（後書き）

今回はパソコンが使えず、携帯からなのであとがきはなしです。

次回は本格的に特訓開始。

クラウスさんはなにを教えるのかな？

誤字脱字、感想あればお願いします。

## 第3・4話 騎士王の変化（前書き）

前回のあとがきで書いた予告とは違つて予定変更。  
今回は珍しく学校の話。

インター「ミドル」に出るオリキャラが数人出ます。

後、久々に挿入絵あります。

あの黒くて大きな槌を使うキャラも・・・。

## 第3・4話 騎士王の変化

「アインハルト、おはよー」

「おはよーひやごまゆ」

異世界合宿から帰ってきて早一週間。

インター＝ミドルへ向けての特訓はみな順調。

今日もいつも通り学校だ。

「うーん、一時限目は体育か。また後でになるね」

「そうですね。では、失礼します」

「うん」

アレンの言葉通り、体育なので女子は更衣室へ移動。

男子はそのままクラス内で着替えることになっている。

女子が全員クラスから出るのを確認し、男子達は着替えを始めた。アレンも早めに着替えようと、服を脱ぎ始める。

その時、声をかけられた。

「お前、結構ストラトスと仲いいけど、何かあった？」

「別に、なにもありませんよ」

話しかけてきたのは、クラス一のお調子者（？）ラビ・ウェズリーだった。

名字からしてリオの兄。兄弟そろって炎雷変換を持っていて、インター＝ドルに出場予定。こんなお調子者なのに記憶力が半端なくすごいこと言ひ特技がある。

「嘘付けやい。ストラトス、お前と話してるときめちゃ楽しそうだし。絶対なんかあつただろ」

「いい加減にしないとインター＝ドルに出る前にたたきつぶしますよー。」

「おお、怖い。といつかせー、その敬語やめね? 同い年なんだし、もつと気軽にこいつら」

「・・・面倒なので嫌です

「なんでー? ストラトスとは普通に喋つて、俺らとは敬語つておかしくねー?」

「全面スルーはもつとひどいさあーー!」

side out

場所は変わって外。

現在中等科1年の体育の授業中。

授業、といつても基本自由。

好きなことをやって体を動かせだそつだ。

「インター＝ミドル組でなにをやるか。悩みどり」<sup>あひり</sup> わあ

1人腕を組み、うんうんと悩むラビ。  
別に何かしないといけないと言つて歌でもないのに、悩む必要はあるのか。

しかし、なにもせずぼーっと過ごすのもつまらない。  
はつきり言つてしまえば、優柔不断な状況なのだ。

「なんでもラビはあんなに悩んでんの？」

「さあ。たぶん、仕切りたいんですよ。ああいうキャラだから」

「ああ、なるほど」

「セレオー・ヒートンもー」

「あ、地獄耳みたいね」

「やのよつで」

「スルーだけはやめてって言つてるわあーーー！」

今のところ、なにもしていないのはインター＝ミドル組の4人のみ。  
ラビ、インハルト、アレンにもう一人。

先ほどアレンと話していた少女 ハミリア・ストリー・ミング。愛称はエミー。お菓子作りが得意だと言つ自己紹介がアレンの中にはあつた。

外見からだと元気そうで、それ以外想像できないと言つたら殴られるだろ？

「まつたく。で、何やるか決まったの？」

「もう。とりあえず全員で乱戦でもしようぜ」

「……」

ラビがバカ発言したため、全員が固まる。

学校でそんなことしたら校舎が壊れるだろ。

ましてや外だ。他の生徒の迷惑にもなるし、クレーターを作りかねない。

しかもそんなことになつたら先生からのお叱りだけでは済まず、親も呼び出されるだろう。そうなつたら家に帰つた後もお叱り決定だ。

3人の考えがなにも言わざとも一致し、ラビを置いてすたすた歩く。後ろで何か言つているが、これ以上付き合つてたら限がないのでスルーすることにした。

「あれ、いなー？」

「いじけでどこかに行つてしまわれたのでしょうか？」

「まあ、変な」とたれると黙りしだと黙つよ

「やつでしょつか

「やつだよ」

しかし、結局はまたなにもせず。

しうがないのでアインハルトとヒリーは組み手を。

アレンは一人でトレーニングをする事にしていた。

だがさすがにずっと同じことをしてると飽かる。

そう思いながら、なにをしようか迷つてゐる時だった。

「おーい、許可もらひにきたやー！」

「「「え」」」

「どこへ行けだからやるやー。」

「こやこやこやー。やせつけたのー？そんな許可、普通は出ないわよー！」

「バカ言え。先生たちの弱みぐらじ、既にここの中にしまつてあるのやー。」

そう言いながら自分の頭を指さす。

ラビの特技は言わずもがな超記憶能力。

例えちょっとしたことでも頭の中などめておくことができるのだ。その記憶の中に先生たちの弱みが入つてゐるのだから。

それを使って無理やり許可を貰つたのだ。

口を開け、呆けているヒリーだったが、2人は違つた。アレンはやつぱりかあ、と言いたげな表情で頭を抱え、アインハルトは少しばかしどすればいいかわからずおどおどしていた。

「だから、まずはアレンーお前からだー。」

「ええっ・・・むう、仕方ないですね。ティム」

「やる気なんたなあ。行くぞルナ！」

『 yes.』

アレンとラビはバリアジャケット姿になり、構える。ラビは黒いハンマー型のアームドデバイス。バリアジャケットは同じようにクロメインのものだ。

対してアレンは、前の団服の様な姿ではなく、薄いスピード重視なバリアジャケットに変更され、その上から黑白道化のマントで防御を高めるよつになつていた。

しかも大人モードも使ってない。これら全ては古代ベルカでネアとクラウスに言われてやつたことだ。

「怖ー！なにその左腕と左目！怖ー！」

「・・・（やつぱり、やつなるみね・・・）」

「でも、かつこここなー！」

「やうだよね、やつぱり怖  
え？

「いや、かつこここってーH//Hやみんなもやつぱりだろ？

「やうね。結構いいと思つわ。それに髪型変わるあたりもまた

「・・・やつか。じゃあ、ラビ」

「おう。かかるて来い！」

「なら、早速」

「へ？」

「ブウンシ！」

すごい勢いで、風を斬る音が聞こえた。

それと同時にアレンの姿は消え、全員が驚く。

そしてあわやあわやと探そうとしている時だった。

ガツ、ドシャツー！

いきなりアレンがラビの後ろに現れ、首根っこを掴んだまま地面に倒していた。

いや、それよりもみんなにが起きたかわかっていない。

唯一理解できたのはアインハルトとヒミーぐらいだ。

「ソニックムーヴ。もう完璧に使えるよになつたんですね」

「うん。とある人にいろいろ教えてもらつてね」

「そんなことよつた。早くじてくんね。動けねえんだけど」

「ああ、すいません。忘れてました」

「お前絶対わざとだあ！－！」

この後、先ほどの予定通り乱戦になった。

結果は見事アレンとアインハルトの一騎打ちで終了。

アレンいわく、公式試合でリベンジしたいからだそつだ。

ちなみにお互いが最速で残った2人を倒したおかげで被害は最小限。校舎はおろか、クレーターもなにも出来ていない。

まあ、不意打ちだったので当然と言えば当然だが。

授業が終わつた後、2人は先生たちにお礼を言われたとか何とか。

s i d e o u t

翌日。

昨日も学校から帰つた後は方舟を使い、古代ベルカへ行き、ネアとクラウス、クロやオリヴィ工達に酷いぐらいまでしごかれた。

おかげで毎朝、疲れがたまつてゐる状態。

授業中、ちょくちょく寝て体力回復してゐるので大丈夫だが、これ以上ひどくなるのはあまり良くないだろう。

アレンは起床し、眼をこすりながら洗面所を経向かう。  
そして鏡を見た瞬間、一気に目が覚めた。

「な、なんじやこじや――――!――!

### 第34話 騎士王の変化（後書き）

楚良「あとがわ」「一ナーハー」

アレン「前回は、どうできなかつたんですか？」

楚良「親と共同で使つてから、使えなかつたのだ」

アレン「ううですか。まあ、挿入絵を描く時間が取れたからよかつたじゃないですか」

楚良「ああ、おかげで数枚ぐらースタックが溜まつた」

アレン「で、今回の最後のあれですが」

楚良「髪、めひちや長いだらうへ」

アレン「えすぎですよーなんであんなに長いんですか！？」

楚良「ネアヒの凶別。胸があるとなじて何か微妙だから、いつも」といふと、楚良は、次回予告じてなつたのだ

アレン「理不気ですー」

楚良「いいんだよ。俺がルールだーつてね」

アレン「王様つながりでも駄目ですか？」

楚良「ひつ、なじたさと次回予告じよ

アレン「なんでそんなめんどくさそうなんですか！？まあ、いいです。

突如髪が異様に長くなってしまったアレン。

それは古代ベルカの先祖、ネアの陰謀だった。

他の王も笑って過ごす中、1人疑問を抱く人が・・・。

その人物はいつたい誰なのか・・・」

楚良「いや、知らん」

アレン「あなたが書くんだからあなたが知らないでじつはあるんです！」

楚良「大丈夫だ。あ、後、次回も挿入絵ありますかもです」

アレン「話を逸らされた・・・」

楚良「誤字脱字、感想もあればお願ひします」

アレン「うわあー、今度は全面スルーだあー」

楚良「おい、いじけるなって。みたらしやるから」

アレン「わかりました。では、また次回」

楚良＆アレン「「まつたね～」」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0590v/>

---

魔法少女リリカルなのはvivid 銀の左手

2011年12月25日12時48分発行